

て、何れであるかを質ねると、蕃人であると答えて、「馬鹿にしてもらいますまい」といふやうな表情をするのを見るのは愉快であつた。私の在臺は、理蕃事業の一先づ完了した後であつた。そして私の訪ねることの出来た蕃社は、何れも全く統御された、いはゞ化に浴してゐる族のものであつた。そこで彼等は蕃人なるものを内地人と本島人（臺灣人をかう呼ぶ）の中間のものに考へてゐた。未化の蕃人達は自らを日本人以上と思つてゐるであらう。私はこの點に關して彼等を愛する。政治と自身の生活を離れ離れのものとして生活して、ひたすらに自分の存在を世界としてゐる漢人族に對照して、この感が深い。實質を伴はない自負心、空虚なるブライドはこの上もなく見苦しいものである。表面に出る自負心といふものは兎角に見苦しい類のものであることは事實である。徒らに歴史の久しきを誇り、過去の光輝を誇つて自負するが如き民族は憐れむべきである。蕃人の場合に、兇暴ならざる豪勇と、自負が貴いものに思ふ。蕃人は適切な誘導を與へて、彼等としての適切なる發達をなさしむべきである。併し保護も誘導も、その種族の格質如何によつて可能であり、或は無益である。世界各地に保護誘導がそれ等の衰亡を抑止し得ない憐れな種族が數多くある。そして白人達は、兇暴な手段をさんざん行なつて、自分等の欲望を達した揚句に、人道、人間愛などいふ言葉を擔ぎ出したり、そんなも

のでカムフラージしようとしてゐる場合も多い。また既に保護誘導の期を失したものもある筈である。また格質が劣等であり、發達の土臺となるべき格質の缺けてゐる種族は如何とも爲し得るわけのものでない。大和民族のもとにある生蕃種族は、是非とも彼等にとつての適切な發達を爲さしめて、國家の独自の良成員群としたいものである。而して彼等の格質に於て、將來に望をかけるに足る蕃人としての良格質が見出されることを、私は愉快に感ずるのである。

頭と身の冠と儒服、足の履。これ等を儒學教育の秀才の表徴と自身には決めてゐても、儒學の世界を離れては、裝飾以外の何でもない。身邊の裝飾としては、履こそはないが、蕃人達にはそれぞれの蕃族に固有な誇りとする美々たる装具がある。それ等は彼等にとつて誇りであるに相違ない。半裸の同族以外に人間を知らぬ離島の人間でない以上、蔑視する支那人の儒服そのものに尊敬の念をもたなかつたと想像しても無理はない。儒學を理解した者がそれを體得した者の表徴として見てこそ價値のある儒服である。衣冠、儒服、書笈を負つた侍者といふ道具立は、支那人に墮落したと見てゐる社中同族の前で、成功ではなかつたであらう。いつか私は夕刻の混雑時刻に新宿の通りを歩つて、横通りの角に來た。そこへ横町から自動車が出て來て

行人の横断を遮つた。自動車は次々と續いて、數十人の群集がたまつた。その何臺目かの車に私立大學の書生が乗つてゐた。それを見た群集中の一人がチェと舌うちをして敢然とその車前を遮つてそれを止め、群集は横町を渡つた。内心愉快を感じたのは私ばかりではなかつたであらう。ものをいふのは殻ではなくて實質なのである。

この場合に於ける経過の齟齬の根本は、組合はされた對向側の間隔のあまりに大であつたことにある。文字のない原始種族と孔孟の道、兩者を結びつけるのにあまりに大きい隔りが有つた。支那政治と庶民（殆んど國民の全部といつてよい程に多數の）とが別々離れ離れの存在であつたやうに、その文化は庶民のものではなかつた。儒學、儒道といつたところで、庶民のものではなかつた。我國では徳川時代即ち庶民が頭をもたげた時代に、心學といふ貴いものが興つた。私は無知であるが、これは儒學の發達の結果として生じたものではなくして、儒學に缺陷があつたから興つたものであるやうに考へられる。

清朝の臺灣統治者は、イラントワロに與へる教育として、儒學以外のものを持合せはなかつたのであらう。無理もないことである。併し劉銘傳時代の臺灣でのこの事と餘り隔りの大きくないことが、現下の我國などの人達の頭に無いだらうか。この位で筆を擱く。

原始種族を想ふ

私は先頃中、年來志しつゝあつた人間生物學に就て書く機会を與へられて、少しばかり長文の一篇を書いて、そのなかで、民族と生物の類族の壽命、發育、消滅等に於けるパラレリズムの問題を取扱つてみた。そして更めて原始民族に愛着の情を懷いた。それを仕上げて數日の夏季休暇をとる爲に房州への逃避行を豫定してゐた。そこへ、近く出來上るまでに進行した隨筆集の表紙に何か繪をつけようといふ話が出て、私が最も興味と愛着を感じてゐる、ニュージールランドのマオリ族の彫刻像の首とその工藝品を圖案化したものを選んで出立して行つた。その數日前の颯風は房州海岸を可なりひどく荒らした。さゝやかな私の逃避所も數年來例のないほどの荒らされ方であつた。私は例によつて、直ちに禪一つの裸で斧、鋸、鋏などを持出して働らいた。私は東京にゐても夏季は屋内では上半身は裸であるが、屋外ではさういふわけに行か

ない。房州では五月頃から十月頃まで荒い海風に吹かれ、強い日光に照られ、或は小雨に打たれて、裸體生活の無類の快味を満喫する。雑草や小枝を一日乾かして、それ等を夕暮に燃やす。眞白い煙が海邊の空氣の流動に揺られて、小さい家とその四周に勝手氣儘に濛々と流れ廻はるのが、これまた無上の快味である。晴れたり、降つたりの日が二日續いた晩に、思ひがけぬ客が東京からあつた。意外にも數日中に原稿を書けといふのである。東京から原稿依頼の來客があるやうでは逃避にはならぬ。迷惑千萬な話である。ところでその注文といふのは、何か原始種族に關して書けといふのである。それを聞いて私も考へてみた。樺一つで、穴を掘つて瓦の破片を埋めたり、折れ散つた小枝を焚いて風呂を沸かし、半乾きの草を焼いて濛々たる白煙を浴びて、皮膚を晩夏の日光に赤褐色に色上げしてゐる。文明社會の原始人みたいな私である。参照の資料などない田舎の假泊りに、原始種族のことなどを、思ひ浮ぶまゝに書いてみるのも、自分自身にとつては面白くないことでもない、といふ氣になつた。それで引受けて別れた。そこでぼつぼつ書き出して歸京して、約束までの一晚でこの拙篇を作り上げた。首にこのことを書いて置かぬと、私としては氣がすまない。

*「人間學講座」(理想社) II

民族の歴史の世に傳はつてゐる局面の大部分は、異民族との接觸の始末である。そこに生じた悲惨な、痛烈な或はロマンチックな舞臺面の情景、暴虐なる、勇猛なる、或は惘然たる登場者の姿は、人間の歴史に於ける最も痛烈なる局面を見せて呉れるものであつて、人間生物學の視野に於ても、盡きぬ興趣があり、また至極貴重な資料となるべきものである。

原始種族、原始種族の異種族、異民族との接觸に就て學ぶ場合に、そこで先づ吟味すべき項目を考へてみる。その第一は、接觸の經過である。第二は双方の態度並びに行爲である。而して第三は双方の格質である。接觸する兩種族、民族の態度と、兩者のそれぞれの格質によつて、その經過が決定され、またその格質によつてその經過中に獨自の特殊な情景が現出されるのである。

原始種族の異民族との接觸の始末は、三段の變化を呈して來てゐるとしてよからう。第一はそれ等同志の接觸の時期、第二は白人の暴虐なる壓伏の下に置かれた時期、第三は制御の手段が道義的に傾いて來た時期である。

人類の生成が地域的に單源であつたか、多源であつたかは、こゝでは問題にはしないことにして、極めて早い時期に人類に若干の特殊な種族の集團が生じてゐたことは認めてよい。それ等の集團は、環境の變化に伴つて、また生存の爲の物資を追つて、或は特に原因、理由といふものなしに、或はまた事故や偶然の事情で、移動し或は移動させられたことは明らかであり、その移動も相當に大きい距離に及び、稀には想像以上の長大距離のものであつたことも確かである。移動が異種族間の接觸となつたのは當然である。それ等の原始種族同志の接觸の結果は、和平的な情景のものであつた場合もあらうと思はれる。併しそれが流血的なものであつたことも多かつたに相違ない。何れにせよ、その知能に於て未だ進んで居らず、鬭争の武器として強力なものを有しなかつた筈であり、對抗者の格質並びに鬭争の裝備・手段に於て兩者の間の懸隔が著しくなかつたのであるから、流血の程度、また被制服者に對する壓服の模様も大體想像される。そして、殺戮や驅逐等もあつたであらうが、混血が大きい現象であつたと思はれる。今日人種と呼ばれるものの數は極めて多い。細かく區別すれば一卷の名彙が出来てゐるほどである。そしてそれ等のうちに純粹といふべきもの、系統の明らかかなものは少ない。現に日本民族の歴史にしても、殆んど跡づけられ得ない複雑なものやうに思はれる。而して自然の要約

による人種的形質の變化といふものは決して大きいとは考へられない。即ち人種部族の系統並びに區劃の不明明には、混血が主要な原因になつてゐるのである。

原始種族の間の接觸は近代に至るまで行なはれ、現在も行なはれてゐるであらう。併し亞米利加大陸を始めとして、世界中の新土、新島の發見時代、それ等の占有時代、續いてそれ等の産業資源として採取開發時代になつて、原始種族には地獄の時代が來た。集團、商社として乃至は王者の命令のもとに、何れにせよ、白人國家の名に於て、またそれを背景として、それ等の領土的、經濟的の目的で行なはれた、原始種族、原始民族に對する、惡虐なる行爲は限りもなく行なはれ、寧ろ行なはれざるところ無かつたでもあらう。それ等の詳細なる事實は遺憾ながら文書としては吾々に遺されて居らぬ。併し丹念に蒐集したならば相當の資料が得られるであらう。それ等の限りもなかつたであらう事實のうちに、私の如き縁の遠い者にも、手近に讀むことの出来る記事も、濠洲や亞米利加の、南米や中米の諸所に關して存してゐる。私は先頃書いた前記拙稿のうちに、英吉利人のタスマニア島のタスマニア族の殺戮、メキシコに於ける西班牙人のアステック族殺戮の事實をスケッチして置いた。これ等の悲惨この上もなき、また暴虐この上もない事實は、その事に當つた者どもの道義的精神、人類觀の上では正當なもので

あつたらう。併し流石に本國の良心的な人達、特に後年に至つては、耻かしいものであるに相違ない。それでこれ等の行爲の記録を湮滅させようとし、或は何かと扮飾しようとしてゐる。それ故吾々は第三國人の公平な叙述を撰んで資料とすべきわけである。例へば前記のタスマニア人殺戮に關して、チャールス・ダーウキンは、その有名な「ビーグル號周航記」のうちに、相當の頁を費して、タスマニア族を極めて悪性なものに書き上げてゐる。タスマニア族を殺戮した英吉利人は、本來が悪性な徒刑移民であつたのであるから、どんなことでも爲たであらうことは想像して差支なからう。一方メキシコのアズテック族を殺戮したのは西班牙國王の軍隊である。その當時の軍隊は専ら殺人が仕事であつたであらうから、大軍を指揮して廣大な地域で多數の都城を屠ることが、軍師として、また國家として名譽であつたと同時に、小集團を以て多數の敵を殺戮することも著大な名譽であつたに相違ない。アズテック族の場合に、『信じかねるほどの殺戮者』といはれるコルテズは、西班牙王に報告して、四百の兵を以て十四萬九千の土人を殺したといつてゐる記録がある。兵士一人當り三百七十の殺人である。而もこれが強力な火器を用ひないでの殺人である。無比の武勇として、王の嘉賞は一通りでなく、國民も讃嘆したことであらう。

私のいふ第三の時期になつては、白人の根性はたいして變らぬにしても、世界一般は暴虐を許さないやうになつた。併し憚かるべき他人目ひとめのない所ではさまざまなが、さまざまな様式で行なはれてゐるに相違ないとしてよからう。第三期の型の對原始種族行爲の一見本を近頃讀んだ、ヘルマン・ヘッセの「スマトラの森の夜」といふ一文に見出した。『白人達は既に踏み込み、迫り來つた。はや百人ばかりの馬來人を擁する一村落カヤを手中に有し、彼等に手傳はせて、太古の原始林に斧鉞を入れ出したのである。かくて最近になつて、世界創造以來いまだ始めてこの土地にも、密林のなかから斧の音、勞働の騒音が聞えて來たのである。三年前に此處で原住民が兇暴な卑劣極まる侵掠にあつて擊破され、かくて臆病な黑人種クローブ族は、南スマトラに住む、奸智に長け、慘忍なアッチ族のやうに長くは安住し得なかつた。殺された者達の靈は夜毎に河上に現らはれるが、それを恐れるのは同じ土人仲間のみで、我々白人は落着き拂つて、蠻地を我物顔に濶歩し、あやしげな馬來語で冷やかに指圖して、平然として黒い原始林の鐵刀樹が切倒されるのを眺めてゐる。これを使つては波止場を建設してゐるのである』私も馬來地方の開拓地、事業地を廻はつた經驗があるので、實感が深い。生れながらの耶蘇教信者の白人には、幽靈は恐ろしくもないものになつてゐる。その耶蘇教は教會に行つた時、葬祭、

結婚、クリスマスその他都合のよい場合だけのものであつてみれば、コンチジョンは彼等にとつてうまく出来てゐるのである。

印度邊境では、英吉利の飛行機が土人に爆弾を投下してゐる。これは近頃廣東爆撃の苦情の際に公に出された事實である。そしてこれが隠密な行爲ではなく、合法的なものといふ考からであるところに意味がある。「週報」に下の如く出てゐる。「ジュネーヴ一般軍縮會議に於て空中爆撃全禁問題が討議された際、英國委員は一定の僻遠地方に於て警察の目的を以てする爆撃は例外として許容せらるべきものであると主張し、多数委員の反對に對してイーデン代表は左の趣旨の説明をした。……世界の或る地域に於ては、その地形上また住民の散布してゐる事實に基き、或はその住民の性質兇暴にして近接してゐる良民住居地域を脅威する事實に基き、これが討伐に際し空爆することが出来なければ、平時から多くの軍隊を保持し、かつ一旦事ある場合には多数の人命を犠牲に供することを覺悟しなければならぬ場合がある。よつて英國としては……この種例外例を主張せざるを得ない。理論としては正しいのであらう。

二

原始種族といつても、その文化程度に於て、その精神及び肉體上の格質に於て、極めて廣汎な差等がある。従つて異種族、異民族の接觸の場合に、右の差等がその経過局面を甚だしく異なつたものにする。肉體的の格質と精神的の格質とは、前者に於ては差等を見ることが著しくは大でないが、後者に於てはこれが極めて大である。従つて問題は専ら後者にある。

原始種族には、まことに無力であつて、異族との接觸に於て至つて憐れな経過をとつてゐるものが数多いが、之に反して極めて勇猛なものがあり、なかには前記イーデン外相の所謂兇暴なるものもある。前に借用したヘッセの文中にも、同じスマトラの原始種族中に、白人の暴虐に無下に屈服してゐるものと、然らざるものがあることが出てゐる。この文章の首に書いたニュージールランドのマオリ族が、その島に渡つて原住民族を制壓し、更に英人に對して叛亂を起し、血戦を繼續して、反覆敗れながらも屈せず、終に議會に數席を占有し、關係に列する者までも出すに至つた史傳は、私をして愉快至極の感嘆を深からしめるものがある。

原始種族の兇暴なるものは憎むべく、制御すべきであることはいふまでもないが、無知なる彼等の行爲の故を以て、簡單に彼等を野獸に近きものの如くに觀念することは可愛相であり、文明民族の耻である。白人は彼等に對して、嘗ては彼等以上の暴虐なる行爲を敢てして來たの

であり、近時現在と雖も、それ等に遠からぬ集團や個人が決して無いとはいへまい。然かも個人としては生れながらにして、國家としてはその國民的宗教として、右の頬を打たんとする者あらば左の頬をも向けよと教えあそばされたキリスト・イエスの教の信奉者であつてみれば、無知なる自然人の暴力行爲の判断に際して、一應考へるところあつて然るべきであらう。

種族の勇猛性は感すべきである。併しながら徒らなる勇猛性はその種族の將來に繁榮と光明とを持來するのではない。これが爲には、勇猛性以外の或るものが存することを必要とする。南洋に面白い説話がある。ジャバの馬來族は男子もサロンといふ腰巻をしてゐるが、スマトラのミナンカバといふ族はズボンをはいてゐる。そしてこれに次のやうな由來があるといふのである。昔々ジャバ人とミナンカバ族が鬭争を續けて、双方とも屈托してしまつた。その結果、互に代表者を撰んで勝負をつけ、それで鬭争の結末をつけようといふことになつた。ジャバ側で撰出したのが虎で、スマトラ側からは水牛だつた。そして勝負の結果は、虎が負けて水牛が勝つた。負けた方は女子の服装をするといふ協約であつたので、虎のジャバ側がサロンを用ひるのである、といふのである。これに就て私は考へるのである。兩族の抗争といつても、それは虎と水牛で代表される抗争であつたのである。この種の抗争では、勝つても負けても、何れ

の側も偉大なものではない。虎や水牛以上の或るものがなければ、その種族の將來に光輝は期待し得ないのである。

その或るものはさまざまのものであり得る。例へば進取的精神がその一つであらう。意志分別を伴つた敢爲の格質が同類のものとして取扱はれてよいであらう。勇猛は偏強されて兇暴となるが如く、進取、敢爲の精神は侵略、攻撃となるのが自然である。この種の格質を具へた原始種族も多かつたであらう。前に出したニュージランドのマオリ族を私はこゝでその例として出した。マオリといふ名は「光の子」といふ意味だといふ。彼等は十四世紀の中葉に北方から渡海して來たものであるが、その渡航に就て次のやうな稍詳しい口傳がある。ハワイキといふ島に内亂が續いて島民はひどく不幸な状態に陥つた。そこに一人の有名な族長で、獨木舟に乗つてまだ知られぬ土地を志して島を去つたのがあつた。名をナフェといふ。歳月が流れて、島の人達にはナフェの記憶が朧ろになつた頃、その當人が、ロビンソンクルーソー、ガリバー、ドンキホーテ或はマルコポーロの如き人物として突如の歸島をした。彼は、遙かの彼方に大島があり、そこには高山が聳え、深林に被はれ、大小の河川が流れて魚族が泳いで居り、翹ぶことの出來ぬ大島の棲んでゐること等を傳へた。そして玉石や、化石鳥の大骨などの持參

品は、彼の所言の眞實を立證した。争論、鬭争に疲れてゐた島の者達は、人口が稀少で、食料が豊富で、器材になる礦石の澤山にあるといふ、ナフェの詳しい物語に動かされて、談合が重ねられた結果、約八百名の男女小兒からなる家族の一團が結成されて、その新らしい郷土アオテアロア即ちニュージラランドに向つて船出することになった。八艘の大カヌーが構築され、食料を貯へ、衣類を整へた。ナフェは持歸つた玉石を利用して工具を造つて、舊法を脱した技工で船を造つた。そして出来上つた八艘の船の多くは甲板が張られ、そこに室もあるものであつた。出帆に臨んで見送つた族長の一人が『ツー(戦争の神)の仕事はやるなよ。皆で平和に暮らせよ、戦争と争ひをこゝにうつちやつて行け』といつたと傳へられてゐる。八艘の大カヌーは嵐で離れ離れになつたが、アオテアロアの北島の西岸或は東岸の別々の地點に、恰かも地理を知つてゐたかのやうな具合に悉く着島した。さて彼等の郷土ハワイキの島といふのは何處であるか。研究者はクック群島のラロトンガ島であるとしてゐる。その距離は一千六百餘哩ある。アオテアロアには先住種族が居つた。新來者は着々それ等を制御してしまつた。それは一半は婚交により、一半は『食用』によつたと思はれるといはれてゐる。殘餘の少数者は屬島のチャサムに逃れ、マオリ族は北島を占有して繁榮するに至つたのである。(ニュージラランド

は約同大の南北兩島と小島チャサムからなる。)クックの第一回航海の時には人口が約十五萬と概算された。マオリといふのは「光の子」の意味だといふことは前にいつた。彼等は金星を幸福の星とし、金曜日を幸運の日とし、「努力忍耐」を標語としてゐるといふ。

三

民族性、國民性、或は國民精神、民族精神といふが、これ等の究明には絶大な困難がある。民族性、民族精神といふものは、いろいろに解釋され得るものであつて、限られた資料、限られた人物の討究の結果として抽出されたものも民族性、民族精神の表現、或は精華といふ風にははれぬことはないが、民族は、大多數を占める一般民衆と、少數の傑出者からなつてゐるのであつて、その一般民衆を輕視しては民族性の討究は成立しない。從來の歴史は専ら政治、戰鬭の記録であり、文學は限られた世界の表現であつて、民衆の生活、それ等の心意の記録は極めて乏しい。例へば萬葉集に庶民や防人の歌があるにしても、それは庶民、防人中の特殊な人物の作品であると思はずばなるまい。そこで種族、民族の格質といつても、現棲するもの以外では、その資料が至つて心細い次第である。併し見方を更めて、傑出した人物、主導的であつた

人物、集團としての行動をば、その民族、種族の格質の表現と見ることにすれば、これも正しくないとはいへない。

そこで右のやうな見方をすることにして、原始種族から發達した種族、次で民族と呼ばれるべきものと、順を追つてみて來ると、そこに一つの興味のある事實に氣づくのである。

こゝで生物學を持ち出す。生物體の諸形質の變異は、一般に原則として、ケトリーの曲線と呼ばれる、中位に頂を示す、山形の曲線で表はされ、その山に關して高さといふことがいはれる。形態學的形質に限らず、心性に就てもこれはいはれる。さて原始種族に就て見れば、その格質の變異の幅が狭く、高さが低い。變異曲線はいはゞ慢頭の切り口のやうなものであらう。この曲線の幅が廣くなり、高さが増し、全體として一方に偏動することが、種族の發達であると見てよい。幅が廣くなるといふことは、秀でた格質のものが出て來、増して來ることであり、中央位の高さの増すことは正常な發達であり、その中央位が優秀な側に移つて行くことは優化的表現である。何れの原始種族も、その進度には著しい差こそあれ、右のやうな發達を辿るものとしてよいであらう。併し種族なり、民族なりが特殊な興隆をするのは、右のやうな正常な變異の推移以外に、なほ一つの特異な特殊モメントが必要であるやうに思はれる。それは

撰ばれたるもの——エリテ——の出現である。前掲のニュージールランドのマオリ族に於て、種族全般の格質と併せて、ナフェの出現と活動を重要なモメントと私は見たいのである。前に西班牙人に殺戮されたアズテック族に就て一言したが、同じくメキシコのヴァレーに繁榮して特殊な輝かしい古文化を遺したマヤといふ族があつた。この族はアズテック族に先んじて繁榮してやがて衰亡し、四世紀を隔てゝ再びユカタン半島で第二次の繁榮をしたが、それもやがては衰亡してしまつた。これ等の衰亡に就ては何等の原因として認むべきものがない、といふのが研究者間の意見であるといふ。私は——極めて大膽ではあるが——こゝにエリテ級の成員の不在といふモメントがあつたのではないかと考へるのである。

四

種族の衰亡にはいろいろの型のものがある。武力による殺戮、經濟的その他の壓迫による漸次の衰亡等、種族そのまゝでの滅亡がある外に、混血による種族としての消失といふものがある。タスマニア族は英吉利人の殺戮で消失した。馬來半島などには、漸次山間帯に追ひつめられ、異種族から移された悪性疾患や、阿片、アルコールの害毒などの爲に亡びんとしてゐる種

族がある。前記のニュージーランドの先住種族は、マオリ族との混血により、また武力によつて消失してしまつてゐる。こゝで面白いのは民族に同化といふものがあることである。血液としては變ることなく續いて居り、(混血がなく)、その員数を保持し、或は増數してゐても、その生活に於て、精神、宗教に於てまでも異種のものに移化してしまつた現象は、これも種族としての存在の消散と見て差支ないのである。民族間の同化といふ現象は、同化する側と同化される側との力の双方に依據するものであり、同化力の強い民族、同化され難い民族のあることはいふまでもない。

民族の精神的格質の一つに頑執或は執拗といふべきものがある。異族に對して壓を加へるにも、異族の壓に對して抗するにも、熱せず、撓まず、自捨せず、頑張り、外壓に對しても無關心に自己を持するといふ種のものである。私はこの一例を漢人族にみるやうに思ふ。私は支那を多く知らない。併し臺灣生活數箇年の經驗は、私にこれを切實に感ぜしめる。林語堂の「我國土及我國民」に支那人の性格を、忍耐、無關心、老獪の三つとして記載してゐる。私のいはんとすると同じものであると思ふ。而してこの漢人族の格質が、異民族との接觸の結果に現はれてゐることを興味深く感ずるのである。

蒙古族の元朝が、北京を國都として大都と名づけ、支那本部、蒙古、滿洲を直轄し、高麗を屬國とし、西藏、安南、緬甸をも征服し、我國をも襲ひ、その治世は百九年であつたが、漢人族に對して、蒙古的なる何物をも遺さなかつたといはれてゐる。百年といふ時間の長からざりしこと、統治の態度、兩民族の相對關係、その他種々の要因がこゝには存するであらうが、漢人族の心性に於ける特殊性が、重要な要因として働いてゐるのは明らかであると思はれる。漢人族は、政治的に服従しても、その個性にも文化にもその感作を受けずして持續する強固な特殊性を有してゐるのである。林語堂は、異民族の侵人の結果は、新しい血液の混入によつて、反つて利益を與へたといつてゐる。滿洲族侵略の場合には更に吾々に興味深い。前者の場合には、漢人族に於ける消極的結果を見るのであるが、この場合には積極的であつて、侵略者を感作してしまつたと見られるのである。滿洲族の清朝は、大河の決する如く中原を席捲して、聖祖康熙から、雍正、乾隆と三代の間隆々たる治世の續くこと約百三十年、その餘勢は嘉慶、道光と續き、燦然たる文化の光を放つたのであるが、制略者たる滿洲族は、漢人族を更えなかつた。のみならず彼等は漢人文化に溶け込んでしまつたと見られてゐる。滿洲語も滿洲文もその存在が影薄くなり、その民族宗教であつたシャーマン教も殆んど捨てられてしまつた。

滿洲の一族ソロン族は、勇猛慍悍を以て鳴り、喰人種族とまでもいはれ、清朝軍に従つて入關し、その勇猛は漢人族を戦慄せしめたものであつたが、このソロン族もいつとはなしに支那からその影を没してしまつた。この場合には兩民族の間の文化の差級があつたといふこともあらう。時間の短かくなかつたといふこともあらう。併し前の場合と同様に、漢人族の民族性に重大な要因があるやうに思はれるのである。

五

神武天皇の御討伐の御謠のうち、「みづみづし久米の子等」といふ句がある。道臣尊の八十梟を伐たれる時、立上つて合圖される御謠のうちにも同じ句がある。私は常にこの文句を貴いものとして愛唱してやまない。この「みづみづしい」といふことが種族、民族興隆のモメントであると思ふ。これを以て結びとする。

(十三年九月)

健康談義

年頭の紙面に拙文を求められて、健康をその題として撰んだ。私は年來健康といふことに就てさまざまのことを考へてゐる。年頭に各自がその健康に就て考へることは、適はしい心の持ち方である。この機會にこの一文を草することは、私自身にとつて有難い。

私は甚だ幸なことに健康者に屬する。そのうちでも中位以下には下るまいなどと自惚れたりしてもゐる。大正以降二十年、罹病、臥床、服藥をしたことがない。仕事執務に疲れたことはない。睡眠困難を感じたことがない。消化器は健全。食慾は佳良、食量中等、便通適當。暑さと寒さに甚だ鈍感。裸體を好む。但し夏は流汗が惱みである。僅か五尺二寸の倭軀で、體重は近頃減少して十六貫七百日、少しく脂肪が過多であるが、血壓は平常。私といふ人間の肉體状態は大要以上の如くである。健康に関する説話は、その當人の健康状態と密接な關係をもつ。

それ故に先づ右の通りの自己紹介を致し置くわけである。

健康といふことに關する私の考へは一般の方々と違つてゐるやうに思つてゐる。健康を人間の當り前の状態、病氣を異常の状態と簡單にきめて、病氣の時に嘆き、健康の時に當り前に思つてゐる人達の氣持ちに私は不同意であつて、私は常に、日々に自身の健康を感謝することを忘れぬやうに心掛けてゐるつもりなのである。

人類は最も高等な生物である。といふことは、構造機能の分化が最も發達したものであるといふことである。従つて最もデリケートなものである。文明文化が進めば進むほど、人類本來のものに、意識的、無意識的のそれに對する感作、變更作用が與へられて、いやが上にもデリケートなものにされてゐる。その極めてデリケートな構造機能を有する人間が、それぞれの社會生活を營なんのでゐるのである。その社會生活の機構、社會生活環境には、人體の機能構造を障害する要約、障害するやうに誘ふ要約が満ち充ちてゐるのである。

また人間は自然を征服するとか、甚だしきに至つては自然を征服したなど、口はばつたことをいつてゐるが、文明文化が進んでも、その威力を調節し得てゐる程度は些かなものである。ますますデリケートになる文化人の身體の構造機能は、自然の威力に對する力を低くして

ゐる。早い話が、少し晴天が長續きして乾燥が高まると、子供達の呼吸器疾患がめきめきと増す。一雨ザアッと來ると、小兒科のお醫者などは一休み出來るといつた次第である。自然と社會との複雑で深刻な健康障害の要約活動のなかを、人間は泳いでゐるのである。

私の愛讀書の一つであるモンテニユの「隨想錄」のなかで、人世を丹念に噛みしめたこの親切な老人は、人間の壽命といふことに就て、次のやうに語り聞かせてゐる。人間の達し得る最高の年齢の近くにまで存命して死するのを、自然死と一般には思つてゐるが、それは誤つてゐる。こんなのは稀な場合であつて、多數のものは遙かに早世する。早世こそ人間の自然死である、といふ意味である。即ち生物界に於ける自然死といふものは人間界では異例になつて來てゐるのである。

人間の疾病や健康障害には、自ら求めたものも少くない。泥酔しての怪我、暴飲暴食の擧句の胃腸障害、こんなものは自傷であつて、お話にならぬしろものである。またかくの如きものに反對に、絶対に本人に原因的條件の無いものもある。例へば乗車中の汽車の衝突、不意の山崩れの壓死といつた類である。これ等の兩極端の中間に位するものでは、本人との關係にいろ

いろいろ種類のものがあり、いろいろの段級のものがあつて、千差萬別である筈であるが、こゝに一つの大きいものがある。運である。チャンス、巡りあはせ、はずみ、そして所謂宿命である。科學以外のものである。

健康、不健康には何といつても生れながらの素質が大きい役目をしてゐる。生れながらの素質といふものは、その人にとつて一つの宿命である。明白な遺傳疾患は別として、癌などにも家系的関係があるともいはれるが、そのやうな家系に生れることも宿命である。宿命と觀念して、生活に出来るだけの改善豫防に力を注ぐ外に途はないのである。私は幸ひにして至極健康であることをつたが、青年期以來、即ち生活に自意識をもつて以來の私の生活は、不健康に導くことの明らかなものには意識的に遠ざかり、健康に導くものに向ふことに勉めて來た。これ等が私の健康にとつて有力な要素であるとは思つてゐる。併しそれよりも私は宿命を大きいものと信じてゐる。そして私は生れながらの素質を感謝してゐる。そしてその外に好き運をも同様に感謝してゐる。

不健康を恐れるといふことと、健康をよるこぶといふことは、同じやうであつて、實は大いに違つてゐると私は思ふ。健康時に充分にその幸福を感得せず、不健康時に徒らにそれを嘆くのは淺幕な氣持だと私は思ふ。病氣を有益に體得すれば、人の心を濃かにする、病氣に屈してしまつては朗かさを失ひ、陰性になつてしまふ。これに對して、病氣の經驗をもたない者は、氣持に荒い傾きがある、なかには粗雑ですらもある傾きがある。

剛健な精神が強健な肉體に宿ることは大體に於て事實である。併し人間味のない剛健は獸的剛健に近い。健康者の戒心すべき重要な一面がこゝに存する。健康の幸福を充分に味はひ、感得することは、病者、不健康者に對する同情の心を必ず深くさせる。またそれは自業自得的不健康を批判的に冷やかに眺めしめる。健康の幸福を深く自ら味はふことは、人間味を深くさせる所以のものである。

生命保險、健康保險の加入、拂込金、掛金は、健康な者にとつて嬉しいものでないのが一般であらう。それは死亡、羅病といふ面を専ら考へるからである。健康といふ面を併せ考へ、またはその面を専ら考へることにすると、掛金に嬉しい氣持が持てる道理である。嬉しい氣持で掛金、拂込みをして、それが非常の際に役立つとすれば、こんな目出度いことはない。同じ掛金、拂込みにも、健康の幸福といふことを考へ併せることは、それ自身幸福なことである。

こんな考へをもとにして、私は私のあづかつてゐる教室の諸君一同で、先年健康の會といふものを設けた。それは銘々が毎月の終りにその月中の自身及び家族の健康を顧みて、健康であつた幸福を考へることにし、その記念に獨身者、妻帯者、子供もちの區別でそれぞれごく小額の金を醸金する。集金は癩氣見舞に向ける。年毎に年中の結果を集めると、數字によつてそれが知れる。もう五年近かつた。五箇年間皆納の人は、記念寄附金をする豫定にしてゐたが、既にその有資格者がなくなつてしまつたのは遺憾である。併し教室を出て、遠い土地で活動してゐる舊會員から、一年間家族全員が健康であつた記念だといつて、寄附金を送つて來たり、病氣が全快して活動が出来るやうになつた記念だといつて、教室に訪ねて來て、寄附金を置いて行く人などもあるので、まことに愉快に感じてゐる。

健康はそれ自體が幸福であり、將來の幸福のもとであり、そしてそれは當り前のことではないのである。健康の幸福を考へないと罰が當る。

(十四年一月)

還 曆

師匠や先輩の人達の還曆が終りかけて、そろそろ同輩友人達のそれが始まりかけて來た。もう四年ほどで私もその還曆に達する。それまでは生きてゐるつもりなので、先般それに應ずる仕事の計畫を立てて着手してゐるやうなわけである。そしてまた某友人の還曆祝賀文集の期限が近づいて、書かずばなるまいと思つてゐるところへ、某先輩の還曆祝賀會の發起人になれといふ書面が來た。そこへもつてきて、しつこく原稿の依頼だ。そこで還曆といふ題で書いてみることにした。

還曆といふのは、滿六十歳生き延びた祝で、年齢に關する祝ひの始まりと考へてゐた。それで曾て、滿六十歳生き延びるといふことは、長生きなのか短命なのかを問題にしてみたことがある。人生五十と誰もがいふから、十年長生したと認めるものらしい。「七十近來稀ならず」

といふことを多くの人がいつてゐる。實際七十歳以上の人は稀でないやうに感ずる。併し稀とか普通とかでは漠々として話にならない。そこで國勢調査の表計を提出して計算してみたら、六十歳以上六十四歳までの男子は一〇〇につき二・六七人、六十五以上七十歳の者が一・九五とわかつた。稀ではないが、存外少ないものである。そこで今度は生命表を提出した。私どもの周圍に生じつゝある還暦の行事は、大體高等學校乃至大學時代からの知友、世間に出てからの縁故者だから、先づ二十歳頃からの縁故者として、その年齢時の生存餘命は日本男子平均の上で幾何であるかを見ると、四〇・一八と内閣統計局は教へて呉れてゐる。即ち無事に還暦に届いた者は六五日と一七時間ばかり平均よりも長命であるといふ計算になる。六五日でも目出度いといへば目出度い。さて七十歳に達すれば十年足らず生き延びたわけで、これは何といつても目出度い。上に用ひた数字は昭和十一年の第五回生命表である。この数字で計算するのは正しくないかも知れぬ。餘命表の数字は徐々に變つて大きくなつて來てゐるからである。併し隨筆だから、これでよいとして置かう。

右の計算は、二十歳までお互に息災で來た者どもに就てである。ところでその年齢以前に人間の最も死ぬ時期がある。死亡數曲線を見ると乳兒期に埒もなく高く、青春期に再び穩かだが高い山を示してゐる。お互がその兩期を通過して生き延びて來たことをば、幸福の範圍に入れぬといふのは、不合理千萬である。そこで、それ等を考慮すると、生れた時の餘命は、四四・八一歳となつてゐる。還暦の日には一五・一八歳だけ長命してゐる。

生き延びた年數の意味を一應計算の上でみると以上のやうになる。そこで還暦を祝し、それを記念するといふ意味は一體どういふのかと考へることになる。「大言海」を取出してみると、時々有難い知識を與へて下さる。この本は今度も、私の無識を訂正して呉れた。私は年の賀は還暦に始まるものと獨合點でゐたのだが、間違ひだつた。もつとそれ以前に年の賀即ち算賀はあるのであつて、四十歳の初老の賀、或は五八の賀といふのから始まつて、十年毎に百歳まで及ぶのであるとある。生れた時の餘命が四四・八二歳いふ生命表の数字からすれば、四十歳はまだ壽命を祝するにはちと早い。實際にも厄年、前厄、後厄などといつて、數へ年の四二歳前後に厄拂ひなどをやる向はあるが、當今は四十の賀といふことは見聞しない。

以上数字を提出して弄んでみたが、これは見當外れなことで、還暦といふのは壽命といふ點よりも外に意味があるのであらう。干支を年齢の表現に用ひた時代に、生れ干支が再び來た時

が恰も生涯の或る段落の時期に大體當つてゐた爲ではないかと思ふ。ところで一年三百六十五日に變りはなく、その變らぬ單位で年齢の計算は進むのだが、人間の生涯の内容は昔のまゝでは居らぬ。昔の六十歳と當今の同齡とでは生涯の歩程が違つてゐる。

別段確かな典據はないが、年の賀の祝ひ方としては、還曆は自分自身で祝ふもの、古稀は子供達が祝つて呉れるもの、喜壽は孫達に祝つて貰ふものだと、聞いたか讀んだかして、私はそのつもりでゐた。それ故、近づいて來た自身の還曆に際して、自ら記念する仕事を計畫して、先頃から取掛つたわけであるのだが「大言海」でそれが正しくないことを教へて貰つた。即ち年の賀は何れも子弟が祝ふものだといふのである。子弟とは子供達と門弟、世話をした後輩などをいふのであらう。

さて四十歳の五八の賀だが、大言海の引用文を見ると、高貴の方々の行なはせられたものやうにも思はれる。人生は四十からなどといふ言葉が先程流行したが、世が悠長で、早婚の世には、武士や庶民階級でも、四十歳で大體一生の段階に届いて、初老に入るといつて、酒宴位は出來たのであらう。二十歳で結婚して、翌年に長男、一年隔てて長女が生れれば、四十歳の時には嫁が來てゐて、娘には孫が生れてゐるといふ勘定になる。

人生は四十からといふのは、亞米利加の書物を持込んだのが流行つたものらしいが、私は内容を知らない。併し私の知る狭い範圍では、四十になつてもうだがあがらずに沈鬱してゐたのが、俺もまだ何とかなると自己鞭撻をしたり、もう先が心細いと嘆息氣味だつたのが、心掛け次第で滿更でもない自己慰安をしたりするの役に立つたやうだつた。初老といひ人生は四十からといふと、ひどく違つたやうに思はれるが、大體同じことをいつてゐるのではないかと私は思ふ。初老といふのは人間としての思慮分別がついたといふ意味で、つまりこれからの生涯に若氣のそつがなくなるといふのだらう。英才は別として、實のある仕事が出来る、働らき盛りは當節でも四十歳前後からだらう。そして四十歳前には大體その人の評價は定まるやうである。人生は四十からといふのは、親の仕送りで二十何歳で學校を卒業して、たいした苦勞をせず世渡りをして、女房を貰つて、親になつて、さて四十になつて、人生はこれからだ、といふ意味合ではあるまい。奮勵して土臺を積み上げ、固めて來て、さて四十歳だ、これから本當の仕事をしてみせるといふのが、人生は四十からといふ意味だらう。かういふ風に考へると五八の賀も面白い。賀といつても勿論自分で祝ふのである。

還曆の賀も自祝がよいと私は思ふ。いろいろ述べると現實に觸れるので面白くないから、結

論だけでやめて置く。祝つて貰ふのは古稀からがよかりさうだ。

還曆といへば、私の知友や先輩の多くには、停年問題といふのがこれと離れぬものになつてゐる。野人たる私は、それを結びつけて考へてもよろしく、必ずしもさうしなくてもよいといふ立場にある。つまり自由に考へるゆとりが與へられてゐる。停年制に就ては私も若干の意見をもつてゐて、曾て或る新聞に書いたことがある。賛同者もあつて、私どもの先生である故大澤謙二教授が舊い頃に同じ意見を發表して居られると教へられた。

停年制の申合せで退職なされた教授達の一部を名譽教授にするのに、一問題あるやうに新聞に見えてゐる。内規の在職二十年に達して居られぬ方々が問題であるといふ。おせつかい至極なことだが、考へてみると解せぬ節が數々ある。

名譽教授といふものがどういふ待遇を受けるものか、野人の私はよく承知しないが、引續いて學内で研究の途が與へられる特權が伴ふのかと思はれる。これは個人的にも學問の上でも大きい問題である。新聞で見た文部當局の意見といふものに、勅任待遇の員數が餘り増しては困るのだといふことがあつた。勅任現官の待遇が與へられるもののやうであるが、新聞の文句

が本當なら、まことに以て俗吏根性の發露といふべきである。何れ位階勲等の高くなつてゐる人達である。退官したつて官中席次の第三階に下る人はあるまい。何れは待遇を受ける人達であるやうに思はれる。

おせつかいな話ではあるが、銘々の大學の名譽教授はやめにして、帝國大學名譽教授といふものをつくつて、全大學共通のものにしたら如何であらう。大學の助教授、教授の淘汰、拔擢といふことが、學内の活氣にも學問の進歩にも極めて必要である。教授になつたら自發的にはやめないのが一般だから、空位の出來た時は極めて大切なチャンスである。空位が生じたら、後任には下積みになつてゐる將來の確かな人を引張り込むべきであつて、年功は當然通算すべきである。

停年退職教授の爲に、引續いてその研究を続ける途を設けることは當然やるべきである。當然であつても、澤山の人達を満足させるだけの施設は不可能だといふ異説が出るであらう。併し實狀はさほどの心配は無用らしく見ゆる。先づ教授在職中から研究らしいことをしてゐない人達だつて少なくはない。停年と共に學問の第一線から退いて、悠々やりたいといふ人達も少なくあるまい。引續いて研究するといつても、人間の壽命と活力は法外に長く續くものではない。

い。大體十年と見たら短くはあるまい。學科によつては、實驗の設備が不要なものもあり、簡単な程度で足りるものもあらう。手傳は自身の費用で雇へばよく、手傳をして、自分の研究も指導して貰はうといふ助手もある筈だと思ふ。一つの私案は、基金を得て退職教授館といふものを大學構内に建てることである。アパート式の部屋と小さい集會室を作り、暖房は充分にして、圍碁、將棋の類は法度とする。飯島魁先生は、停年退職と同時に海綿類を收藏してある標本室の一隅に机を設けて、専らその研究を続けられることにして居られた由であるが、停年直前に歿せられて、實現されなかつたのは残念である。

(十三年六月)

吾々グループの生存率

寄る年波で吾々のグループにもそろそろ還暦が来る。グループといつてもいろいろあるわけだが、こゝでいふのは同時に専門學を學んだ仲間のことである。還暦といふことに就ては、私は自身の考をもつてゐる。それは先頃或る新聞から原稿を求められた際に書いた。考ばかりでなく、實行しようといふ心掛けてゐる。グループ仲間の還暦に關聯して、今まで何人生存してゐるかを調べてみ、また他の學科の諸君は如何であらうかといふことを考へた。それで丁度手もとにあつた「東京帝國大學理學部卒業生氏名録（昭和十二年度）」に就て、一晩がかりで計算してみた。吾々のグループといふ範圍を、私が本郷の教室に入つた時に既に在學して居られた方々（大学院學生は除いて）から、私が卒業するまでに入學して來られた方々まで、つまり同じ屋根の下で一年乃至三年を暮らした連中とした。従つて年限は五箇年になつて、日露戰爭の

最中の明治三十八年から四十二年までに當る。當時の教室は正門（假正門といつて丸太棒だつた）から入つて左側の練瓦造りで、銀杏並木などはまだ無い時代だ。あの懐しい教室も今はない。その仲間の数は二九人、うち歿したのが四人ある。何れも動物學科で、赤松氏、三宅氏、佐々木氏、石井氏で、専科の藤田氏を加へると五人になる。一方植物學科では悉く存命であるのは目出度い。四人歿したからグループとしては八六・二%が生存してゐる。同じ時期の理科の合計が一三三人で、生存率が七八・二%であるから、先づお五では率が著るしく高いことがわかつた。

そこで各科の諸君の生存率の比較といふことになる。計算は、五箇年毎の總計にした。各別にその數字を表にすると第一表の如くである。こゝで二、三の附記が必要である。(一)表の數字は本科の卒業生だけで、選科の方々は加算してない。年齢が一致しないからである。(二)別な科に再入學して居られる方もあるが、それは二人になつてゐる。不正確であるが、もともとこの仕事は學術的のものでないから、御免をかうむる。(三)選科では年齢が不一致だといつたが、本科の諸君だつて年齢の多かつたのが多少ある。特に初期時代にはクラスメートの年齢はだいぶ違つてゐた。これ等も特に區別はしない。(四)科の類別は表のやうに六つにした。地

質等といふのは、地質、地理、礦物の三科を合せたもの、生物といふのは動物、植物兩科の計である。地震學科は除いた。(五)括弧内の數字は死亡者數、その上のが卒業者數である。

第一表

	數 學	天 文 學	物 理 學	化 學	生 物 學	地 質 學 等
明治10—12年	1(0)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)	1(1)
同 13—17年	5(2)	3(1)	13(10)	12(11)	8(7)	10(8)
同 18—22年	3(2)	1(0)	6(3)	7(4)	11(8)	7(5)
同 23—27年	14(6)	3(1)	18(8)	7(3)	9(3)	3(1)
同 28—32年	10(4)	1(1)	13(11)	11(5)	12(6)	11(10)
同 33—37年	17(5)	4(1)	15(12)	13(4)	12(7)	12(6)
同 38—42年	16(2)	4(1)	19(9)	13(6)	19(4)	11(4)
大正 4—8年	9(2)	3(1)	15(9)	12(4)	15(4)	11(5)
同 9—13年	3(3)	6(1)	14(7)	16(4)	14(8)	14(6)
同 14—昭和 4年	6(5)	13(4)	13(8)	10(6)	7(3)	6(3)
吾々グループの生存率					1111	

同 五—九年 六七(一) 一七(〇) 一五四(五) 一一六(五) 六三(三) 八三(三)

第一表の實數から、比較の爲に、集計、百分率計算をすると第二表の數字が得られる。左側の數字が死亡者百分率である。即ち吾々のグループの五箇年を中心にして、遡つて明治十八年から同三十七年までの二〇箇年及び吾々グループ以後の明治四十三年から大正八年までの一〇箇年の三段として、集計して、死亡者の百分率を算出したのである。大正九年以降の諸君はただお若いから除いたわけである。明治十八年から計算した理由は、理科大學の卒業生は明治十年から出てゐるが、各科の卒業生のそろつて出たのは十八年からであるからである。外に三五箇年の計を出して加へた。なにしろ一晩仕事だから、算術に間違があるかも知れない。熱心な方は一應お調らへ下さい。

第二表

	數 學	天文學	物理學	化 學	生物學	地質學等	計
明治二一—七年	三三(二四)	九(三)	一〇三(五〇)	四七(九)	五六(三四)	四六(二三)	二九二(三三)
	四三・八	三三・五	四九・〇	四〇・四	四三・九	四八・〇	四三・五
同 三—四三年	一七(五)	四(一)	三九(九)	三(六)	二九(四)	二(四)	一三三(二九)
	二九・四	二五・〇	一三三・一	二六・一	一三・八	一・九・〇	二二・八

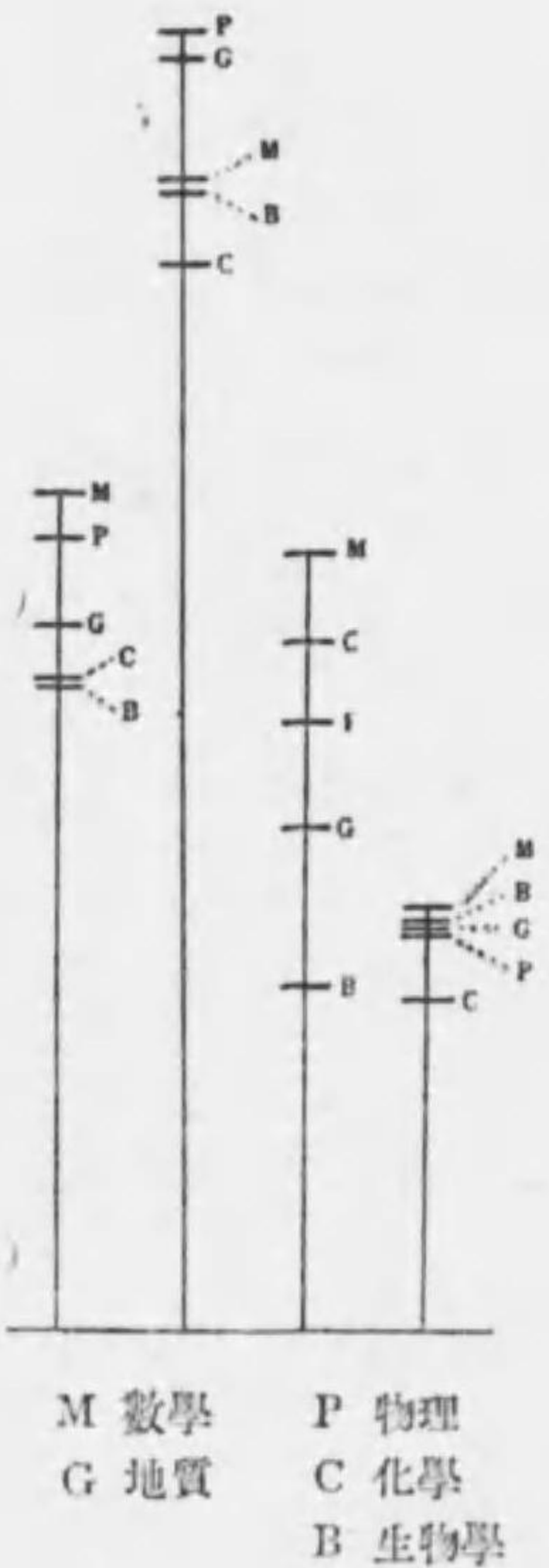
同三—大正八年	二五(四)	七(二)	一〇七(一六)	六四(八)	七六(三)	七三(一一)	三五四(五五)
	一六・〇	二八・六	一五・〇	一三・五	一五・四	一五・三	一五・〇
明治二一—大正八年	七四(三)	二〇(六)	二四八(七五)	一四(三)	一六三(四〇)	一三九(三七)	七六(二二)
	三三・八	三〇・〇	三〇・二	三・七	二四・五	三六・六	三七・五

次は各科の生存率の比較である。これには、吾々のグループを一段とし、それ以前を一段、以下大正八年までを一段として、上中下として比較することにする。こゝでは天文學科を除いて、五科だけに就て吟味することにする。天文學科では員數が甚だ少なく、確率が特に低いからである。確率といへば、年數が中央の段級で前段の四分の一、後段の二分の一で、そのまま比較するのは無茶であるが、もともと一種の遊戯であるから御免を蒙る次第である。さて中段で五科を比較してみると、生物では八六・二%で、次位の地質の八一・〇%を優に抜いて居り、終位の數學より一六・四%だけ高率である。この段での順位は、生物、地質、物理、化學、數學といふことになつてゐる。三段毎の順位を表に作ると次のやうである。

	(一位)	(二位)	(三位)	(四位)	(五位)
(前段)	化學	生物	數學	地質	物理
(中段)	生物	地質	物理	化學	數學

吾々グループの生存率

(後段)	化学	物理	生物	地質	数学
(合計)	生物	化学	地質	物理	数学



比較を明瞭にする爲に、グラフすると圖の如くなる。

こゝで私の注目するのは、吾々生物グループが同期間の最低率を保持して、然かも次位とは大

い隔りを示してゐることである。御同様お目出度いことである。總體からみても生物が最低率である。ところで吾々の前と後とをみると、前段では低いことで第二位であり、後段では第四位であつて、至つて高率である。そこで次のやうにはれるやうである。總體の上で最低位にあるが、それは大體吾々のグループに於て低率であつたが爲である。化学は前段でも後段でも最低位であるに拘らず、總體では次位に落ちてゐる。それは中段の吾々の時代に於て高率であ

つた爲である。即ち吾々の段の者が、生物では總體の死亡率を低からしめ、化学では反對にそれを高からしめてゐるといふこととなつてゐる。

三段を少し注意してみると、生物では、前段で第二位なのが、吾々の段で第一位に上り、次の段では地質と共に第三段に下つてゐる。それでも合計の上では第一位で、私達の仲間には特に長命に幸されて居り、全體の率を引上げるまでの高率であるといへよう。

その他で目につくのは、化学が前後兩段で第一位にあること、そしてそれに拘らず中段で第四位に下つてゐて、それが合計の上で第二位に引下げてゐること、物理が第五位、第三位、第二位と遷昇してゐること、数学は第三位から第五位に下つて、そのまゝ止まつてゐることである。前段は二十年間、中段は五年、下段は十年だから、これで順位の昇降をいふのは無理である。それ故、中段後段を合算して、前二十年と後十五年とを比較すると、次のやうになる。

(前)	化学	生物	数学	地質	物理
(後)	生物	化学	地質	物理	数学

この表で順位の昇降をみると、化学と生物が交叉して、前者が降り、後者が昇つてゐる。地質と物理が並行して昇り、数学が降つてゐる。

終りに他科と比較してみたいのだが、まだそれをしてゐない。先づ試みるべき比較は醫科とである。東京帝國大學の分は手近になかつたが、京都の芝蘭會のが借りられたから、それを調べてみた。この大學では明治三十六年に最初の卒業生が出てゐるので、前記前段に相當する數字はない。中段に相當する五年では、三二一人中生存二三五人、その率が七三・二%、後段に相當する十年では、七八三人中生存六四三人で、その率が八二・一%になつてゐる。東京帝國大學では率がそれぞれ七八・二%、八五・〇%である。即ち五・〇%、二・九%だけ京都の醫科が高率を示してゐる。この材料の比較に關する限り、お醫者は短命といふことになる。

鼻 口 贅 談

過日改造社の仁が見えた。最近の世相表貌の話があつて、私もお相手に無駄口をたゝいた。用件は、何ぞ現状所見に就て原稿を書けといふのだと申される。調子につて引受けた次第。書くとなればいろいろあるが、先ずマスクを採り上げてみよう。

冬になつて目につく街頭風景の一つはマスクだ。マスクは無論衛生上のもので、洒落や陰覆目的のものでない。私はこゝで衛生問題を論ずるつもりではないが、先づ話はそれから始めるのが順序だ。そこでマスクを用ひる目的を考へてみる。これにはさまざまのものがある。感冒豫防といふのがあらう。そしてそれから範圍を廣めて體を大事にするといふところへ行つてゐるのがあらう。また防寒といふ目的のもあらう。襟巻きをしてマスクをかけるのがつきものになつてゐる。

さて感冒の豫防だが、流行性感冒のひどく流行した時分に、大きいガーゼのマスクで顔面下半部を被覆する人が澤山で、奨励もし、軍隊でも外出には行方させるが、有効に相違ない。お医者や病院の従業員などでは効果は確實であらう。流行性腦炎の傳染徑路にはまだ疑點があつて、今のところ用心としてはマスク位しかなからう。これ等の病氣の病原體はウイルスといふもので、近年の微生物學界での研究の最も活氣がある領域に屬するものである。感冒は昔からかぜをひくといつて、生理的の（特殊な病原體に因るのでない）故障のやうに考へられて來たのであるが、近年はウイルス病であることになつて來てゐる。書き遅れたが、ウイルスといふのは、いはゞ極微の細菌で、顯微鏡の最高擴大でもその形の見えないほどに小さい生きものである。感冒もウイルス病であれば、マスク使用の意味も明瞭であるわけである。これが豫防に有效であることは問題ないとして、さて實際の上でどれだけの効果を與へてゐるか、これはまた別の問題である。外出、通勤の途だけで、執務中はやらぬ、通學の往復だけで教室ではやらぬ、これではどうか、といふやうなことを舉げて來ると、問題の内容はなかなか豊富になつて來る。私はこゝで衛生問題を談ずるのではないから、この邊で打切らして貰ふ。

話を擴げて、保健の目的といふことにする。多くの人達はこれに屬するだらう。俗にいふ呼

吸器の弱いといふやうな人があらう。病氣恢復期の人であらう。また出來るだけ體を大事にしよといふのもあらう。幼稚園に通ふ子供達などを見ると、小さい體と同一量にも當ると思はれる毛糸毛織を着重ねさせられ、厚い手袋をはめさせられてゐるのを見る。二歳三歳位の兒をみると、まるでメリケン粉の囊に頭のついたやうなのがある。親達が最高度まで可愛い子供を保健を考へてゐるのである。この類のことが、どこまで良いことか、こゝにも問題がある。私はこの消極的な心遣ひとは逆に、積極的な氣象馴化、身心鍛鍊といふことを重くみたいのである。保健の爲の鍛鍊といへば、それも大いにやつてゐる、と申されるであらう。全校ラヂオ體操、執務始めや晝食前のラヂオ體操がある。教練があり、勤勞奉仕があり、拓殖義勇軍がある等々。ところで私は、如何にも旋毛曲りで、天の邪鬼であるやうだが、そこでは消極的な方面に考慮が缺けてゐる場合があるのを案ずるのである。例へば、登校に或は授業中にもマスクを用ひさすべき生徒と、それをやめさすべき生徒、勤勞奉仕を怠らしむべからざる學生と、如何に奉公の念に燃えてゐても、それには加へてはならぬ學生とを區別すべきが大切だといふのである。衛生問題としてのマスクもこの點に歸する。

さて話の本筋に入るとして、猪突的に突飛なことにその緒をつける。それは、人達は自分の

體の器官の使用法の注意を怠つてゐるやうだといふ話である。顔にある器官は眼と鼻と口だ。眼は見ると、鼻は嗅ぐもの、口は食ひ、飲み、話すもの、これ等はきまりきつたことだが、さて呼吸はどこでするものか。鼻からも口からも呼吸は出来る。話すことに鼻が一役を受持つてゐることも申すまでもない。——書いてゐて思ひ出した。先日寒い日に葬儀に列した。冷たい切つた本堂で導主和尚が引導を渡す。口の吐氣と鼻の呼氣とが眞白く、透つた太さで、違つた方向に交錯する有様が、珍らしい生理學のデモンストラチオンだつた。佛様への失禮はお許し願ふことにして、面白いと思つた——口からも鼻からも呼吸は出来るとして、本來の構造はどうなつてゐるものか。何れでも良いやうには造られてゐないのである。無論鼻がその場所である。鼻道は細長くて、壁には血管が密に分布してゐる。暖かいのである。吸ひ込まれた空氣は適當な温度にされて咽喉に通るのである。そこには鼻毛が密生してゐる。それ等は徒らに亂茂してゐるのではない。試みに鏡に寫してみられよ。その整然たる状態に感が深いであらう。鼻毛は極めて有意義なバリケードをなしてゐるのである。鼻毛はたゞに異物や塵の爲のバリケードではない。これがあるが爲に氣流が緩められて、温められることが大きいのである。鼻毛の空氣加温の役目に關係しても少し話を添えよう。それは鬚に就てである。人間には鬚があつて他

の動物にはない。こゝになかなか答の出来ない問題がある。それは別として、この鬚が鼻毛の補助の役目をしてゐるらしいのである。私は思ひながら自身で體験をしてゐないが、體験者の話によると、鬚を剃り落すと、その當座鼻孔がひどく寒く感するさうである。即ち鼻毛と共通の役をして呉れるもののやうに思はれる。但し考へ併せねばならぬ條件もあつて、鼻孔直下の皮膚が冷たいといふことが鼻孔の感じと混同されてゐるのではないか、といふ點などが一應考へられねばならぬが、少なくとも密生した鬚が鼻毛の役を助けてゐることは確からしい。アイヌ族の鬚などは寒地に住む爲に天與の賜であるといふべきである。——アイヌ族の毛髮の繁く長いことがその生活環境に關係がある。などと簡單なことをいつてはならない。それで天與の賜などといふ言葉を用ひたわけである——口から吸はれた空氣は廣い洞をいきなり咽喉につき當る。口は食ひ飲み話す爲の器官であつて、呼吸の器官は鼻なのである。

ところで人達は鼻だけで呼吸をしないで口からもする。勿論病人は別で、鼻の通じない人達もあり、鼻からの呼吸が局所的に有害或は苦痛な人達もある。これ等に屬しない人達も口で呼吸をする。平田篤胤先生の「賤の岩屋」は、先生の醫學生理學の講義で、その知識に敬服させられるものであるが、それには人は口と鼻から天地の大氣を呼吸する、といふやうに書いてあ

る。——マスクをかけてゐる人達は、天地の大氣ではなく、自分の吐き出した悪氣を繰返して吸つてゐる——これが日本人の常識である。鼻から吸つて口から吐くといふのも一方法であるが、口から吐くのが必要でもなく、都合のよいことでもあるまい。これから私の話の本筋に入ることになる。

鼻からのみ呼吸するといふことになれば、マスク使用の意味は頗る小となる。口から呼吸するからマスクの意味があるのである。鼻から呼吸して呼吸が冷たくて咽喉に害があるといふことは、健康者にとつては考へなくてよいことである。熱帯から来て年を経てゐない人達は別として、また病人は別として、それほどの氣象馴化の出来てゐない人達がざらにあるとすれば、これはとんでもない體位劣悪な國民である。寒い空氣中で呼吸すれば鼻頭は冷たい。私は北國で育つたが、鼻頭感覚がなくなるやうな夜もある。併し日本内地で鼻頭が凍傷を起すといふことはない。マスクをする一つの目的が寒さよけであることの多いのは事實とみてよい。この點が、國民體位の向上、國民身體の鍛錬といふ上から如何なものであらう。寒さよけ、餘計に暖かい方が氣持がよいといふ點から、手袋と襟巻きは同じだが、手袋は別のやうである。指は運動させ、感覚がなくてはならぬ道具である。鼻は動かさなくてもよい。鼻頭感覚などは

たいした用のあるものではない。襟巻きはマスクと共通の目的で用ひられる。但しそこには澤山の違ひがある。襟巻きは洒落にもなり見栄えの役にもたつ。マスクは如何に技巧を工夫したところで駄目であらう。このことは現實が示してゐる。マスクをかけて襟巻きをしてゐない人は先づ見當らない。派手な襟巻きよりは地味な襟巻きの方にマスクとの共存率が大きい。襟巻きの方では、自動車のタイヤのやうなのを頸から遙か遠方に肩から荷つてゐるといふやうな光景もあるが、マスクではこれに比適する光景はない。そこで話は自然襟巻きに及ぶわけだが、この邊で打切らして貰ふ。

さて鼻から呼吸するとすればマスクの意味は殆んど無くなつて、寒さよけといふことに歸する、と私は思ふのであるが、逆にいつて、マスクが廣く用ひられるのは口から呼吸するといふことが原因になつてゐるといはれよう。くどくといへば、口から呼吸して、寒さよけにするといふことである。一體吾々はどんな風に呼吸してゐるだらうか。何かの臓器が自分の體にあるといふことに氣がつくのはそれが不健全な時だ、といふ言葉がある。金言だ。食慾、消化、排便が健全な人には胃腸のあることが頭に上らない。指を怪我して、指といふものの存在をしみじみと思ふやうなわけである。呼吸とてもその通りで、鼻から呼吸してゐるか、口から呼吸して

ゐるか意識してゐる場合は少ない。併しそれが他人に就ては見當のつく途がある。堅く口を結んでゐる人が、口で呼吸してゐるわけではないからである。

呼吸と同じやうに、自分の口が常にどうなつてゐるかを心得てゐる人達は多くなからう。特に普通と違つてゐる人達は勿論例外である。私はこれに注意してゐる。そして他人のことも注目してゐる。注意してみるとまことにさまざまである。満員でない省線電車に坐はつて對側の一人づつを注意してみられよ。私は毎朝毎夕中央線を急行電車運行中に各驛停車の車で往復してゐる。満員といふことは稀である。短かい時間であるが、毎日のことだから、いろいろと觀察してゐると、思ひつく題目の種類も少なくない、題目によつては内容も豊かにされる。口の具合がそれ等の一つである。その状態にはさまざまがあるが、大なり小なり兎に角あいてゐる状態、即ち上下兩唇間に大なり小なりの空隙の存する状態が多いことが注目される。私は冬季の今これをマスクの問題と結びつけて考へるのである。鼻と口で呼吸してゐる人達が多いのであるから、それ等の人達にはマスクが有用なわけである。そこでマスク現状贅談になつても論理は通るわけであるが、私は反對にマスクの不用なやうに口の呼吸をやめたがよからうといひたいのである。そこで口の具合の問題を持ち込むことになる。

口の具合を男女、年齢、身分その他種々の點との關係に於て觀察すると、なかなか面白い所見があるやうである。目立つて感ずる點は女子に於て著しく多いことで、若い娘さんから、年増、中老まで總てを通じて多いのである。私はこれに就て二つのことを考へる。一つは、明眸皎齒といふ言葉が美人の形容或は表徴の一つになつて來てゐることである。エナメル皓白な齒の整つて美しい列は人體美のうちでアットラクティブなるものの一つである。娘さんで犬齒に位置異常のあるのは可愛らしい。病的美の傑出した例である。見せたいのは人情であらう。唇を離して美しい齒を現はすといふ無意識的な行爲があるかも知れない。また祖先に於けるこのやうな行爲が系統遺傳的になつてゐるのかも知れない。もう一つには、婦人では唇を緩めてゐることが、穩かに、しをらしく、愛嬌があるやうに見える、といふことがあらう。これは自己本質の表現ともなるであらうし、またカムフラージとしても有效なものである。無意識的に或は意識的にこれがなされてゐることも考へられる。皎齒の露示を美と見るか見ないか、如何なる齒列でも露出するのを愛嬌と感ずるか感ぜないか。これは民族的、個人的の趣味性の問題で、このやうな趣味性も相當に高度なものであるかも知れない。さすればこれはあまり感服出來ない趣味性である。日本人が他國人に比して齒質が良いのか悪いのか、専門家に質ねて

みないが、前歯に金歯の多いことは我國が世界無比のやうである。外國人は直ちに異様に感ずるさうである。なかには凄い程度があつて、お神樂の獅子面の如きがある。この種のもは、その露出が愛嬌を添えるとはどうも考へるわけに行かない。

兩唇の接着、接近の程度の差異の生ずる原因には、解剖學的なるものと、精神的なるものと區別されねばならない。その程度が個人各個に定まつてゐるものではなくて、時によつて變るのは、これ等の兩因が組合はされるからである。解剖學的に見れば、先づ下顎骨舉上の程度によつて、上下の齒列が合して居ると居らぬといふ差異がある。下顎骨が舉上されずゐて、唇の閉ちてゐる場合は先づ例外であらう。次には齒列が關係する。これが異常に前方に凸出してゐては、唇の異常を伴はなければ、唇は常に閉ちてゐないわけである。また齒列は正常であつても、唇が短かければ同様である。併し何れにしても、意識的に口を全閉しようとしてその出來ないといふ者は無い筈である。——兎唇の手術後に不可能になつてゐて、まことにお氣の毒な人達があるが、これなどは例外として——唇が離れてゐるのは、上唇が充分に延ばされてゐないか、下唇が舉上されてゐないかであつて、何れも形態學上で可能なることを行なつてゐないといふことなのである。唇の接着状態は唇そのものの長さによつては決定されず、

齒角の大小に關係するのであるが、下唇の長さはこれに關係することは稀で、その舉上如何に關する。上唇ではその長さが關係することがより大であつて、延ばすことを必要とするのである。従つて齒角の前出してゐる場合には、特にこれを延ばさねばならない。その結果は謂ふところの鼻の下の長いといふ状態を呈する。鼻の下の長いといふことは、我國では古來特殊な意味のものとされてゐる。實際その通りであるか如何か、私は多くの實證を承知してゐない。人體の二つの獨立の器官の間の形態發達の相關現象といふことがあるので、それがこの場合にありといふことではないか、なども想像するが、學者の研究を希望する。鼻下長の相を懸念して口をあけてゐるか、その懸念を排して口を閉ちるか。一思案の價值がある。

口の具合は、その時の精神状態で異なる。省線電車内で次のやうなことが見られる。男子の場合。試験前らしくノートやプリントを讀んでゐる學生諸君は、プラットホームでは口をあけてゐても、口を閉ちてゐる。工學書などを見てゐる人達も同様。新聞や娛樂雜誌を讀んでゐる人達は、プラットホームに居た時と同じ口をしてゐる。若い女子の場合。一人の時は口をあけてゐるのは少ない。相手がある場合は閉ちてゐるのが少ない。相手が同性である場合と異性である場合とは同様でなくて、後の場合に複雑であることはいふまでもない。

氣持のきちんとしてゐる人達は口もとをしつかりしてゐるだらうと私は思ふ。——この逆は眞ではないが——あ、ん、ぼ、ん、た、ん、といふのは口をあけてゐることである。愛嬌に、また外交的に口のあたりを緩めたなら、すんだ上で緊めたがよい。入學試験には人物試験がもたらある。去年からは中等校では考査が主要なものになつた。若しも私が試験の受持ちに加へられることがあるとすれば、口の具合といふものを採點目標の一つにして相當な點で取扱ふことにするだらうと思ふ。未曾有の非常時局に際會して、大國難を目の前に望んでゐる今日である。病人でない限り、口もとを緩めてゐてよい時ではない。氣持がしつかりしてゐても、口から呼吸してゐたのでは口は緊まらない。

だらだらと長くなつた。そろそろ結びにしよう。昭和二年に國際聯盟派遣の研究生として英吉利のドクトル・グレーといふのが來て、榮養研究所で一年間ばかり勉強して歸つた。そのグレーが、歸國して脚氣病に就ての短かい論文を、英吉利の衛生學雜誌に掲げた。それには三葉の圖版が添えてあつて、全紙大の寫眞が三種出してある。一葉は一人の農夫、一葉は農村の若い女で、共に仕事をしてゐるところ、終りの一葉は農村の子供達の群集寫眞で、二三十人の上半身が大きく寫つてゐる。それ等の説明に、日本人が口で呼吸してゐる状態が示されてゐると

してある。本文には、日本人で特殊なことは口で呼吸してゐること、七五%はさうである。その爲に氣道の慢性のカタルを起し、扁桃腺が腫大してゐるといつて、體位劣悪の一標徴として取扱つてゐる。グレーはたゞ單に衛生學の見地から書いたのであらうが、わざわざ大版寫眞を三葉も掲げ、一つ一つに呼吸云々と説明してゐる態度が、何か衛生問題以外に、日本人に關して彼の頭にあるものが露らはされてゐるのではないか、といふことを私に思はせた。このグレーと同時に來たブラデルからの研究生を私が世話した關係で、種々の機會に會ふ機會があり、その態度に高慢ちきなところがあるのに注意してゐたので、私には彼の腹の内までも想像するやうな氣持になるのである。そしてそれ等の寫眞に國民的耻辱といふやうなものを感じずには居られなかつた。

マスクをかけるのは日本人だけのやうである。日本人は口をあけてゐることに於て特殊であるやうである。諸君。鼻で呼吸することにしようではありませんか。口は結んでゐることにしようではありませんか。

(昭和十六年一月)

書物の顔

数日前のこと、永年支那にゐてロックフェラー財團の仕事の主任者として働らいてゐたG氏が、印度に轉ずるので來朝したのを機會に催はされた夕食の席に列した。その時にそのG氏の趣味が支那の古書集めだといふ話が出た。そして氏自身には支那文は讀めないといふことだつた。それで、讀めない本を集めるなどといふのは可笑しいといふ話もあつたが、私は、これは話せる、と思つた。そして北京あたりに落ちついて、小使錢が相當豊かにポケットにあつて、ぼつぼつと氣に入つた古版本でも買つてゐたら、とても愉快だらうと思つた。

といつて私は古版本などは一冊も持つてはゐない。私どもの身分で出来るわけの道樂でもない。持つてゐないどころか、あまり拜見したこともない。拜見する機會はある筈のだが、それに出かけるほど熱心でない。たゞ一度十數年前に、上野の美術學校で大藏會の會のあつた折

に、御物の聖徳太子様の御像を拜見に參つて、法華經の陳列を見たことがあつた。その時の版本に感銘がいまに至るまで深く残つてゐるのがある。それから經文の版本の氣に入つたのを一卷ほしいものだと思ひ續けて來てゐるのだが、搜がす熱心も足らず、財布も輕いので、まだ實現されてはゐない。ところが昨年暮に、奇妙な因縁で、古法帖類が四十ばかり、不意に自分の手に入つた。それを持ち込んだのは防空演習の日であつた。奥の六疊の部屋を閉め切つて、黒布で遮光した電燈の下で、仕事は休んで、二晩とつくりとそれを眺めて暮らした。まことに近年珍らしい清快な晩だつた。當分は古版本や古法帖を友としてゐられる身分でない。

私は本を見て、或は讀んでゐて、時々書物の顔、或は本の面つきといふことを考へる。それは表装や外見の體裁ではない。私はそれ等を着物のやうに思ふ。書物の本文の紙面にそれぞれ感じが出てゐる。私にはこれが書物の顔といふ風に思へるのである。親しみのある顔つきもあるし、剛直らしい面構へもある。洒脫な風のあるものもある。几帳面なものもある。一方にはまた間の延びただらしない感のものもあるかと思へば、鼻たれ小僧や、かつたい坊のやうなものもある。高値上質の紙を用ひて、贅澤な刷り方をしたといつて、それで顔つきがよいとは限らず、珍らしい材料を用ひて凝つたのでも、とんとそらそらしい顔つきになつてゐるものもある。

この邊に面白があつて、當り前の材料で、仕事が良いな技工で出来てゐて、内容とびつたり合つた顔つきをしてゐるのが、讀むものにとつて何よりうれしい。

人間でなりと顔とはつきものである。顔に似合はぬなりをしてゐては興がさめる。書物も顔つきとびつたりしたなりをしてゐて貰ひたい。これは併しこゝでは問題外として置く。

私に不思議に思へて、また興味をもつてゐることは、出版書店によつて、その出版物がそれぞれの顔つきをしてゐる例のあることである。銘々が印刷場を自営してゐるのならば不思議はないが、印刷所が或る程度まで共通であつて、それで特色のある顔つきをしてゐるので、私には不思議でもあり、興味もあるのである。具體的に書店の名をあげて、同好の士の御意見を求めてみたいのだが、この雑誌が丸善といふ木やさんの特殊な意味の雑誌だから、やめて置くのが無事だらう。

嚴肅で、それで穩かで、街氣がなくて、卒直で、それで精氣があるといつたやうな顔つきを古版本の或るものに見出す。近年は印刷術が進歩したおかげで、古法帖の複製版がいろいろ刊行され、なかでも技巧の優れたものは相當よく持ち味まで感じられるのである。まことに有難いことで、私のやうな貧生も、とつくりと樂み弄び得ることを得るのは有難い。併しいくら優

秀に出来てゐても、顔つきはぼやけてゐる。古版本の複製に於てはこれが一層である。つまりは貧生には思つても叶はぬ高望みである。

私は華麗な經文といふものに感が鈍い。先日高野山に登つて一夜を坊で泊めて貰ひ、寶物陳列館の靈寶殿を拜見した。幸にして他には殆んど人が居らず、長い時の間靜かに拜見することが出来た。數件の古寫經があつて、紺地金泥、水晶卷軸、世にも美事なものが拜見出来た。併しどうも私の性分に合はなかつた。

古版本といふほどのものではないが、私の書架に若干種の歐羅巴の古本がある。そのうちで新らしい方の分だが、クロード・ベルナルの論文集が一卷ある。論文集といつても、その形で出版されたものではない。論文の發表毎に貰つた人が集めて立派な製本に仕立てたものなのであつて、その人が私の専門にしてゐる寄生學の有名な學者である、ダヴェーヌといふのであるから、この意味でも私はこの一卷をばことの外に珍重してゐる。この論文集の顔つきがまことに結構であるので、更に一層これに愛着を感じてゐるのである。合本には、*Recherches experimentales sur les fonctions du nerf spinal ou accessoire de willis* (1851), *Nouvelle fonction du foie* (1853), 及び *Mémoire sur le pancréas et sur le rôle du suo pancréatique dans*

Les phénomènes digestifs (1856) の三長篇と四篇の Comptes rendus de l'Académie des Sciences の抜刷、外に Notice sur les travaux de M. Claude Bernard (1854) と云ふ一篇が集めてある。何れも Comptes rendus と同體裁で、長篇のは紙質が一段良い。脊髄神経のは Mémoires présentés par divers savants à l'Académie des Sciences の抜刷、腎臓のは Comptes rendus の Supplément となつてゐる。これ等の類つきが頗る氣持がよいのである。Comptes rendus は、現在に至るまでまるで體裁をそのままに保存して發行されて來てゐる。いま澤山の歐米その他からの學術定期刊行物と一緒になつてゐるこの雜誌を見ると、まことに時代遅れがして、うす汚なく見え、そして表紙も本文も至つて粗末な紙が使つてあつて、まことに野暮臭いのであるが、前記の長篇のものなどは、粗面の紙が可なり良い感じを與へて居り、附圖の精巧な石版圖も非常に立派だ。

序にこの本が私の手にいつた始末を書いて置かう。まるでたゞのやうな値段で買ったところに私の思ひ出がある。一九二一年の春だつた。巴里のカルチエ・ラタンで暮らして、二、三日毎位に、セーヌの岸の名物の古本箱を覗いたり、ひつかき廻はしたりしてゐた。挨拶をするやうになつた爺なども出來た。その間にいろいろ所謂獲物があつた。その一つがこのクロード・

ベルナールである。或る日、四折版の大型の眞紅の革表紙製本の一卷に、Claude Bernard — Mémoires — 1845—1862 とあるのをみつけた。見ると、前にいつたダヴェーヌに贈つたもので、à mon excellent ami le Dr. Davaine témoignage de sincère affection. Cl. Bernard. とあり、また外のところには à mon aimable et très eccliant ami といふ具合に町重な親愛を表らした自署がセピアのインキで書いてある。本文のあちこちに誤植の訂正が書き加へてあつて、それが同じインキで同じ手蹟である。値を質ねたら爺は二〇フランと答へた。たゞの雜書だと思つてゐる爺の足もとを見て、惡氣を起した私は、まけて置けといつた。爺は著者のオートグラフがあるから少し奮發して買へといつた。オートグラフといつたところで、それは著者によりけりである。一體この著者はどういふ人なんだね、と私はやつた。——どうも質のよくない私である。——爺は知らぬといつた。まけとけまけとけといふわけで一五フランで買った。當時の一フランは七錢ばかりだつた。それからダヴェーヌの自署のある本が一冊ほしくなつた。それも幸にして日ならずして手に入つた。Entozoaire といふので、私どもの學問での古典である。そこで物ずきが嵩じて、ダヴェーヌがその本を贈つた宛名の人の著書を手に入れてやらうと思つたが、不幸にしてそれは學者ではないらしかつた。

いくら書いても、こんなことは読者にはつまらなからうから、この邊でやめる。

醫學博士と病人

市内、住宅地、郊外を歩いて甚だしく目につくのは醫學博士の標札、廣告である。私達が中學生であつた頃には、醫學士といへば相當なもので、その数が當今の博士ほどはなかつた。我國の醫界も變つたものである。しばらく前から文部省で發表した氏名がその都度日刊新聞に掲載されてゐる。注意して見る人達にはその大きい数が印象を與へてゐるであらうと思ふ。そこで起つて來てゐるのが博士濫造といふ聲である。

私は醫學を修めた者でないのに、醫學校の教員をして、一教室を擔當してゐる。そして年々何人かの醫學博士を社會に送り出してゐる。つまり醫學博士増數に若干の關係を有してゐる人間である。従つてこれに就ては周到に考慮すべき責任を感じてゐるわけである。

この問題は、いふまでもなく二つの面をもつてゐる。學術界の現象としての問題と、社會的

に見た問題である。讀書諸君の多くに交渉の深い社會的の方面に就て少しく考へてみると、種の多くの問題がある。この問題に就て、醫學圏外からも、またその圏内からも、それぞれの批判や意見が出てゐるのを見てゐるが、この問題がまだ周到に表裏から吟味されることが不足してゐると私は感じてゐる。特に一般有識階級に、この問題の内容の理解を促がす要のあることを感じてゐる。この短文は前記の目的で書くのではない。先夜ある必要あつて作つたノート的一篇と併せて、この問題に關する私見の一つを述べてみようとするのである。

醫學博士の数は研究發表の論文の數と相關したものである。そこで我國に於けるそれ等の數の吟味から話を始めよう。さて我國の醫學界は、研究發表の狀態から眺めて淋しいか賑かであるか。この點は直ちに答へられる。なかなか賑かである。先づ各種の學會が多數である。基礎、臨床の各學科、各部門で獨立の學會を有しないものはない。科によつては二つ三つ或はそれ以上の學會をもつてゐる。出版物の數がまた頗る多い。

上記の諸學會の多數のものが機關雜誌を出してゐる。全國十六の官公立大學、三つの私立大學、何れも研究發表の爲の相當分量の雜誌を刊行してゐる。九つの醫學專門學校のうちでも三つはこれを出してゐる。研究發表のみに限り、或はそれを専らにする月刊の雜誌は大體四十と

計算してよからう。その他の學術的内容のものが約同數、これに類するものを加へれば一百を下らぬであらう。私は幸にしてそれ等の大部分を常に閲覽する便宜を得てゐるのであるが、多い時には、それ等の目次を閲して、自身の關係部門の論文カードを作るのに追はれることがしばしばである。まことに賑やかなものである。我國に於て、これほど多數の研究論文が月々に刊行される他の學術部門を私は知らない。外國に就ては、斷定的なことを申すのは僭越であるが、私は諸國でこんな盛況は知らない。兎に角、その研究發表の量に於て世界に冠たりといふことが出來ると私には思へる。そこで先づこの量のことを話題としてとり上げよう。

卒直に私の所見をいへば、これは研究發表者の頭數が多い結果である。而して何故に研究發表者の頭數が多いか。これには三つのことが想定され得る。先づ我國の醫師、醫學者に研究的態度が旺盛であるのか、次にはそれ等の人達の多數が或る時期に研究發表に熱心になるのか、第三に發表機關が澤山にあるのか、それ以外にもあげられようが、こゝでは以上に止めることにする。

さてこれ等の想定の内何が實際なものであるか。簡單卒直に所見を述べれば、第一ではなく第二のものであつて、その結果として第三の現象が生じてゐるのである。更に深入りして申せ

ば、醫學博士號志望者が多いといふところに源泉がある。

右のやうに申しても、左まで意外な、突飛な、或は皮肉な言葉だと感じられる方は多くあるまいと私は思ふ。具體的に申せば、明白過ぎる事實である。試みに二三の事實をあげよう。前記の如き賑やかな研究論文の發表數、それは内輪に見積つても毎月四百篇、年に五千篇には達するとして、それ等のものの著者のうちで醫學博士の學位を有する者の數がどれほどに當つてゐるかを注意してみると、5%には達せぬと私は思ふ。これを逆に醫學博士の數からみると、昭和十二年度の十一月までの授與數が八六九名、その前年度が九五六名である。そこでこれを一年九百五十名と概算する。これ等の人達が平均四箇年間研究してゐると假定すれば、一年の研究者が三千八百人といふ計算になる。四年のうちの後半の二年に専ら研究の結果を發表するとすると、その員數の概算が一千九百人、各人がその期間に五篇の論文を出すすれば、九千五百篇。それで丁度前に掲げた一年五千篇といふ數字と算盤が合ふことになる。

各人が五篇といふ數字に就ては、近年の學位請求者は、少なくとも三篇か四篇、多いものは十數篇を提出するやうであるから、それ等のうちで研究的なものが平均五篇と見ることは多きに過ぎてはゐまいと考へる。

なほもう一應研究機關の方から、右の數字を當つてみよう。官公立十六大學、私立三大學だけに限つて見て、一校一學部の教授平均を二五名と假定して、(東京三八名、九州二七名、慶應二九名)、その概算四七五名、半數が研究を指導してゐると假定して、その數が大略二四〇名、各人が一五名づゝ受持つてゐるとすれば、研究者の計が三六〇〇名となり、こゝでまた前記の九五〇名の四倍の三八〇〇名といふ數字と算盤が合ふことになる。

そこで今度は一校一大學當り約一九五名の研究者といふ假定がどうかを考へてみると、一々の學校に就て正確には知り得ないが、慶應大學の醫學部では約二五〇名ある。東京、大阪の帝大の如き附屬研究所を有するものもあるから、右の假定は實際に遠いものではないとしてよからう。

さてくどくどしく書いて來たが、以上の如くであるが故に、研究發表の様様からみて頗る賑やかである我國の醫學界で、その賑々しさの源が何處にあるかといふ問題に對する、私の答へを説明し得たと信するわけである。そこで醫學博士といふことが問題になる。

醫學博士の看板は、當今は世の中で目立つものの一つである感があるが、實數に於ても亦たいたした數である。昭和十二年の全國醫師の數が五五九三一名、それに相當する時までには授與さ

れた學位所有者は一〇二六一名、内死亡者五四一名、差引九七二〇名、即ち醫師總數の一七%以上に當つてゐる。

學位所有者で醫業を営んで居ない人もあるのは勿論だが、これは全體から見ても大きい數ではない。昭和十三年年度の醫科大學卒業生が一七七六名、醫專卒業生が一四八四名、計三二六〇名、一年の學位授與數を九五〇名とすると、醫師増加數のやがて四割の數の博士が出来る計算になる。電柱廣告の壯觀などは驚くに足らぬことである。

以上、くどくどしく醫學博士が源になつて我國の醫學界が賑やかだといつたのであるが、この現象が結構なことか、つまらぬことか、或は望ましからぬことだらうか。これは學問の立場と醫療の立場から別々に考へられるべきものである。先づ學問の立場からいつて、私はこれを結構な現象と考へる。三年か四年、長くて五六年しか研究生活をせず、然も、兎、モルモット、廿日鼠ばかり相手にしたり、試験管や顯微鏡ばかりをひねくつてゐて、人間相手の醫學博士なんてちゃんちゃら可笑しい、といふ批評が多い。併しこれは研究といふものの價値を知らぬ言葉である。説明するまでもないことであり、こゝではその餘裕もないが、眞面目に研究生活をすれば、それが三年であり四年であつても、その後の仕事に及ぼす感作は少なくない筈で

ある。勿論本人の人格と心掛によることであつて、輕蔑さるべき醫學博士も少なくはないが。一方これを學問の側から見れば、多數の研究者が教室に集まることは有難いことである。無俸給で、或はその上に材料消費費を自辨し、なほ更に規定の納金までもして、指導教授の指圖のままに研究をする人達が澤山にあるといふことは、醫科以外には見られぬ現象であるに違ひない。少なくとも研究室をあげたり、一定の問題の研究を進めて纏めて行かふといふ者には、まことに結構な状態である。

さてこゝで出て來るのが濫造といふ問題である。濫造といふのは質と量とに亘つた言葉である。良質のものを過多に生産することを濫造とはいはぬやうである。それは何れであるとしても、醫學博士の濫造といふ言葉は、あまりたいしたもんでない博士を澤山に作り過ぎるといふことと解してよからう。そこで濫造か濫造でないの問題だが、それには深入りしないで、假りに濫造であるとして、それが社會一般とどんな關係になるものか。

醫學博士濫造といふ非難の大きなものの一つは、臨床上に、つまり診療、治療に實力の缺けてゐる醫學博士があるといふことである。これは正に事實である。一般世間の人達よりも實狀を多く知つてゐる私などはまことに同感である。併し私は右のやうな非難をする人達の輕卒を

も遺憾とするのである。それ等の人は醫學博士といふものを承知して居らぬのである。醫學博士といふ肩書と實力のある醫師といふことを簡単に結びつける輕卒をしてゐるのである。先頃亡くなられた入澤達吉先生は、適切な言葉をいはれた。それは、「世人は醫者にかゝりやうを知らぬ」といふのである。早い話が、たゞ醫學博士だといふので信用してかゝつて、まづい始末になつたといふ場合には、その醫學博士の力量の不充分ばかりでなく、患者の側にも大きい輕卒がある。醫者にかゝりやうを誤つた部類に屬する場合が多からう。

どこの家庭にしる個人にしる、雜貨屋、肉屋の撰別はする。床屋に行くにも撰別はする。これ以上に大切なもののない身體、生命、而かも故障の起つた状態にある身體、生命を托する治療醫の撰別に當つて、醫學博士の肩書だけを信用するなどといふ輕卒をすることは、辻褄の合はなすぎることである。

醫學の進歩は専門部門を狭くしてゐる。醫學博士にはその専門の範圍の狭いものが多い。そこで専門醫を選ぶといふことが、醫者にかゝり方の第一義になる。併し人間の體の機能は専門的になつてゐない。當今の言葉でいへば全體的な仕組になつてゐる。反面には、専門家を選ぶことが、醫者にかゝり方を誤るといふ結果になる場合も生じさせるのである。

こゝに入澤先生の貴い言葉を紹介する。醫者にかゝり方といふことは國民保健の上で、公衆教育上の重要な課目である。放送局などが是非とり上げねばならぬ題目である。

(昭和十四年二月)

醫藥と醫療

先日私は三峯神社に参つた。ケーブルに乗らずに、森のなかの濕つた坂を登り、岩路を奥の宮に詣で、一夜参籠して、未明のお勤めに列し、清朗な山氣を呼吸する歡びを得た。往路、熊谷驛で乗換えた電車の、運轉手の背に當るところに大きな廣告が出てゐた。それが當今流行のスルフォンアミド劑の廣告だつたのは意外であつた。あの電鐵の沿線は滿蒙開拓農家の澤山に行つてゐる地域である由で、車中には、開拓地から一時歸郷してゐる人が乗合はせて、私の近所に坐はつてゐる乗客の一群と、彼地の話をはづませてゐた。いろいろと實情の耳學問をさして貰つたわけで、嘆かはいし氣持をさせられた節も少なくなかつた。それはさて置いて、私に感じの深かつたのは前記のスルフォンアミド劑の廣告だつた。

スルフォンアミド劑とだけでは御承知ない方も多からうが、一部の人達には近頃馴染の深い藥で、或は至つて馴染の濃厚なものになつてゐるのかも知れぬ。こゝでこれを持出したのもその故からである。一應説明すれば、今から三年前はドイツのバイエル會社が「フロントジル」といふ名で世に出したのが始めで、スルフォンアミド基のアゾ色素劑である。これは連鎖狀球菌に對する殺菌作用を有するもので、丹毒、敗血症、産褥熱等の重大な疾患に著效を奏するもので、獨逸がまたしても華々しい仕事をしたといふ感をもたせたものであつた。續いて佛蘭西の學者が一新生面を開いて、ドイツの特許に牴觸しないで、スルフォンアミド基に種々のものを結びつけて、同じく有效な製品が出来ることになつた。ところでまたこゝにこの藥に人氣の集まる事情が生じた。それは淋疾に著效のあるといふことである。これを認めたのは亞米利加と日本とであつた。これから遽かに名をあげて、あらゆる製藥會社が製品を競つて出して來た。國産品が出始めたのは、支那事變が進行して大陸に於ける皇軍の武威の揚りつゝある時期で、出征を送る旗の波が勢のよい頃であつた。その時に省線電車のなかにこの藥の美しい廣告が出た。そしてその横書き文字の廣告の頭の列に、「外地性淋疾」といふ文字があつた。私は藥業者の心根を悲しく思つた。幸にしてその廣告は短かい間で終つた。

現在幾通りの製劑が賣出されてゐるか私は正確に知らない。併し醫學雜誌を見ると一冊に數

種のものが載つてゐる。よく調べると六十通りもあるといふから驚かされる。賣行きの盛んであらうことも想像される。この系統の薬は、前にいつたやうに連鎖状球菌による疾患に偉効のあることが認められたものであつて、淋疾ばかりに用ひられるのではなく、肺炎、扁桃腺炎、その他種々の疾患に用ひられてゐるのであるが、何といつても恩恵に最も廣く浴してゐるのは淋疾患者である。

三十年近い以前、サルヴァルサンが創製されて、微毒必治といふ評判がどつと高まつた時、性病に對する恐怖心を無くするといふことが、良風美俗に關係するであらうといつて、嘆じた向もあつた。今度も同じわけだが、その聲は聞かれない。といつてこゝで私がそれを試みようといふのではない。この薬を一例にとつて、もつと廣い範圍のことをいつてみたいのである。サルヴァルサンは注射薬である。スルフォンアミド劑は注射用もあるが内服薬がある。そして薬舗で賣つて呉れる。といふことは、サルヴァルサンとは違つて、誰でも買つて服用することが出来るといふことである。こゝに問題がある。

昔の醫療は、醫師と患者の結びつき、その外に賣薬があつた。醫藥は醫師の薬局から出た。薬禮が醫療全體への禮金であつた。一方賣薬には服み過ぎて害になるものは無かつた。なかに

は鼻糞まるめて萬金丹といふ類のものもあつた。ところで今は醫師も變り、病人も變り、薬も變つた。薬業者も變つた。廣告の方法も變り、その効果も變り、何よりも人間の頭が變つた。そしてまたそれ等の結びつき具合が變つて來て、醫師をぬきにして一般人がその變つて來た薬と結びついて來た。病氣には百發百中に效き、如何ほど服用しても害はない。といふのが理想的な薬であらうが、實際はさうは行かない。反對に、効果の顯著な、また速效的なものは大體有毒である。そのやうな薬が一般市民と結びつく傾向が近代人に見る一つの特徴なのである。こゝに問題がある。

話が、三峯山行き電鐵内の廣告に戻る。あの廣告は醫師を目的のものではあるまい。薬業者は醫師に向けては偉大な努力を注いで廣告をしてゐる。前記の省線電車内の外地性云々の廣告なども、醫師に向けたものでないことは勿論である。あの電鐵の走る區域は秩父といふ産地であるが、近年の農村不況は著しかつたといふ。商賣人が効果の無いことの明らかな廣告をするわけではないと私は見る。それでスルフォンアミド劑の如きが、あのやうな地域にも相當数の服用者があるものと私は見るのである。

淋疾は他人に知られたくない病氣である。専門醫師の戸口に入る場合に、外の病氣の場合と

は大なり小なり氣持に差がある筈である。待合室で同じ會社の重役と平社員が顔を合せたりしては、双方ともまづい場合もあるだらう。この點を考慮して、患者が続いて來ても顔を合はせる機會のないやうに巧みに工夫してゐる醫院などもある。そこで藥舖で購つて内服が出來て、そして偉效のある藥が出現したといふことは、この場合に於て特に意味の大きいことなのである。そこでこれが病者を減少させるのみで、外に影響するところが無いのであれば、先づ結構なことといつてよからう。種々の見地、種々の立場から結構ではないともいはれるから、斷言するわけではない。ところでこれによる故障がぼつぼつ現はれて來てゐるやうなことを、私は耳にするのである。中毒症狀のある者があり、また偶然な致命的な事件なども生じてゐるらしいことである。

諸君の理解の爲に想像話をしてみよう。市販品には一々使用法票がついてゐる筈である。それによつて服用するにしても、素人には服用の限度は明らかでない。また一方には念を入れるといふ氣持もあり、少量よりは多量、少時よりは長時間の方が有效であるやうに思ふのも當り前である。服みすぎるといふ傾向は一般にあると考へねばならない。も一つ重要なことは、人間といふものは一人々々が別であることである。面相が違ふやうに、一人々々の内臟機關の

機能には違つてゐるところがある。先天性の素質、特異質といふものもある。甲に安全な量が必ずしも乙に安全ではない。なほまた淋疾の場合に、配偶者にも感染させること、或は既に感染させてゐるかも知れぬといふことを心配して、症候の有無に拘らず、それにも服用させるといふことも行なはれてゐるらしい。そのうちには、事實を語らずして、保健劑などといつて服ませてゐる場合もありさうなことである。そこで中毒を起す場合の生ずることは、極めて明らかである。なほまた次のやうなことが起り得る。肺炎とか細菌性の耳鼻科の疾患とかに罹つた人があつて、醫師がこの藥を注射する場合があるとす。注射藥が何であるかを一々質ねる患者は一般には無い。同じ類の藥を或る量まで自用してゐることとかち合つた場合に、急性中毒の起り得ることも當り前である。

醫學が進歩して醫藥にも新しい考が出て來、製藥化學が進歩してそれと手を握つて新しい製品が作り出される。これは有難いことだが、醫學者も人間だから、金儲けのしたい仁もある。藥業者はそれが商賣だから必死である。片假名文字で何々インとか、何々ロルとかといふ名で日に日に迭出し賣出される。片假名文字の名だと何となく學問的で效きさうな感がある。業者も命名に頭を使つてゐるに相違ないが、あとからあとから出すのでうまい考のない時もある。

ると見えて、なかには微苦笑的といつたやうなものがあり、全くお笑ひの種なものがあつたりする。實例を出すのも一興だが、商賣の妨害になるからやめて置かう。とにかく新藥といふものが出ることは大變なものである。それが如何に盛んなものであり、その廣告、賣り弘めの如何に商賣的であり、また如何に費用が投じられてゐるかは、醫師以外の諸君には到底想像のつく程度のものでない。——一流の業社は研究室を充實させて、學問的にも貢献してゐるといふ一面も決して見落してはならぬが、——私は醫者ではないが、三十餘年來の職業名の關係で、それ等の廣告宣傳先の名簿に出てゐて、送つて來る澤山の印刷物やサンプルを捨てるのに、勿體なや勿體なやの念佛でも唱へたいほどである。

新藥が如何ほど賣出されやうとも、それが一々如何なるものであらうとも、それが醫師によつて使用される限り、醫療の方法と技術の問題であつて、受療者の關係するところではなく、適確に治療して貰えればよいわけである。併し簡單にそうは行かぬ事情と條件がある。この問題にこゝでは觸れぬことにする。際限がないからである。ところでこれ以外に新藥並びに化學藥品が醫師を介せずして服用されるといふ點に全く別な問題がある。スルフォンアミド劑の前の記の場合が一例である。

新聞雑誌の廣告でにがにがしきもの、大學新聞の飲食店の廣告、綜合雑誌、普通新聞の新藥の廣告と、私は思つてゐる。前者は馴染の深い反影であり、後者は業者が廣告費を極めてたつぷりと計上してゐるといふ關係もあらうが、やはり醫師以外に充分な効果を認めてゐる爲であらう。今日の新聞にスルフォンアミド劑が扁桃腺炎に卓效があり、内服によつて、手術なしに全治するといふ廣告が出てゐた。扁桃腺炎は家庭で氣にやむ普通の病氣である。この廣告の効果はけだし大なるものがあらう。實際インテリ層のうちに新藥、化學藥の使用者が案外に多いところをみるとこのやうに考へられる。なほ二つ三つ追加して置かう。

何といつても一番多く用ひられてゐるのは睡眠劑だらう。一部の方面ではこれを服まぬのが例外位になつてゐるかのやうにも聞いてゐる。私は、それ等の人達が、自然的な睡眠を得るやうにする生活の方法、或は服藥以外の方法を考へ、またそれを實行する努力が缺けてゐるやうに考へて、不可解なことと見てゐる。

次はホルモン劑。ホルモン劑にもいろいろあるが、これの注射と稱するものには相當に如何がはしいものがある。但しこの注射に錢を拂つてゐる人達は、何れ何かの形で無意味にその錢を浪費してゐる連中が多いのであるから、それ等を相手に如何がはしい注射をして金儲けをし

てゐる醫師の仕事も、いはゞ似た者同志間の取引で、社會問題としては軽くはないが、中毒といふやうなことはあるまいから、保健上の問題にはならぬであらう。ところでこゝにも前と同じ問題があるやうに聞いてゐる。藥業者は續々とホルモン剤の製造賣出しを行なつてゐる。そしてますます強力なものが出来て来る。高價なれば餘計に效くと考へるのが人情である。そこにまた錢の惜しくない人間と、金に慾の強い醫師とがあるから、その結果はホルモン剤の中毒患者といふものが生じて来るわけである。そのやうな患者はもともと錢をもつてゐるから、醫師にはそれから後も引續いて儲け口があるといふやうな仕掛になつてゐる、といふことである。

その次はビタミン劑。ビタミンが榮養上不可缺のものであつて、ビタミン缺乏がさまざまな障碍を來し、ビタミンの服用を必要とする病氣があり、これの服用が健康を改善増進することのあるのはいふまでもない。併しビタミン劑を服むことが誰にも有效だといふことではない。またそれを服むことが必要である者でも、服んで必ず有効であるとは限らない。藥を服めば、その藥に特有の働らきや作用が必ず自分の體で生ずると考へることが、そもそも誤りのもとである。私は大學で生理學の講義を故人の大澤謙二先生から受けたが、或る時間先生は、『腹は身のうち、と昔の人はいつたが、腹はまだ身のそとです』と笑談を交へら

れた。服めば自分のものになつたやうに思ふが、腸から吸收されて淋巴、血液に攝込まれないうちは自分のものでない。そればかりでない。血液に攝込まれたとしても、それが臟器細胞に結びつかねば、まだ本當に自分のものになつてはゐないのである。血液に入つて短時間内に腎臓に行き、そこで直ちに尿に入つて排泄されたのでは、たゞ通らせてやつたといふだけのことである。高い錢を拂つてビタミンの體內素通り。これではつまらない。ビタミン缺乏症には、身體の細胞にビタミンを自分のものにする性質が缺けてゐる爲のものがあるのだと説明すると、合點が行く事實が多い。ビタミン劑には中毒といふことは無いから、この點問題ではないが、當今この類の製劑が如何ほど流布してゐるかを思ふと、さても勿體なやといふ感が深いのである。

(十五年十二月)

英京爆撃

獨空軍のロンドン爆撃もだいぶ續いて來てゐる。每晚ラヂオでそれを聞いて、さまざまの思ひ出を私は味はつてゐる。

或る晩の放送は、皇帝皇后兩陛下が爆撃の跡を廻られたことを報じた。そしてその巡視の途中で警報が鳴り響いて、兩陛下も防空壕に避難なされ、壕内の市民達は拍手して迎へ、やがて午後のお茶の時刻であつたので、ビスケットと茶を召上つたと報じた。私はこれをまことに面白く聞いた。

英吉利人は午後のお茶を飲まないではすまされぬものらしい。その時以外にはお茶は飲まぬが、午後のお茶は必ず飲むといつた方が正しからう。訪問してもお茶は出さない。心易い間などではお茶の時間に訪問する。簡単な打合せなどにはお茶の時間に會合するといふ風である。

學校でも研究所でも午後三時にはきまつてお茶を飲む。空襲警報中の地下に避難中の陛下もビスケットとお茶を飲まれるのである。

私が最初ロンドンに行つたのは前回の世界大戦直後であつた。滞在にいろいろ手続きが入用で、警視廳で滞在許可證を貰ひ、警察署でバタのカードを貰つたりせねばならなかつた。警視廳に行つたら澤山の外國人が詰めかけてゐた。二、三百人の男女が一つの室にぎつしり詰まつて、漸く身動きが出来る状態である。その群衆のなかに巡査が二人立つてゐる。ロンドンの巡査は丈が高いので有名である。もともと長身といふことが採用の條件だといふから、當り前である。女巡査は男巡査に比べてずつと低い。或る時、あの女巡査なら俺と大差あるまいと思つて、わざわざ側に行つてみたら、頭だけ高いので苦笑したことなどもある。餘談になつたが、二人の巡査が頭だけはつきりと二、三百人の人間の上に出して整理をしてゐる。そのうちに他の巡査がぎつしり詰まつた群衆を分けてやつて來た。その手にパンケーキの皿とお茶を持つてゐる。執務中の仲間のために持つて來たのである。貰つた巡査は、人間の頭の上で兩肘を浮かしてそれを食つて飲んだ。やがて空いた皿と茶碗をもつて、群衆の間を泳いで、壁の高い窓枠の上に載せた。こんな時にも、こんなにしてもお茶を飲むのだといふことを感心して眺めた。

とだつた。兩陛下と同席した——同穴した——市民達もお茶を飲んだかどうか、ラヂオではいはなかつたが、恐らく飲まなかつたらう。そして何ともいへぬ物足らなさを嘆じたことであらう。或は魔法瓶を持つてゐた連中などもあつたかも知れぬ。

この報道で感ずることの一つは、英吉利人の落ちついてゐることである。空襲下でも三時になつたらお茶を飲むといふ落ちつき方は、われわれのよく留意すべき修養である。

また或る晩の放送は、爆撃の火事のために、夜間ロンドンの空が赤く見えたといふことを報じた。これには私は驚いた。ロンドンの建物があちこちで火事を起すといふことを聞いただけでも、可燃材料であるわれわれの家の場合を考へて肌寒い感がするのにも、空が赤く見ゆる程にあの建物群が焼けるといふ凄まじさには全く寒心させられたのである。

夜空の明るいといふことに就て、私は思ひ出をもつてゐる。日本では都會の夜空は明るい、ロンドンでも巴里でも夜空はまるで暗いのである。久しい以前に或る小説——谷崎氏の作だつたと思ふ——で、兄なる人が東京の下宿屋で、東北から上京して来る弟の來着を待つてゐる場面を読んだ。それに、今頃は汽車が上野に近づいて、弟はまちもどかしい氣持ちで夜汽車の窓から頭を出して東京の空明りを見入つてゐるだらう、と考へてゐる、といふところがあつ

た。私は貧乏遊學に、ロンドンで草鞋をぬぎ、一應仕事を終つて、ドーバー、カレー經由で巴里に移つた。そこで新しい勉強をしようと思つてゐたので、いはゞあこがれの巴里入りだつた。途中で故障があつて、日が没しても着かないので、退屈と焦慮の氣持だつた。その時にふと頭に浮かんだのが、前記の小説の一節だつた。花の都といふ巴里だ。その巴里の明るい夜空はまだ見えぬかと、車窓から頭を出してみた。明かるところはまるで無い。明かるといふ時きめて幾度か見たが見えない。そのうちに汽車は暗い巴里の暗いステーションに着いた。巴里でも伯林でも夜空は暗く、街も暗いものだといふことを知らなかつたのである。

東京の夜の空は明かるといふ。私は中野に住んでゐるが、新宿の空の法外に明かるといふのを氣にしてゐる。日本の都會の空の明かるといふのは、家屋の低いこと、商店が夜間營業をしてゐるためでもあるが、景氣づけ電光、客寄せネオンの過用、市民の時間と金錢の無駄遣ひ、それに空中の塵芥分子の多いことの結果であると思ふ。明かるといふとはといへば、商人並に市民の金錢、物資の浪費にあると思ふ。時々新宿の空を眺めて、日本の都會ももつと空が暗くなければならぬ、と痛感するのである。

佛蘭西を憶ふ

佛軍は破れた。巴里は獨軍の占領下にある。その佛蘭西の醫學の展覽會が先頃東京で行なはれた。少しばかり關係した私には、若干の感慨を禁じ得ないものがあつた。佛蘭西を憶ひ、また日本の現在を考へてである。

私はこの展覽會期間に催された講演會の一夕を引受けて、ラマルクとキュヴィエーに就いて談話を試みた。ラマルクもキュヴィエーも醫學者ではない。醫學者でないこれ等の二人を採り上げたのは、本來私が醫學の人間でなく、これ等の兩者が生物學者であるといふ理由だけからではなかつた。佛蘭西の時局、日本の時局に際して、これ等の兩學者を憶ふこと切なるものがあるからであつた。

巴里の中央部、セエヌ河の岸に廣大なシャルダン・デ・プラントといふのがある。植物園と

動物園と博物館、それに大學の研究室、大小の講堂等が綜合されたものである。近年は時代遅れの状態で、至つてモダンでなく、アンシャンレジームの臭ひの残つてゐるやうなもので、學問的には至つて淋しいものであるが、曾ては歐羅巴に、従つて當時の世界に類の無い博物學の大殿堂であつたのである。そしてこの大學園が成立し發展したのが、平和な佛蘭西に於てではなくして、大革命の禍亂の裡に於てであつた。制度が作つたものではなく、人が作り上げたものなのである。また自ら作り上げたものなのである。私は現下時局の日本に於て切にこれを憶ふのである。

このシャルダンの起原は王家の藥草園、植物苑であつて、醫藥學生の教育などにも利用されてゐたのであるが、博物館として發展させたのはプエッフォンの偉業であつた。プエッフォンはルキ十五世の特別な援助と奨励のもとに、陳列室、化學室、講堂を設け、當時の豪勢な佛蘭西の國力、ルキ王朝の權勢、且つは彼自身の學的社會的聲望のために、佛蘭西へ、王朝へ、またプエッフォンへと國內國外からの蒐集がこゝに集まり、無比なものとなつた。また『プラトーンに「思想の畫家」といふ名が與へられるが、「自然の畫家」といふ名が更に彼に適切であ

る』といはれたブエッフォンは、活潑な「博物志」を書いた。卅二歳の若年にして園長に坐つた彼は、在任四十九年、その光輝ある生涯を終つたのが一七八八年、その翌年が大革命の開幕パスチーユ事件の年である。ルキ王朝に適はしい豪華な存在であつたブエッフォンは、それと時を同じうして、調子の合つたその生涯の幕切れを演じたといへよう。このブエッフォンの死と入れ更つてシャルダンに登場したのがラマルクである。

ラマルクは北佛蘭西の農村の裕福でない舊家の十一人兄弟の末子として生れた。武人風な家庭に育つて軍人志望であつたが、父親は神學校に入れた。たまたま父親の死に會して、それをチャンスに、彼は學校を脱出して軍隊に走つた。時は恰も七年戦争の終局に近い時に當り、奥、佛、露の聯合軍はフレデリック大王の軍を壓して、佛蘭西軍は獨逸國內に進出してゐた。彼が瘦馬を走らせて軍に投じた翌日がフィッシングスハウゼンの會戦で、味方に利あらず、彼はその敗軍にあつて武勳をたてた。士官に任命され、戦争終止後南佛の海岸で軍務に服してゐた。運命は併し彼を將軍にはしなかつた。負傷して退役となつたのである。巴里に出て、更めて貧寒な生涯への出立をした。金融業者の手代のやうなことをしたりして口を糊し、氣象學や植物學を勉強した。そして終に「佛蘭西植物誌」の大著を完成した。時に卅四歳である。その

頃になつて、學界の王者ブエッフォンの知遇を得て、學者としての好運に向ひ始め、一七八九年六月にシャルダンの植物腊葉室の主任になつた。併しラマルクは所謂不幸な運命の星の下に生れた人であつた。任命の翌月十六日がパスチーユ事件である。

茲で話は大革命の暴風雨裡の巴里の博物學界に戻る。ルキ王朝のものであるシャルダンがいまから二百四十年前の前、博物學といふものは芽生えてまだ若い時代、學術と國力の進展の關係といふことに就て、今日とは異つた考へのされてゐた時代に、大渦亂の裡に置かれた。その運命は常識的に考へて光明のあるものではなかつたであらう。それが以下に略述するが如き輝かしい發展に導かれたといふことは、常識的なるもの、自然的なもの、世に例の多いものでないことは明らかである。而してそれは當事者の内からの力によつて爲し得られたものであることに千金の値がある。

革命政府は先づシャルダンの人員減少を計つた。そして廢止さるべき位置の一つがラマルクのものであつた。これに對して彼は反駁の意見書を書き、またシャルダンを積極的に改進させて、科學、技藝、通商振展の機關となすべきであるといふ意見書を併せて出した。次々に打ち寄せる大不安の裡に諸員の努力が續けられて、遂に一七九三年に改造擴張案が國民議會に認め

られた。即ちルキ王が斷頭臺の刃に血を塗つた恐怖時代の第一年である。ラマルクの位置は低いものであつたが、その強烈な精神力はこの活動に大きい力を致した。シャルダン・デ・ブラントは斯くして更生し、十九世紀の科學界に嚴然たる存在となつたのである。會議を開いて圓卓の上で組立てられ、豫算が通過し、そこで研究者が集められて成立したものではないのである。更新シャルダンに十一の部門が設けられ、ラマルクは、またまた不運にして、植物學の位置は他人に占められてしまひ、無脊椎動物といふ、彼にとつては、それまで研究どころか素養もなかつた部門に當嵌められた。而も年は既に五十歳になつてゐた。そして無脊椎動物の方面は學界未開拓の分野であつたが、彼の絶大な精神力と頭腦は、やがて「無脊椎動物誌」七巻を完成せしめ、一八〇九年には進化論の第一書「動物哲學」を出さしめた。

前記の十一部門の設立と共に、新設の解剖學の部門擔當者としてシャルダンに入つて來たのがキュヴィエである、ラマルクよりは廿五歳の年少で、ノルマンディーの海岸の小さい町で貴族の家庭教師をしてゐた、廿五歳の白面の青年キュヴィエが、檜舞臺のシャルダンに乗出して來たのである。彼は瑞西境の町に退役軍人の子として生れ、幼にして英資が認められ、給

費によつてシュツットガルトのカルルスシュレーで教育を受け、前記の家庭教師として獨學してゐたのであつた。それからのキュヴィエの生涯はまことに華々しいものであつた。化石脊椎動物學、比較解剖學は彼によつて土臺が置かれ、斯學の創建者ともいはれる。彼の鋭い叡智の結果である。革命に續くナポレオン一世の盛世の時運に乗つて、偉大な精力を一杯に働らかして活動した。學問以外に教育、政治の方面にも重きをなし、内相の椅子に推されたこともあり、男爵を授けられた。かくして佛蘭西學界の大推進力として華々しい彼に突然の死が來た。一八三二年三月、コレラが巴里を襲つて、ミカレームの祭に踊り戯れる市民がばたばた斃れるといふ烈しい流行となつた。そして五月にはキュヴィエもこれに命をとられた。

學者としては英雄劇といつてもよいやうなキュヴィエの生涯に對して、ラマルクの生涯は悲劇的なものであつた。進化説はキュヴィエの地殻大變動説に壓せられて、省みられず、やがて眼を病んで退き、盲目となつて陋屋に八十五歳の生涯を終つた。共同墓地に葬られて墓も無い。後年その埋葬の場所は探查の結果明らかにされたが、骨は既に無い。

革命からナポレオンに續いた、佛蘭西の歴史的な舞臺に於ける、ラマルクとキュヴィエ

一の生涯は學者として劇的なところがある。また私はそこに佛蘭西的なものがあると感ずるのである。佛蘭西魂といふ言葉がある。また佛蘭西ではジェニーといふことを尊重するやうである。私には双方ともよくはわからないが、ラマルクとキュヴィエーの生涯とその事業を味はつて、佛蘭西魂、佛蘭西的ジェニーなるものを感ずるやうに思ふ。

未曾有の大國難に際會して、現下の佛蘭西の學者の佛蘭西魂、佛蘭西的ジェニーが、如何に動いてゐるであらうか。私はこれを知りたい。顧みて日本精神が、大國難下の日本に、如何に學界に動いてゐるかを深く省みることが我々の心掛けであることを痛感する。科學振興の聲が高い。その聲は賑かである。科學、科學的といへば人氣がある。併しそれが浮氣立つたものであつてはならない。根柢からのものでなくてはならない。科學の日本的把握といふことがいはれる。私はその前に日本の科學的な把握といふ仕事があるやうに思ふ。

私は先日佛蘭西醫學展覽會の講演を求められて、ラマルクとキュヴィエーをとり上げて、國難と博物學者の結びつきを憶ふ話をした。佛蘭西を憶ひ、また日本を憶ふが爲であつた。

ラマルク、キュヴィエー兩方ともその生涯には劇的なものがある。そこには詩があるといつ

てもよいかと思ふ。佛蘭西の今次の國難の始末は、いままでのところ我々にとつてあまりに期待に遠いものであつて、呆氣ない経過と始末である。先日或る集會で、この話が出た折に、佛文學の大家T氏は、勝敗は別として、敗けるにしても、そこに詩的な何物かあつてほしいものだが、今回はそれが無いといふ意味をいはれた。なるほど我々はその種のもの話を聞いてゐない。佛蘭西魂といふものの發露を見せて貰ひたいものである。特に學者の佛蘭西魂、佛蘭西的ジェニーの輝かしさが是非とも見せて貰ひたいものである。

このやうな考へをしてゐて、先頃アンドレ・モーロアの「佛蘭西敗れたり」といふ譯書を読んで、感慨の深いものがあつた。私はこの書内の數多くの話題のうち二つに就て書いてみたいのである。一つは獨軍が巴里に迫つて、モーロアが軍用飛行機で英吉利に飛ぶ前日の記事である。そこには、老外科醫マルテルの死の話が美事なペンで傳へられてゐる。マルテルのモーロア夫人への最後の電話は「わしのたつた一人の息子は、前の大戦で戦死した。いまのいままで息子は死んでフランスを救つたのだと信じて來た。ところがフランスはいま滅亡ぢや、わしが生きて行く目的はなくなつた」といふのである。老外科醫はその夜ストリキニーネを注射して自らの命を斷つたといふ。私はこの老外科醫の行動や思考の是非を考へたくない。詩とし

て考へる以外に出たくない氣持である。

も一つ。モローアは軍の使命を帯びてロンドンに飛び、夫人は南に避難するといふ前日、即ち巴里開城の四日前の六月十日に、二人は「パリの街のうちで一番好きなどころを、多分これが最後になるかも知れないから、訪ねてみることにした。私たちはアンヴァリッド、セーヌ河岸、プラス・ドゥファイヌ、それからノートル・ダムなどに別れを告げた。この時ほど美しいパリはかつてなかつた……」とある。佛蘭西の敗軍のうらには、佛蘭西らしい、佛蘭人らしい生きてゐる詩がある。アンヴァリッドにはナポレオンの墓がある。プラス・ドゥファイヌはセーヌの中島、巴里の發祥の地といふその島の廣場である。モローア夫婦の歩きに行つたところが巴里の銀座でないのが私にはうれしい。

東亞

爪哇日記

□七月二十日

船は昨夜タワオを出た。海は静かで涼しい。夜に入つてマンガリハット岬を望んでマカッサ
ー海峽に入る。雲が多いが満ちて行く月が眺められる。南十字星が今晚はすつと高くなつてゐ
る。

□七月二十一日

午前二時十六分に赤道を通過した由。正午前後にクタイ河口の大三角洲を左舷に望んで過ぎ
る。椰子の林が密に茂つて珊瑚礁の如くである。海は河水の泥で濁つて砂原のやうに見ゆる。
晴れ、船少しく揺れ、涼しい。水温、気温共に二七度。

□七月二十二日

朝ラウト島沖を通過。低い大きい島で、一三〇〇米の特立山が一座ある。白い帆船が二つ見ゆる。正午頃ジャワ海に入る。夜満天に雲片が散り、満月が美しい。まことに心地よい涼味である。

□七月二十三日

朝から白帆が澤山に見え始める。正午頃マヅラの島影が遙かに淡く見えて来る。やがてパイロット來り、水道に入つて、三時スラバヤの埠頭に着く。移民官の調べ。上陸。ドライブ。支那料理の夕食をよばれて歸船。船では盛んに荷役をしてゐる。土人の荷役は變つたところがあつて興味がある。荷役始めといふ時に、多勢が集まつて、一同芭蕉葉に包んだ白飯をうまさうに喰つて仕事にかゝるのなども、愉快な見物だつた。十時に荷役中止。

寝苦しくて眼がさめて、甲板に上る。一時だつた。埠頭に月光と燈火がそゞいでゐて、そこに荷役苦力がある。手車の上に眠つてゐるのがある。四五人集まつて尻もちをついてゐるのがある。月光を正面にあびて、直立してゐるのがある。木像のやうに動かないと思つてゐると、徐々に動き出してごろりと横になる。人間がゐて、それでそれ等が動かない景色といふものは一種の深酷な感じがある。

□七月二十四日

朝空に飛行機が翔んで來て、本船の上を廻はる。昨日船長が、日本船が入港すると、きつと飛行機が來るのだが、今日は來ない、といつてゐた。それが來たのだらう。この港に海軍飛行隊がある。土地の人の話に、まだ一度も宙返りをするのを見たことがないといふ。出来るだけ戦争をしない爲の軍備の一部であらう。

二時四〇分出帆。爪哇島の北岸に沿つて行く。六時四〇分眞赤な月が水から昇る。十七日齡である。夜の涼氣が格別心地よい。

□七月二十五日

朝六時、メーレンの山を近くに望む。標高一六〇〇米、長いスロープが美しく、形が次々に變る。頂が五つばかりあるらしい。八時すぎサマラン(三寶壟)に錨を降ろす。遙かに沖が、で、ロツテルダムロイドその他の可なりの大船が四艘泊して居る。今日は日曜で、出迎の人などあり、ランチが賑かである。

市外の丘の住宅區がこの土地の自慢になつてゐる。丘は兀げ膚だが、小綺麗な住宅が適當な距離にあり、植込があり、谷には公營の土人住宅の、これもさつぱりしたのがあつて、排水工

事がよく出来てゐる。見晴らしのよい位置にあるホテル・ベルヴェーといふので名物のライス・ターフェルを喫する。結構な食事だが、その品種の多いには呆れる。和蘭人はたらふく喰つて三時頃まで寝るのである。そして夕刻にはヴェランダの庭だのに出て、氣のぬけたやうな顔つきでぼつねんとしてゐる。こんな生活には嵌まつた食事だと思ふ。ホテルはヴィラ風の氣持のよい建物だ。支那の砂糖成金の破産したあとだといふ。

郊外に出て、川沿ひに三保大人の墓を訪ねる。大人は支那移民の主導者だつた。渡航して來た船が沖合で難波したが、白馬が大人を乗せて川口まで泳いで來て、そこで斃れた。大人はその上陸地を中心に移民開發の仕事を成就した。これが三寶壟の起原だといふ。そしてこの町はチェリボンと共に支那人の最も多い町である。お墓は洞窟になつてゐて、支那のお墓に見られぬ綺麗さである。

夜八時出帆。街には燈火がまばらで、丘の住宅の小さい燈火がちらちらしてゐる。

□七月二十六日

朝空に標高三〇七八米のチエレメの火山——邦人はチェリボン富士といふ——を眺めて、八時チェリボンに投錨。こゝも遙かに沖がゞりである。商店街は大體支那人の店ばかり、サマラ

ンは官衙街らしくて上品であつたのに對して、こゝは頗る汚雑である。併し樹木が多くて好い町だ。こゝでも破産支那人の砂糖成金の宅が市内でホテルになつてゐる。

郊外の水城を見物する。水城はサルタンの別墅である。豊富に水を導く工事をして、園池と殿屋を設け、危難の際には水浸しにして、籠城する仕掛けだといふ。こゝのものはデョクヂャのものなどとは比べものにならぬ小規模なもので、荒れはてゝゐる。支那庭園式の構築で、中央の人造の岩山の迂路をくゞりぬけると、四角な水池に出る。水浴（マンデー）は馬來の生活に萬人になくてならぬもの。王者は美女のマンデーを樂んだといふ。その他のことも出来るやうに造つてある。治に在つて淫樂の席となし、兼ねて亂の爲にも備へたものであらうか。

港で海老が釣れて、名物になつてゐる。本船でも、夜に入つて電燈を舷側に吊し、船員が絲を垂れてゐる。電燈で照された清透な海水がことの外美しい。

九時出帆。十九日の月が上がりかけてゐる。プームベヂョス島の燈臺の光が陸と反對の沖に光つてゐる。雲全くなく、空一面の星、航海最後の夜。風が追手で暑い。

□七月二十七日

午前六時パタピア港内に假泊、やがて埠頭に着き上陸。支那軍艦が一艘ゐた。本船から旗禮

をしたたら、間違つてやつと返禮した、と機關長が笑つてゐた。

總領事館訪問、博物館と書店を見て廻はる。博物館は Koninklijk Bataviaasch Genootschap van Kunsten en Wetenschappen のもので、建物も内容も立派である。Wetenschappen といつても史前學と人種學だけだが、その人種學の列品が頗る立派である。

この博物館の玄關前の正面芝生で、懐かしいものに巡り會つた。小さい象の記念碑である。思ひ出は二十數年前、初めて國外の旅に出てシンガポールに上陸した時に溯る。タウンホール前の廣場の一角に小さい象の記念碑があつた。その象が私にとつてたゞの象ではなかつたのである。私はごく子供の時に父親から二寸五分ばかりの象の置物を買つて、玩具にしたり文鎮にしたりしてゐた。それはまことに可愛らしい恰好をしてゐて、外の象とは違つてゐた。象の造りものは澤山あるが、本當に象らしいものは至つて少ない。これは後日聞かされたことだが、象の木國で本當に象をのみ込んだ者の造つたものは違ふといふことだ。シンガポールの記念碑の象が、子供の時の友達で、いつの間になくしてしまつた、その小さい象とまるで同じだつたのである。それでそれのおとうさんかおかあさんに巡り會つた氣持になつて、なんともいへぬ懐しさを感じたのだつた。その後二度シンガポールに寄港したが、この象を訪ねることは毎

回忘れなかつた。ところでその象と全く同じのが、このバタビアの博物館前にあるのである。思ひがけなく違つた國で、またも巡り會つたのが懐しいことであつた。この象は一八七一年にシャムの皇帝 *Somdetseh Phra Paramindr Maha Chulalongkorn* がこの地方を巡遊されて、その記念にシンガポールとバタビアの兩市に寄贈されたものである。全く同じなのもその筈であつて、私の愛物であつた小さいのもシャムから渡つたものであつたかと思ふ。

□七月二十八日

ホテルは運河に面してゐて、向側が兵營になつてゐる。朝、兵隊がラッパと太鼓をあはせて陽氣にいくさりやる。兵營の構内には兵隊の嫌や子供も住んでゐるのである。夕方それ等が出入する營門の光景などは奇觀である。

パイテンゾグの植物園行き。氣持のよい電氣鐵道、沿線のゴム園、パイテンゾグの町のステーションから植物園に至る一帶の巨樹の繁生した風物、何れもよろしい。植物園はロンドンのキウのものと共に違つた内容で世界一のものだ。今日は見落しのないやうにと、案内の地圖に指示して道筋を忠實に廻はる。正直の話をすれば、廻つて行きながら、私は植物學者でなくてよかつたと思つた。こゝに來たからには、植物學者だつたら注意し理解して去らねばな

らぬものがありすぎて面喰ふだらうからである。この點は幸で、私は珍しい植生と美しく掃除された立派な構築を、呑気に眺めながら半日歩いた。「おほおにはす」の池は想像してゐたほどではなかつた。キウガーデンのものの方がもつと大きいやうに感じたが、あすこでは特別に造つた建物のなかにあつたからかも知れぬ。この巨大な葉の蓮のヴィクトリア・レギアといふ名は、いみじくもつけたものだわいなどと思つたりした。そしてシンガポールの建立者、爪哇の統治者、この植物園の建設者のラッフルスの人物などをしみじみ想つた。そして園内にあるラッフルス夫人の墓碑が粗末にされてゐるのを悲しく眺めたりした。

爪哇スケッチ

馬來群島は生物學者に最も興味をもたせる地域の一つであつて、吾々東洋の同學にとつて特にさうである。熱帯圏にあつて、大小の島々には植生が無類の旺盛を恣にして居り、そこに珍しい動物が簇棲してゐる。オーランウタンの島、極樂島の島である。Butenzorgの植物園はKew Gardenと並んで、それぞれの意味に於て、世界一と稱すべきである。博物學的の旅行記と云ふ、A. R. Wallaceの“Malay Archipelago”を知らぬ人は少なからう。E. Haeckelの“Aus Insulide”など、この類の書は少なくない。生物學の史實からみれば、Wallaceが生存競争の説を創想した地、Eugen Duboisが*Pithecanthropus erectus*の頭蓋、腿骨を發見した地であることは普ねく知られて居り、知られ過ぎて、Wallaceは生物の變異の問題の研究に馬來群島を巡歴したとか、Haeckelは原人の化石を求めてJavaに行つたとかいふ風な、誤まつ

たことまで書かれたりしてゐる程である。もつと學的には、爪哇とスマトラの間のスンダ海峡の孤島 Krakatau の大噴火の後に、動植物の全く見られなくなつたその岩島に、再びそれ等が現はれて来る過程の研究、⁽¹⁾ また専門にとつては Max Weber の指揮のもとに行なはれて、六五卷の報告書が出てゐる "Siloga" の海洋探検等がある。

幾多の學的興味がこの群島に累積してゐるのであるが、その最も大きいものは生物分布、生物地理學上の興味であらう。その興味のある地域は、政治的には蘭領東印度である。ニューギニアの西半がこれに屬してゐて、その動物相は濠洲系であつて、西方の亞細亞系に對立してゐるのである。また群島の島々の動物相の相互の聯關、更にそれと亞細亞大陸の諸地域との聯關に興味のある點が多い。極めて平俗な例を擧げて、オーランウタンはボルネオとスマトラとに棲んで、爪哇には居ない。虎はスマトラと爪哇に棲んでボルネオに居らぬといふ具合になつてゐる。Bali と Lombok の間の狭い水路を劃して、小スンダ列島を中斷し、Macassar Strait を通じて、Mindanao の南に延ばして描いた、所謂 Wallace-line と呼ばれるものは、もの木によく書かれ、教室でも普通に教へられることである。而してこれも亦あまりに知られ過ぎて、その後の研究が知られて居らぬ感が深い。Wallace-line の北半は、後にフィリッピンの東

を走るものと訂正された。また Weber は淡水魚類の研究によつて、右の區劃線は、遙かに西方、ニューギニアに接近して劃さるべきもので、Timor 島の東から、Kai 島と Aru 島の間を通り、ニューギニアの南を西北に向ひ、Seran 島の北からセレベス島の東を北走とするものとした。これが Weber-line と呼ばれる。馬來群島の生物學で、最も學者に興味をもたせ、永い年月に互つて多數の學者の報告が出されたのは、何といつてもこの生物地理學の問題であるやうである。⁽²⁾

私は今年夏 Bandung で開催された國際聯盟主催の Intergovernmental Conference of Far-Eastern Countries on Rural Hygiene に政府代表の一員として參會した。そして久戀の馬來群島に足跡を印するを得たのであるが、滞在期は僅か三十數日、しかも十數日の會議があり、終了後は事變の爲に豫定の旅行を中止して歸朝したので、生物學の方面では見聞も勉強も殆んど爲し得なかつた。併し二、三の見聞と、短時日間に得た極めて僅少の資料のうちから若干を纏めて、諸君の一粲に供することにす。

馬來群島中でも爪哇だけは開拓が進んでゐて、人口の稠密なることは夙に有名である。一平

方軒當り三二四・五であつて、我國内地平均の約一・七倍、長崎縣と約同様である。近接してゐる Bali, Lombok の諸島でも、一一〇—一七五になつてゐるが、その他の諸島の總計では僅かに一一である。爪哇本島では自動車道路が頗るよく發達し、稻田や耕地が展げ、茶、砂糖、ゴムの農園が目も遙かに開展され、多數の火山があり、活動中のものも數座あり、人跡の及ばないチャンゲルの類は少なくなつて、久しい前から Natural monuments の保存が唱えられ、一九一六年に法令が發布されて實行されてゐる状態であつて、旅行者にはわが臺灣と同じ程度の生産國の印象を與へる。従つて野棲の諸動物などは旅行者にも民衆にも至つて縁遠いものになつてゐる。併し流石に熱帶國で、特に動物相の豊かな土地柄のこととて、少しく注意すれば、私のやうな素通り者にもさまざまの珍しいものが目にとまるのが愉快であつた。ホテルの庭の植木に美しい緑色の *Tournaea* が登つてゐたりするのは、如何にも馬來らしかつた。

爪哇に動物園が四箇所にあるのは、盛んといふべきである。なほ動物博物館と水族館が一箇所づゝある。これ等で旅行者は相當に珍しい動物や、固有の動物を見ることが出来る。後節で少しく述べよう。

私は市場で思ひがけぬ見物をして嬉しかつた。小さい村から大都會に至るまで、市場（パッ

サル）のない所はなく、大きい町では、それが頗る廣く、あらゆる部類の物があつて、デパートメントストアの如くである。町の市場には普通鳥類商の一區がある。Soerabaya などでは鳥類商だけのパッサルがあつた。私は鳥類については無知識で、そのくせ勉強もしないので、どこでも素通りしたのであるが、Soerabaya で鳩の變りものを賣つてゐたのは意外で嬉しかつた。Pan tail, Porter など鳩は Darwin の書や Darwinism の解説で馴染のものです、繪や寫眞では見てゐるものであるが、私は英吉利に少時居たが、博物館で標本を見ただけだつた。ところがそれ等が支那人區域の汚ない鳥市場に賣つてゐるのである。勿論英國の紳士が愛玩するやうな高級品ではないが、粗野なところに面白味もあると思つた。市場の鳥類商はその外にも種々の動物をもつてゐる。或る市場で百姓が穿山甲 (Pangolin) を賣りに來てゐた。不思議に思はれたのは山猫 (*Felis bengalensis* であらう) の仔をあちこちの市場で賣つてゐた。猿は至るところの市場で賣つてゐた。珍しい種類には出會はなかつたが、出ることがあるに相違ない。普通の猿は、言ひ値が一頭一盾位にいふから、五〇仙位にはまけるかと思ふ。動物試験をする人達は美しいことであらう。

港町には、土人や支那人の動物屋があつたり、店は出さずに、裏町や町はづれなどで、動物

を集めてゐて、好事家や蒐集者等を相手に賣り、細工物の材料を集めたりしてゐるのがゐる。それ等を廻れば珍しいものが見られ、また手に入れることが出来る。この類の者で澤山の商品をもつてゐるのがシンガポールに居る由である。蘭領印度で、この種の物の集散の本場はマカッサ港である。不幸にして私の船は往復とも寄港しなかつたが、*Samarang* で船員が「めがねやる」(*Loris: Mytilivus turkippadus*)と「かはをぞ」の仔を二匹買つて來た。珍しいロリスを見て愉快であつた。船員には、港々のこの種の商賣人と連絡して、動物の賣買仲介をしてゐるのが少なくない。

爪哇人には動物を愛好する性向があるといふことを、書物でも讀んでゐたが、種々の見聞が私にそれを信じさせた。四箇所の動物園には、土人達が澤山に見物に來てゐた。*Bandung* の動物園の入場者延員數を見ると、歐羅巴人及び爪哇以外の亞細亞人が大人三六〇六、子供三五九五、土人が大人五四四六、子供が一九六八となつてゐる。土人の大人が最大數を示してゐること、歐羅巴人その他に於て大人と子供の數が大差なく、土人では子供が大人の約三分一の少數に過ぎぬ點が注目される。該市の人口は約十六萬、そのうち歐羅巴人は約一萬八千であるから、割合上それ等の來園數の多いことは勿論であるが、爪哇人の社會的位置を考へると、右の

數字は注目すべき大きい數字である。また大人が子供の三倍に近いといふことは、散歩、遠足等の意味のものが少なく、動物に興味をもつて、單獨で來園する大人の多いことを示すものと思ふ。後に述べるが、土人は入場料が半額またはそれ以下の低額にしてゐるのは、要求に應じてゐるのであると思はれる。動物園ばかりでなく、*Buitenzorg* の動物博物館でも同じ感をもつた。そこでも澤山の土人の男女が面白さうに見て廻つてゐた。町でも村でも飼鳥の多いことが著しく目につく、軒ばたや庭にラヂオのアンテナのやうな高い竹竿を立てて、鳥籠を吊し上げてゐる。一軒で數本立ててゐるものもあつて、特殊な情景を呈してゐて面白い。鳥類のみでなく、土人は種々の動物を飼ふことを好むらしい。市場で賣つてゐる山猫の仔は、小さい間は家猫と違つた面白味もあらうが、成長したら始末が悪いだらうと思はれる。これは甚だ育ちにくいものだといふから、その心配をする必要なしに終るものらしい。

動物園が四箇所にあることを前にしつたが、*Batavia*, *Soerabaya*, *Bandeng*, *Soerakarta* (俗稱 *Solo*) にあつた。*Batavia* と *Bandeng* の二園は協會組織のもの、*Soerabaya* の園は市營、*Soerakarta* の園はサルタンの所有である。爪哇には、この地と *Djokjakarta* の二つの舊主領

があつて、*Susuhunan* 即ち俗にいふサルタンが領してゐる形式になつてゐる。サルタンは何れも多数の貴族、士分を擁して豪莊な一廓をなす宮殿 (*Kraton*) を構へてゐるのである。私は四園のうち三つだけを見て *Soerakarta* のは見るを得なかつた。これは四園中で最も小さいものである。

Soerabaya は濠洲、日本、支那方面からの第一の船着きで、爪哇第一の要港、空軍の根據地であり、我國でいへば大阪に當る。まことに美しい都會である。動物園は、南北に短冊形にひよる長く發達したこの市の南端部にある。島内で最も充實したもので、歐洲の第二流の園に比適すると思つて敬服した。廣くて平坦な地内に、まだ若い樹木が並木をなし或は林になつてゐて、そこにゆつたりと大きい丈の高い飼柵が設けられ、本國 *Amsterdam* の動物園に似たところがあり、草原や叢藪がまだ残されてゐて、野趣満々たる感がある。動物の種類も相當に豊富で、就中鳥類が目立つてゐる。小島中島を飼つてゐる自動電話の家位の丈の高い鐵籠が並んで居り、極樂鳥もゐる。大鳥が廣々した圍ひのなかで遊んでゐる。黄色の巨大な嘴を重さうにして、*Hornbill* が數羽群遊してゐる様などはまことに珍らしい。象、虎、熊、斑馬などの常連の外に、珍らしい「ばく」がゐた。チムバンデーが一匹、オーランウタンが雄が二匹、雌と仔

が各一匹ゐた。親子のやうである。雌は美事なもので、身長二米に達するかと思はれ、長い毛がふさふさして、物凄ゐ感と與へる。仔はよく馴れて、番人に點火して貰つて煙草を喫つたりする。その他の猿類もなかなか豊富でバブーン、マンドリル、ギボンやその他の地方種が可なり居つた。私をよろこばせたのは *Babirusa* であつた。一頭の雌と數頭の仔がゐた。見物人を見て暴れるのを防ぐ爲であらう、柵の周圍を高く幕で圍んで、僅かに隣りの柵の境から見えるやうにしてゐるが、親が砂を蹴立て、突進して來る様子がまことに猛々しくて愉快である。悪いとは知りつゝ、けしかけて面白がつた。評判の大蜥蜴 *Varanus* も三匹ゐた。立派ではないが相當の大きい建物が一棟あつて、半分が標本陳列室、半分がアクアリウムとテラリウムになつてゐる。共に十房で、一方は魚類、他方は爬蟲類で、珍らしいものは無かつたが、見物人には面白からう。この園はもと動物好きの個人の蒐集で、市の補助金を受けて公開して居つたのが、その死亡後市營になつたものである。入場料は歐羅巴人四五仙、同小兒一五仙、土人一五仙、同小兒五仙である。

動物園の隣りの一劃に土俗品のムゼウムがある。小さい建物が四棟あつて、一棟には樂器と人形芝居の類、一棟には船の模型、他の二棟には土俗品が集めてある。貴重なものはなく、説

明もなく、ムゼウムの體裁をなしてゐないが、同じものを澤山に集めてあるのが壯觀で、例へばクリス（短劍）が幅四米、高さ二・五米位の壁面にびつしりと列べてあり、また木の面が二側の壁面一杯にかけてあつて、その数が二八一箇あつた。參觀人は殆んどないらしい。入場料一八仙。

Bandoeng は脊梁山地中の七二〇米の高地にあつて、土木交通省、陸軍省、工業大學などの所在地で、近代的な美しい都會である。こゝに動物園のあることは、行つて始めて知つた。郊外の可なり隔つた位置にある。協會組織で、家族券が一箇月一盾、二二歳以上の家族は五〇仙づつ、單身五〇仙、一八歳以下は二五仙となつてゐる。會員以外の入場料は歐羅巴人及び國外亞細亞人は大人二五仙、小兒一五仙、土人は大人一〇仙、小兒五仙、學校生徒は三〇人に教師二人を加へて一盾としてゐる。園内には樹木が少なく、飼場も特に立派なものはないが相當なもので、管理は行届いてゐるやうに感じられた。動物の種類は平凡で、數も少ないが、他園と同様に猿類では、チムパンデー、オーランウタン、澤山のギボンなどがゐた。園内に子供遊場と、喫茶亭の大きい木造の建物がある。その一側に小さい水槽を澤山に列べて、熱帯魚が飼つてあつた。そしてそれ等の種類が大部分南米地方のものであるのは意外であつた。熱帯魚飼養

が流行してゐるので、外國のものが移入されてゐる爲であらう。

Batavia の園は、市内の住宅區劃内にあつて、老樹が亭立してゐる公園風の一廓になつてゐる。中央に大きい會堂とその裏の競技場とがあり、その三分の二ほどを圍んで動物園が設けられてゐる。Vereeniging "Planten en Dierentuin" といふ俱樂部風の會員組織で、會費は一箇月單身一盾、一家族一盾半で、會堂での種々の催物にも會員は無料となつてゐる。會員外の入場料の規定がないので、事務所へ行つたら紹介狀を書いて呉れた。飼場の設備は平凡で、歐羅巴の園の第三流どころ、動物の種類も多くはないが、一通りはあり、近頃評判の大蜥蜴 *Vatras* が十數匹飼つてあつて、運動してゐるのが愉快であつた。Batavia は印度、馬來からの船着きで、政治上の首都であり、在印の蘭人は日々の生活を享樂することに専らなのであるから、これ位のは會員組織で出来るであらうし、仕事振りも土地柄らしく思はれる。

Batavia には水族館がある。最も舊く開けた舊港の漁船着場のパッサル・イカンといふ區域の岸にある。パッサル・イカンは魚市場で、それがその區劃の名にもなつてゐるのであつて、混雜した市場から生魚、鹽魚の獨特な臭氣がぶんぶんと鼻をつく、水族館と海洋動物研究所が一構内にある。植物園 (Buitenzorg) の管轄である。何れも小さい建物で、水族館は一室、兩

側に八米位の水槽を設け、左側を三分、右側を四分し、なほ両端に二つづゝの小水槽が備付けてある。「ふぐ」巨大な「いそきんちやく」「うみがめ」「こばんいだき」などがゐた。「こばんいだき」(*Echeneis nauculus*: Zuigvisch)が面白かつた。爪哇の動物園では、動物の名札が不足して居り、あつても不信用に感じたが、こゝだけは整つて居た。そして繪はがき判の魚の着色圖を發行してゐる。入場料三〇仙、構内に鰐魚や猿などを飼つて見せてゐる。

Buitenzorg の植物園 ('s Lands Plantentuin) は有名で、三好學先生が早くから、その著書で美しい寫眞を添へて紹介されたので、吾々には親しいものになつてゐる。この町は Batavia から五〇軒、電氣鐵道があり、見物に便利である。人口六萬餘、海拔二五〇米で、高地ではないが、雨が多くて氣候が最も快適とされてゐる。蘭領印度總督も半歳はこゝの官邸に住むといふ具合で、住心地の最もよい土地とされてゐる。Buitenzorg といふのは無憂 (*sans souci*) の意味である。植物園は一八一七年に G. E. Reinwardt の建設したもので、一八八〇年に M. Treub が園長となるに及んで、單なる植物園ではなく、腊葉館、實驗室、試験場、博物館等が開設され、動物學にも及んで、現在の偉觀を來したものである。總地積二〇五エーカーを占

め、豪勢な總督官邸も一劃をなしてゐる。高地の Tjibodas と南スマトラとに分園を有する。現園長は P. M. W. Dukus。研究機關等としては、全般實驗室の外に Treub-Laboratorium (所長缺員)、Herbarium en Museum voor systematische botanie (館長 D. F. van Slooten), Zoologisch Museum en Laboratorium (館長 K. W. Dannerman) があり、前記の Batavia 海洋動物研究室及び水族館もこの所屬である。この町にはまた産業關係の諸官廳と研究所が集まつてゐて、農工商省の農務局、産業局を始め、官私多數の研究所、試験場、學校などがある。應用生物學の諸機關が集中されてゐることに於て、他にその比を見ない土地である。

動物博物館及び研究室は、一九〇一年に出來たもので、博物館には國內産の動物標本を陳列してゐる。現所長は前記の Dannerman で一九二二年迄は P. A. Ouwens であつた。建物はヨ字型の簡素な舊式なもの。脊椎動物が主で、哺乳類が場所の約三分の二を占めてゐる。標本の仕立は至つて拙であり、陳列の體裁も良くないが、國産の種類がよく集めてある。猿類の種類が目立つて多數あり、巨大な犀の二種類の標本が威風を放つて居た。*Galeoptihacus* など三、四の珍しいものも見ることが出來た。

研究室では専ら領内の faunistic の研究をして居り、Sumba 島、南スマトラ、南ボルネオ、

Kei 諸島等に採集隊を出したことがある。また Dammerman は Krakatau 島の動物相の研究をしてゐる。植物園としては、定期の報告、モノグラフ等を發刊してゐるが、動物學の部門では "Trentia, Recueil des Travaux zoologiques, hydrobiologiques et océanographiques" を出してゐる。一九一九年創刊、毎年一卷續刊されてゐる。なほ植物園の Dammerman, Slooken 等が中心になつて Nederlandsch-Indische Natuurhistorische Vereeniging といふ會が出来て居り、諸地に分會があり "De Tropische Natuur" といふ月刊雜誌を刊行してゐる。四六倍判アート紙、一八頁のもので、毎號三篇位の相當學術的な文章を掲載し、資料報告、記事、新刊紹介などを添へてある、挿圖が豊富で大きく、美事な出来栄である。この會で "Bibliothek" として單行書を出してゐる。Delsman-Hardenberg: "Indische Zeevischen en Zeevisscherij" Delsman, H. C.: "Uit de Tropische Natuur", Kopstein, F.: "De Javanische Giftslangen", Coomans de Ruiter, L.: "Uit Borneo's Wonderwereld" などがある。

國々の特殊な動物、珍らしい動物が何であるかを知るには、先づ保護されてゐる動物の目録を見るのが手取早い。蘭領印度では、爪哇と Madura に關して、一九〇九年に野棲動物保護の

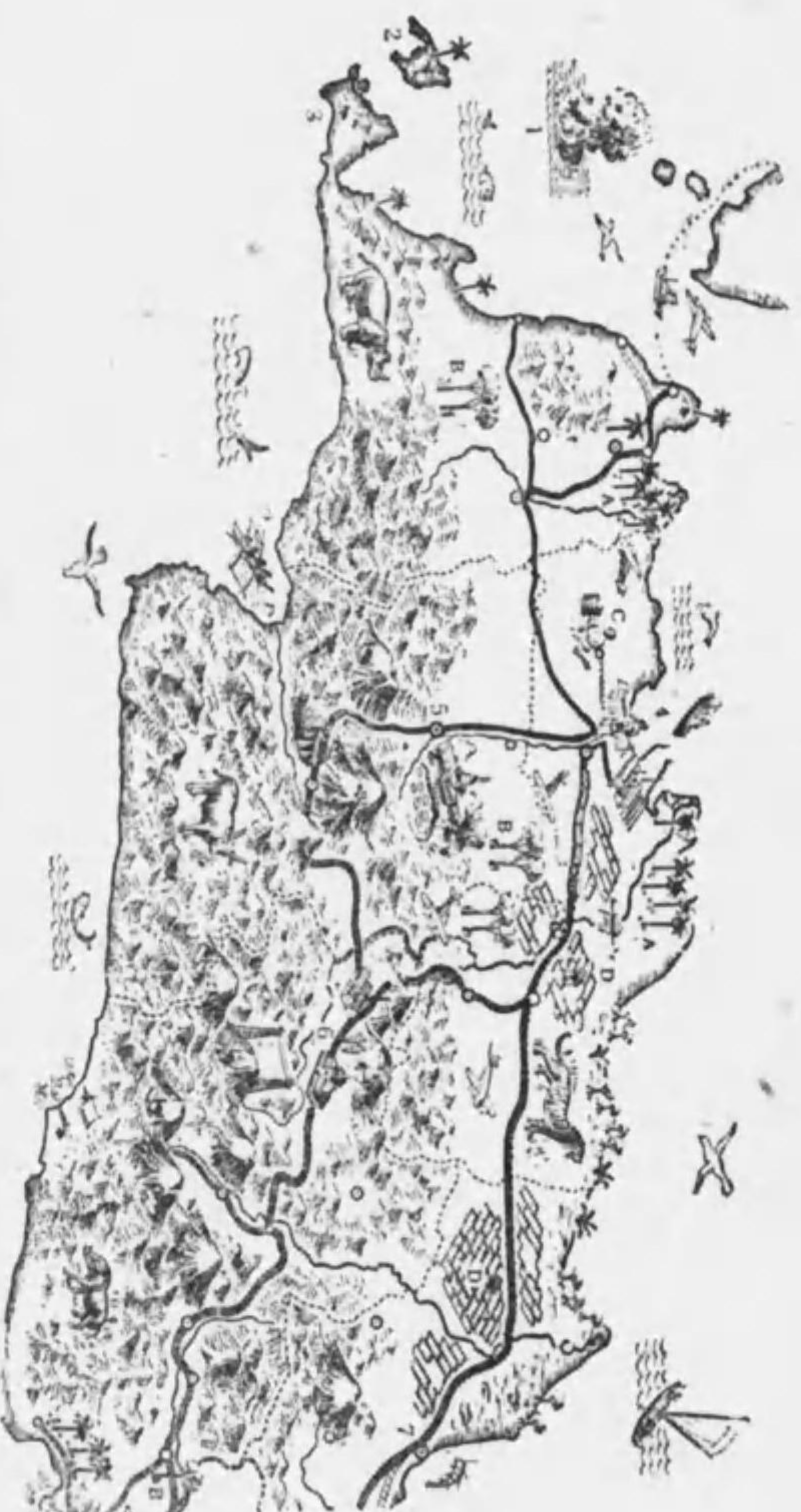
法令が出てゐる。その後一九二四年に改正され、更に一九二九年に改定されてゐる。この外に狩獵規則に、それ以外の動物に關する規定のあるのは勿論である。天然記念物保護に關して、Dammerman の "Preservation of Wild Life and Nature Reserve in the Netherlands Indies (1929)" といふ著作が出てゐる。

野棲動物保護規則で、狩獵、捕獲、殺害、賣買、所有の禁止されてゐるものは、哺乳類で、Spectral tarsiers, Orang utan, Proboscis monkeys, Gibbons, Rhinoceroses, Tapir, Goat antelope, Scaly ant-eater, 鳥類で Sea swallows, Marabous, Egrets, Blackwinged kite, Crowned pigeon, Nicobar pigeon, Kingfishers, Hornbills, Trogons, Pittas, Birds of paradise, Sunbirds, Honey Suckers, 爬蟲類で Giant monitor となつてゐる。なほほかに部分的の制定のあるものとして、Elephant, Banteng, Dwarf buffalos, Hog-deer がある。但しこれ等の法令は至つて弱力なもので、狩獵、捕獲賣買移出は相當盛んに行なはれてゐる様子である。

以下に自分の無知識な鳥類以外の若干の動物に就て、見聞その他を少しばかり書いてみる。「めがねざる」では、Tarsius は何所でも見るを得なかつたが、前記の機會で幸に Slow loris (*Nycticebus tardigradus*) を見ることが出来た。まことに可愛らしい動物である。Loris の類は

フィリッピン、シャム以西印度まで分布してゐる。鳴聲が風の音に似てゐて、支那やシャムの船乗りが、これを船に飼つてマスコットにしてゐると書物に書いてある。オーランウタン(*Simia satyruus*)は北スマトラとボルネオに産し、絶滅の恐れがあるといはれてゐるが、まだ相當に多いのではないと思ふ。禁止後も移出される数は少なくならしい。Dammerman はそれ等の目的を動物試験用であるといつて、實驗醫學者に當つてゐるが、この非難は當つて居まい。天狗猿(*Nasalis larvatus*)は生きてゐるのを見る機会がなかつたが、Buitenzorg で標本を見た。「てながてん」(Gibbon)は何處の動物園にも多數に飼はれてゐた。Buitenzorg には *Hylotus variegatus*, *H. lar*, *H. syndactylus*, *H. agilis*, *H. mulleri*, *H. leuciscus* の數種がそろつて陳列してあつた。その他の猿類では *Ptiliocus aygula*, *P. pyrrhus*, *Macacus imus*, *M. rhesus*, *M. nemestrinus*, *Cynopithecus maurus*, *Semnopithecus pruinus*, *S. melalophus*, *S. hosi*, *S. fulvifundus* などがあつた。Soerabaya の動物園で見た *Macacus nemestrinus* は體が大きくて、鈍重な舉動が心持ちよかつた。

犀 (*Rhinoceros*) は主要な馬來名物の一つである、一角の犀 (*Rhinoceros sondaicus*) は印度からシャム、スマトラ、爪哇一帯に分布して居り、二角の犀 (*R. sumatranus*) はスマトラ、



爪哇島西部交通産業圖 1. Krakatau, 2. Prinsen Island, 3. Oedjoen koelon, 4. Batavia, 5. Buitenzorg, 6. Bandoeng, 7. Cherbon; A. 椰子栽培, B. 蔗園, C. 製糖, D. 米田

馬來半島から印度支那まで棲んでゐるが、共に狩獵されて絶滅に至らんとしてゐる。この巨大な動物は鈍感で、且つ狩獵があまり危険でなくて豪快味があり、また角が高價に賣買されるので、多數に殺されるわけである。この地方の狩獵記の類を見ると、象、虎と共にこれが主要な題目になつてゐる。爪哇では十年前に數ダースに過ぎまいといはれ、スマトラでも年々著しい減少を示してゐる由である。犀角は漢藥中の普通なもので、解熱劑、解毒劑として賞用され、最も有效と信じられてゐるものの一つである。黒灰色のものが烏犀角と呼ばれて、特に優品とされてゐる。これで盃を造つて飲料を注げば、それが毒物であれば濁るので用心になるともいはれ、また床の飾物にして家内の毒を拂ふといふ風習もあり、角ばかりでなく、他の諸臓器も藥用材料に用ひられるといふことである。Dannerman は、藥效の無いことは勿論であるといつて、それが爲の狩獵を嘆じてゐるが、無効といふのは誤まつてゐる。商品としてはシンガポールに集まり、少額が直接に支那に行く。蘭領での移出の中心は東ボルネオの Tandjoengselor で、爪哇以外の蘭領からの移出は、公認のものが一九一九年から一九二七年までに三四四疋、その價格が一〇一、四二八盾と發表されてゐる。價は一疋二〇〇—四〇〇盾に當り、スマトラの二角犀の角一對の重さを一疋と概算して、年々四〇頭位が殺されてゐるといふ計算になる。

公然と税關を通らぬものがどれだけあるか知れたものでないから、可なりの頭数が殺されたものに相違ない。爪哇では後にいふ Oeljoeng koelon と Prinsen 島の自然保存区内で保護されてゐる。生きてゐるのは見ることが出来なかつたが、見事な標本が Britenzorg の博物館で異彩を放つてゐた。亞弗利加の犀と違つて、肩胛部及び腰部の肉質が著明で、如何にも猛々しく、醜怪味をもつてゐる。先年伯林とハーゲンベックの動物園で見た生きてゐる亞弗利加犀は全く違つた感じで、寧ろ可愛いものであつた。但しこれ等は若いものであつたからかも知れない。「ばく」(*Tapirus indicus*) は馬來半島、スマトラに棲んで、爪哇には居らぬ。スラバヤの動物園で大きいのを見た。おつとりした、まことに親しみのある動物である。も一つの保護獸の「かもしか」(*Gont antelope*) (*Nemorhaedus sumatrensis* 或は *Capricornis sumatrensis*) もスマトラを分布の限界にしてゐる。これ等の保護は珍らしい種類である爲のやうであるが、馬來では共に多數に棲息してゐるやうに書かれてゐる。

マラッカ、スマトラ、爪哇、ボルネオの地域に分布してゐる穿山甲 (*Pangolin*) は *Manis javanica* である。穿山甲の種類は亞弗利加に四種、亞細亞に三種ある由で、ヒマラヤから前印度、セイロンのもは *M. pentadactyla* で、モルムから海南、支那、臺灣のもは *M. aurita*

であると M. Weber の書にはある。保護の意味は鱗片採取の爲の捕殺にあるやうである。輸出額を見ると、一九一八年から一九二五年までの價格累計が四二、七八九盾としてある。數量は不明であるが、一ピクルの相場が一二五盾、一頭分の乾燥鱗片が七〇〇—八〇〇瓦として、毎年四〇〇〇—五〇〇〇頭の計算になる。これも漢藥中の普通なもので、Dammerman は犀角の代用品であらうといひ、食物は白蟻であつて、その驅除にも役立つものでもあるのに、支那人の foolish custom で多數に捕殺されるのは怪しからぬ、といつてゐるが、犀角とは用途が違ひ、主として發疹性の疾病、皮膚病、關節痛等に用ひられるものやうで、形態から來た迷信が關係してゐるやうである。また白蟻に對しては全體から見ても何程の働らきもするものではない。肉が美味で賞美され、藥用にも供され、酒で處理して、黴毒、腫瘍などに用ひられる。従つて高價に賣買される、マツラ島などには少なくなく、洪水の時に穴が崩れて、流れて來るのが捕へられると云ふ。

爬虫類では Giant Monitor (*Varanus komodoensis*) がある。Varanus は一屬一科の大蜥蜴の類で、亞弗利加と亞細亞で三〇餘種知られてゐる由であるが、この種類は六米に達するものもあるといはれて、この屬でも最大のもので、最大の蜥蜴である、分布は限られて居り、小スンダ列島のニューギニア寄りの Komodo, Rindja の諸小島に棲んでゐる。それで “Dragon of Komodo” と呼ばれてゐる。これが知られたのは舊くないことで、一九一三年に眞珠採りの漁夫が遭遇して驚いたのに始まるといふ。無人島である爲に知られずにあつたのである。この蜥蜴の皮はまだ商品價值がないので、その方面の心配はないが、天然記念物の意味で保護されてゐるのであつて、Dammerman は主として博物館の蒐集慾に對抗する處置であると書いてゐるが、穩當を缺いてゐる言葉である。今年 Buitenzorg の Dr. De Jong が隊長で、十數名の研究隊がこれの研究に現地に赴き、キネマ撮影者も加はり、ワシントン動物園の Dr. Mann も参加した。幸にしてその採集が到着してゐたので、バタビアの動物園で見ることが出來た。廣い地面の圍ひと、鰐魚などを飼ふやうな場所に分けてあつたが、一三頭だけ出てゐた。外にも穴のなかにゐるらしく、壯觀であつた。體長は概ね二米位であつた。頗る強猛なものだといふが、見たときはあまり元氣がなかつた。餌育は困難なものであらう。

天然記念物保存法は、一九一三年二月から行なはれてゐる。この問題を夙に考へたのは、植物園長 Treub で、一九一二年に、主として當時の森林局の Dr. S. H. Koorders の盡力で、

蘭領印度自然保護協會 (Nederlandsch-Indische Vereeniging tot Natuurbescherming) が成立し、翌年に法令の發布を見たのであつた。協會の手で保護してゐる地區は一箇所であるが、政府の保護區は六〇餘あり、大部分は爪哇にあつて、火山、自然林が主なものである。

爪哇に於ける自然保護區のうちで、野獸保護の意味をもつてゐるのは、島の西端のスンダ海峽の半島 Oedjoeng koelon と、それに接近した Prinsen 島とである。面積は前者が三七、五〇〇ヘクタール、後者が一七、五〇〇ヘクタール。全然原始林で被はれて居る無人地で、こゝで犀 (*Rhinoceros sondaicus*) と野棲牛 Banteng (*Bos sondaicus*) とが保護されてゐる。なほ虎と多数の鹿が棲息してゐる。西爪哇の動植物相の保存に適切な地區であるといふ。島の反対の東端の小半島 Djati 及び Poerwo が、これに對して東爪哇の植物相の保護地になつてゐる。

セレンベスの Menado 卽 Goenong Tongkoko Ratoengoes の保護區があつて、Babirusa と矮小水牛 Dwarf buffalos が保護されてゐる。後者は、Anoa と同じ屬が設けられてゐるものであるが、Bubalus の退化型と考へられ、Weber は島嶼型であるとして、*B. depressicornis* としてゐる。Babirusa はセレンベスと Burnu 島の特産で、地方的ニ亞種にされてゐる。(*Babirusa babirusa celebensis*, *B. b. babirusa*)。巨大で彎曲した牡の牙が、進化學の書物などで馴染の

もので、Goethe の骨學の論文などにも出てゐる。Soerabaya の動物園で牝と仔を見て、愉快であつたが、牡は不幸にして見るを得なかつた。

- (1) 政府の植物學者であつた C. A. Backer の "The problem of Krakatao as seen by a botanist" (1929) といふ自費出版書に、噴火前から一九二三年までの諸研究が敘述してある。
- (2) この問題を研究してゐる Amsterdam の動物博物館長 I. F. de Beaufort "Zoögeographie van den Indischen Archipel" といふ一般生物學者に適切な著作がある。

野 人 語

— 對支文化工作について —

私は、蘆溝橋事件の電報を航海中に見てジャワに行つた。バンドンで開催された國際聯盟主催の東洋農村衛生會議に出席する爲である。事變は會議中にちりちりと進行して、神戸に歸つた時は既に本格的なものになつてゐた。この會議で、聯盟は從來の身分關係上、私をマラリヤ病の委員會に配してゐたが、私の列席の目的は、農村改造、農村更生の都會であつた。それで決議の起草小委員會まで出て、マラリア病や寄生蟲の委員會には殆んど失禮してしまつたやうな次第だつた。その農村改造委員會は、廣い意味の、また實際的な性質の農村文化工作の討議を目標としたものである。而して總てのこの種の會議に通有であるやうに、各國の委員が、それぞれの國、それぞれの地域に於ける計畫や作業に就て吹聴した。或るものは官廳式な空虚なものであり、或るものは宣傳的なものである等、この種の會議に常に見られる光景があつた。

そこに併し、兩名の非凡な存在があつたことに大きい愉快を私は感じた。それ等は共に國家の役人ではなく、地方と團體の實務者であつた。その一人はポードといつた。馬來半島の半官半民の位置の當務者である。この英吉利人らしからざる英吉利人は、激越なる雄辯を以て、當局の對農村作業の亂雜不統一、徒らに表面的なることを非難して、根本的の變革を説いた。部長の、英吉利から「サー」の號を貰つてゐる土人出身の印度主席代表が、「政府のリコンストラクションでありますか」と發問したのに對して、力強く明快に「イエス・サー」といつた。その時、上席に坐つてゐた前馬來植民長官のハインズといふ老人が立上つて、穩かな言葉で、至極しんみりと、同意であることを附言した。このポード氏は、小委員會には加はらなかつたが（加へられなかつたといふ方が正しいだらう）列外に椅子をもつて來て聽いてゐた。徒らに亂暴な言葉を發して快とする人物でないことを、私はその終始熱心な態度で察したのであつた。他の一人はスペンサー・ハッチといつた。合衆國の農村に育ち、大學に農學を學んで學位をとり、印度に來て、半島の南端の地方で、十數年來農村更生の事業に献身して來た人である。M. C. A. の幹事をして居り、農村更生の熱情家であり、一面に科學者であり、事業の體驗者である。身邊を飾らず、顔貌、舉止、言語甚だ温順で、多く語らない。私は日々面接し、その著

書を卒讀して、眞の農村民衆の友といふ感じを深くもつた。このスペンサー・ハッチは、その演説の首に『吾々は仕事にヴィジョンをもたねばならぬ。私どもはヴィジョンを懐いてやつて來てゐる』といつた。私はこの言葉を尊敬した。綠色テーブルの上の更生案でなく、その日仕事に努力でなく、將來の見通しを頭にもつて、足もとを確かに進むといふことが、この人のいつてゐるところで、實際にまた着實に進みつゝあることがその語るところに聽かれ、『貧困から立上る』といふ小著に讀まれるのであつた。

以上ながながと三年前のことを語つたが、これは外でもない、昨年來三度支那に渡り、支那民衆を對象とする或る種の仕事を始めて居り、對支文化工作といふ問題を考へるに當つて、更めて思ひ出されるが故である。私はまた先頃から支那に於けるマラリア病の對策に就て公の責務をも課せられてゐる。この立場からも、敍上ることが深く頭にある。起稿を依頼されて、筆をとり始めて、先づ書き出すことが、右のやうなものであつた次第である。

對支文化工作に就ては、事變以來三年の今日、當事者、有識者、研究者、學者、理論家、實際家、空想家、文化人等々によつて、澤山の意見や案やが出されてゐるに相違ない。私はそれ等を勉強してゐない。それ等のうちには勉強したいが時間がなくて遺憾に思つてゐるものもある。

また失禮だが、勉強する氣になれないものもある。讀んで無駄だつたことを感じたものが少なくないからである。こんな私ではあるが、感じてゐることは數多い。公にいつてみたいことも少なくはない。與へられた機會に、その二つ三つを書かして貰ふわけである。

私が、身分職業とはかけ離れた、右の農村更生の部會に熱意を以て列した所以は、その前三年に互つて農村で仕事をした結果であつて、いままた對支文化工作を云々したりする所以は、先般來、支那民衆を對象とする或る種の學術的作業を始めた爲である。いはんとすることは凡庸なこと、陳腐なこと、平俗なことである。それは私がその工作の一勞務者であるからである。

私は生來の野人である。それが故に「野人語」と題して、野人としてのものをいはんとしてゐる。上品なる諸公の氣分を害すること少なくないでもあらう。しかし様式の整つた食卓に、糠味噌漬の皿も亦愛好者を見出すであらうし、消化にも害ではあるまい。

對支文化工作といふものは、いふまでもなく甚だ舊い問題であつて、歐米の諸國も日本も從來行なつて來てゐるものである。而してわが日本が歐米諸國に立ち遅れ、力の入れやうが劣つ

てゐたものが、今事變を轉換期として、この過去の状態を變更し、正しくいへば逆轉させるといふ使命が、わが國、わが國民に課せられたわけである。而かも彼我の過去の状態を轉換させるだけではなく、我によつて數歩、十數歩或は數十歩の躍進が爲されねばならぬ仕事なのである。私は丁度前大戦時の數年を臺灣で生活した。馬關會議による割讓後、日露の戦、兒玉總督と後藤長官の時代を経て、二十年後の數年間である。私は、至つて貧しい體驗ではあるが、その當時の感想を新たににして、對支文化工作といふ簡單な言葉の恐るべき巨大性を痛感してゐるわけである。百年の大計といふことが普くいはれてゐる。この百年といふのは、十の十倍、九十に十を加へた百といふ意味ではなく、永くかゝる仕事といふ意味であらうが、私には百年やそこらでかたのつく問題ではなく、なほまた百年の間には、またどんな事情になるかわかつたもので無いといふ氣持がするのである。それで北支で某將軍と會食後の心やすだての談のうちで、そのことをいつたところ、同意だといはれた。百年の大計といふ言葉は、「眞劍にやつても」といふ前置きがあるべきものと私は思ふ。百年の仕事だといつて、ゆつくりしてゐたのでは、千年かゝつたところで、見當のつく見込はあるまい。

近代戦には機械化部隊が缺けてならぬものである。近頃の歐洲戦争は、新聞で讀んでゐるだ

けでは、まるで機械戦のやうである。文化工作の戦術にも、機械化部隊的の作業と持久戰的の作業があつてよいわけと思ふ。わが日本の課せられた對支文化工作は、普通當り前のものではないのであつて、わが國にとつて未曾有の大事件、大仕事の一面なのである。世の常の舊い同名の課題とは、その重大性に於て全く趣を異にしてゐるのである。そこで機械化部隊的行動までもが要求されるものとも私には思へる。機械化部隊的といふのが過ぎてゐるとしても、少なくとも迫進的な工作が必要である。といつて私は、機械化部隊的の出づべきだ、迫進的に猪突すべきだとのみいふのではない。浸潤的な工作の必要であるのはいふまでもない。そのみでは足りないであらうといふことをいふのである。

遠慮なしに、野人の無禮な言葉を露骨に發しさせて貰へるならば、私は當今の對支文化工作といふものに、全體として氣魄、精魂が不足してゐるかに思はれてならない。一例を出せば、先年この工作に關して代表の方々が渡支された。遠慮なしにいつて、その一行のうちに私の判斷の限りに於て資格の疑はれるのがあるのに氣づいた。その北京會議の結果といふものを新聞などで見たところでは、新味と感ぜられる點もなく、その後の經過を注視してゐるに、我等野人には、この大工作の迫進力といふべきものを感得させて貰はれぬやうに感ずるのであるが、

實際は如何であらうか。

私は支那の地理學に關する出版物をいくつか勉強して、往々魂のぬけたやうな感のあるものに會してゐる。その方面の知人にこの感を洩らしたところ、答は、『それはその通りでせう。支那を見たことのない人も項目を割當てられて書くのですから』といふのであつた。代表團、委員會といふ類のものを構成する場合、社會的機關からそれぞれ萬遍なく選らばれ、公的生活の長短などが土臺にされるのである以上、どれも同じ結果になるのは自然であらう。……失禮に深入りしてすまない。本筋にもどらう。

まだ現地では戦闘をしてゐる。占據地域に於ても治安の不良なところが少なくない。而して宣撫工作が血のにちむやうな努力によつて進められてゐる。まだまだ文化工作などといふ時期でない、といふ見方も考へ方もあらう。一應尤であるが、それにしてもこの大工作の足どりがたどたどしくはあるまいか。

對支文化事業には基礎的といふべきものと、直接民衆への働きかけとの二面が考へらるべきである。更にこれ等の双方に於て、支那の當局及び同國人との結びつきの上で區分して、觀

察することが、この工作の過去の事績に明視を與へる。またこれを歐洲の諸國のそれとわが國のそれとを、右の區分の上で對照考察すれば、わが國の從來の業績如何を理解することが出来る。これが如何やうな對照になつてゐるかは、こゝでは略さなければならぬが、わが國、わが國民として、基礎的の部面に於ても、民衆に直接に働きかける部面に於ても、同様に過去に數倍する有形、無形の精力が注がれ、數段の迫進が行なはねばならぬことはいふまでもなからう。而して現下當面の仕事としては、後者即ち民衆に働きかける工作が、事變の結果の收拾、今後の大工作の第一歩であるべきであらう。

ところで基礎的の作業と働きかける作業と、兩者を對比して見て、後者に於て比較にならぬ困難な性質を見るのである。人間は地上に於ける無比に複雑なる存在であり、而して支那の民衆は、それ等のうちでも極めて特殊な性格の所有者である。永年奥地に支那人と共に生活した宣教師等の書いてゐるものを見れば、その理解の如何に困難であるかがわかる。在支三十餘年、宣教師で學者であつたスミスは、外交官の教科書といはれるといふ『支那的性格』の緒言の書き出しに『たとへ個々の人が支那についてどんなに知識が豊富になつても、支那人の眞相を餘すところなく知ることは出来ない』と書いてゐる。餘すところなく知るなどといふこと

は無謀なこととしても、その要領を理解するだけには必要であらう。少なくとも理解の困難な、特殊な民衆であるといふことを寸時も事毎に忘れてはなるまい。以前は同種同文などといふ寝言のやうなことであつさり片づけられてゐた。また以前には、日支兩國を車の兩輪に例へていはれてゐた。それは一車の兩輪でなくてはならぬといふ理想であつて、テーマである。その車輪の一つ一つたるや、その材質に於て、その構造に於て、その輪金に於て、互に著しく異なつてゐるのである。私は支那の街頭で車を見て、この言葉を思ひ出すのである。支那の車はギーギと鳴る。この點なども暗示的である。このやうな異なる二つの車輪が具合よく廻つて荷物を運ぶやうにすることがテーマであつて、吾々お互は一車の双輪だと叫んだところで、自信したところで、それだけで車が進むことになるわけではないのである。

支那人を理解しようとするのが課せられてゐる仕事である。眞剣に勉強せねばならぬ仕事である。こんなことはいふまでもない。いふまでもないことが實際にその通りになつてゐるのなら、こんなことを書くわけではない。今次事變以來のわが國民に見られるよい現象の一つとして、支那に関する知識の進んだことだと一般にいはれてゐる。併しどこまで眞であらうか。これは、専ら地理的事、それも作戦の行なはれた關係地域に関する知識が専らであるやうに

私には思へる。先日旅行中に讀んだ、滿洲出版の本の序文に、特務機關の某少佐が面白いことを書いてゐられた。それは漢字では「支那通」で、實は「支那通ひ」や「支那通り」が多いといふのである。支那に行く人は夥しい數である。支那の各地では澤山の旅館と料理屋が連夜満員の盛況である。支那通ひと支那通りは途方もない數に上つてゐることが確かである。それ等のうちには、それぞれ専門の方面で知識と理解とを收穫してゐる人達も多いことであらう。併し當今の状態で、支那人を學び、それを理解しようといふことは出来さうでない。都會では住民の階級と種類の構成が平常時とはひどく異なつて居り、農村に於ても民情は平常ではあり得ないからである。といつても、この状態が、特殊状態に於ける支那民衆を學ぶことによつて、それ等を理解する貴重な經驗を提供するであらう。皮相の判断の危険であることは、その時の如何を問はないが、特に異常時に於て甚しからう。

日本佛教の支那進出による民衆教導といふこともいはれてゐる。私はそこに違算がありはせぬかと、柄でもない餘計な心配をするのである。儒教と佛教は支那からわが國に傳はつた。孔孟の教がわが國の道徳人倫の規範になつて來て居り、佛教がわが國に於ける最大の擴がりと深さを有する宗教になつてゐる。支那はその儒教の母國であり、わが國にとつて、その佛教の母

國である。儒道、佛教のこの深い因縁が、對支文化工作の一つの役目を受持つべきである、といふ論理は一通り成立つやうである。ところで——口があまり過ぎるやうであるが——支那は道教と回々教の世界であるといつてよからう。私はいつも忙がしい短い旅であるが、佛寺を見物することを心がけてゐる。それは玩古癖といふやうなものさせることでもあるが、佛寺の現状を見たい爲でもある。また回々に關心をもつてゐる。その大きい力を信ずるからである。そして佛教が無力な不純なものになつてゐることの豫想以上であることを感嘆してゐる。鎮江の金山寺の如きは異例であつて、大寺も多くは廢朽してゐる。中小の寺も荒れてゐるか、或は道教と組合つてゐる。現世御利益祈願の參りの衆生が相手であるが故に、お利益のある佛様と道教神や尊者が同居させられて御座るのは當然のことである。坊さんと道士が同居してゐるところがあり、俗人が寺守りをしてゐるのも多い。佛教居士林といふものには相當なものが見られるが、訪ねてみると半佛半道のものであつて、「大上感應篇」を施本にしたりしてゐる。民衆に浸潤してゐる道教の深さはまことに至甚なものがある。道教と意識してゐないで、思惟が道教的になつてゐるところに、動かし難いと思はれる強さが感じられる。基督教すらが道教化して居り、道教化によつて基督教が支那人のものになつてゐると、研究家もいつてゐるのを

讀んだ。道教とはまた別様な種々の點で偉力を認めるものに回々教がある。回々の族はその數の上に於て、またそれ等が國民構成の上に嚴然たる一團をなしてゐる存在である點に於て、經綸の上にも重大性を有するものである。知つたかぶりを致してすまぬが、佛教を旗じるしとして文化工作に乗り込むといふことは、道教と回教に挑戦することであり、日蓮上人の叫びに數倍する大壯舉である。

支那、支那人を學び、理解を得る一つの途は、支那人自身によつて、特に近代、近時の支那人によつて書かれたものを讀むことであらう。若干の邦譯本が出てゐるが、彼地の出版物が、殆んどわが國で見られず、讀まれてゐることの極めて狭いやうであるのは如何かと思ふ。大多數の國民が漢文を習つてゐる。併し讀むもの、習つてゐるものは唐宋がとまりである。西洋紀元で十三世紀、源平時代の前、藤原時代のものが止りである。單語、文句、文體までが變つてゐる。國民、民族といふものは變らざるものに、變つて行くものを交錯させて變動し發育する生き物である。その状態に於てその等を把握することの出来る一つの途が、各時期の文書でなくしてはなるまい。時文の教授が普及したのは結構なことである。近代並びに新らしい良書が——良書が無いとは誰もいふまい——國內でも手に入る途があるべきであらう。爲替管理の

問題がある。併し相當に輸入したところで、書畫骨董などは額の段が違ふ。

對支文化工作の當面の障害が抗日意識であることはいふまでもない。抗日意識の徹底が、如何に周到細密な方法で多年實行され、如何にそれが注がれたかは、私がいふまでもない。ところで近年の抗日意識を専ら國民政府、特に蔣政權に歸してゐるやうな傾向は如何かと私は思ふ。少しばかりの讀書で知るところでは、もともと支那には、日本無視、日本警戒、日本恐怖、抗日、而して表面的親日の外皮相が反覆されて來たのであつて、眞實の親日といふ顯著な時代の存在は至つて消極的にしか思はれない。抗日意識と蔣政權の名を結びつけて考へる意思に、私は不満を感じるのである。換言すれば、對支文化工作に於て、吾々が當面する抗日意識なるものは、極めて舊い流れのものであり、親日意識といふものは、復故ではなくして、新たに作らねばならぬものといふのが、當つてゐると私は思ふのである。従つて茲に強大な迫進力と自信と方略と實力と而して經綸とが要望されるのである。

かくいへば、人は多數の親日家の名や事實を例示して反説されるだらう。或は親交の經驗を語られるであらう。私はそれを認める。併し私は二つのことを提言するであらう。一つは支那

人の胸のなかには、私の如きものには知り難いといふこと、もう一つは資料の取扱ひには確率論プロバビリティが必要だといふことである。こゝでは後者だけに就て申すことにする。幾十年の間に、幾十萬の人間のうちからは、あらゆる種類の人間、あらゆる關係が生ずる。これは生物界の法則であり、それが無類に大きいのが人類の特質である。若し支那人のうちから若干數の親日家が出なかつたとしたら、それは右の大法則の異例であつて、これほど珍らしい事例はあるまい。要點は舉例でなくして、頻度の計數でなくてはならぬ。最も手近い材料は留學生の成行きである。

わが國人は支那人を自身以下の國民と見てゐる。併し惡意をもつてはゐない。蔑視するが憎むといふ氣持はない。そして往々にしてこの態度、氣持を延長させて、支那人は自身等を彼等の上のものに考へてゐる、頭をさげてゐると、考へる傾向が相當に行互つてゐる。歐洲人は日本人を笑ふ民族だといふ。わが國民ほどに外國人に對して控へめで、歡待すきである國民はあるまい。わが國民は國際的にまことに和かである。美質である。併し一面には俗語にいへばお目出度いのである。對支那人の場合には、これと違つたお目出度い一面が至つてあざやかである。占據地域に於て、邦人は威張り散してそれで通つてゐる。支那人は完全に威張り倒されてゐる。國威發揚であるが如くに見ゆる。ところで支那人は手硬いのである。

對支文化工作には、説いて聞かせることもあるが、現實に見せることが、民衆を対象として特殊な重要性をもつてゐる。特に支那大衆に對する工作は、現實に彼等の眼に映せしめることに重點が置かれなくてはなるまい。見せるといつて、私は展覽會や映畫のことをこゝではいふのでない。

對民衆文化工作の實地の仕事は、日本人がその文化を現地生活に體現して見せることでなくてはなるまいと思ふのである。文化といふ範圍は廣い。各國の民族が所有するものには種々の文化がある。外國に通用しない文化もある。また病的な文化もある。傳統的なものであつて而不健全な文化もある。現地で支那人に見せる文化生活といふものは、日本人生活のありのままであるべきではない。それは健全なる日本文化的生活でなくてはならぬのはいふまでもない。占據地域に於けるわが國人の生活に就て、私は三つの點に感じをもつてゐる。一つは威張り散らしてそれで通つてゐると思ひ、支那人は威張り倒されて無表情でゐること、も一つは國內の遊蕩的施設とその氣分とがそのまゝ持込まれて過度に高潮されてゐること、第三は、邦商が支那の民衆、社會に喰ひ入ることをしないで、所謂友食ひをしてゐることである。

支那人は、或は無表情であり、或は腹のなかを表面に表はさないのみか反對な表情をも巧みにやつてのける。軍占據地には、守備の衛兵が歩哨に立つてゐる。その前を通行する者は、敬禮をして、良民證、許可證の類の検査を受ける定めになつてゐる。日本人も同様である。そこに立止まつて通行の支那人の顔相を見てゐると、大部分のものが無表情である。これは歩哨の前に限つたことではないので、別段の意味はない。なかに慇懃なる態度を示すものが少數にある。特に甚だ親しげな、尊敬と感謝の意を表はす表情と態度をする者がある。私にはこの最後の類の者の印銘が甚だ深い。無表情なる者に深い内容があり、表情を示すものにも亦深い内容がある。先頃私は津浦線を二等車で北上した。途中乗降者があつて、寢臺車の一つのコムパーメントに數人の支那人の相客があつた。何れも中産級の人物であると思へた。そこへ憲兵の臨檢が來た。そして一人の商人風の者は特別の検査を必要としたらしく、支那人の通譯に命じて去つた。その通譯の語調、態度に私は驚いた。そしてそれよりも感嘆したのは検査を受ける側の態度である。寒巖枯木とか氷の如しとかいふ句があるが、ひたすら感嘆する外はなかつた。私は支那の街や村を歩いて、悪意ありげな顔貌に會すると寧ろ心安い氣持になる。多數の無表情な顔貌を向けて迎へ送つてゐる民衆の間を通つて、緊張を禁じ得ない氣持がする。

占據都會地の遊蕩的情景は、彼地に特殊なものではなく、國內の状態の延長であつて、わが國の至つて下劣な傳統の一面の近時に於ける病的の發達が、彼地に延長してゐるのである。近頃の東京を中心とする一帯の地域の遊蕩的傾向が時局下に適はしいと感ずる人達はあるまいと思ふ。——今日この文を興亞奉公日に書いてゐる。先月のこの日のことを新聞紙が如何に傳へたか——特に彼地に於て、この遊蕩的局面が、特に卓絶して異彩を放つてゐるのである。これ等について、また第三の點に就てくどくどと書くことを遠慮しよう。そして一つの紹介をしてやめよう。それは火野葦平氏の早稻田大學での講演のなかにある。

蔣介石が新生活運動といふものを強行したことは周知の通りである。私は、昭和九年に、南京で開かれた極東醫學會に出席して、その様子を瞥見することが出来た。私達參會者も部分的にその規律に従はされた。わが國では到底行なはれさうにも思はれぬこの仕事は、大體都會では形だけでも行なはれてゐたのである。特に力が注がれた或る大都會で、私の知人が人力車上で喫煙してゐて警告を喰つたといふ實話を聞いてゐた。そして私は昨夏その町で、連夜日本人の醉拂ひの怪音に眠りを妨げられたのだつた。これ等の地に持込まれた遊蕩的發展が如何なる感作をわが文化工作に及ぼすであらうか。或る日私は、白粉のはげた年増藝者があまりきちん

としてゐない姿をして、花の咲きかけた梅の大枝をもつて、街頭を揚々と歩むのにあつた。その時に同伴してゐた人が、その町では、樹木愛護が、違反者に死刑までも行なつて徹底させられてゐたのだと語つた。郊外の丘の公園に行つてみると、植込の枝が殆んど折られてゐる。邦人の仕事だといふ。對支文化工作の重大な局面が街頭にある。

一 昨年暮に、「支那に對して何を爲すべきか」といふ座談會に引出されたことがある。その席で、立派な人達が渡支することが必要であるといふ發言があつたのに、私は、現下の状態に於ては、それよりも不良な者の渡支を防止することが必要だといつた。列座の諸公は満足らしくない様子であつた。實際に旅行して、この前言の確信を深めてゐる。去る二十日から渡支者に制限が加へられることになつた。通貨及び在外消費の點が主であるやうであるが、それ以外の點から見ても適切であり、慶賀すべき處置である。更にまた北支軍は不良在住者の處分の布告を發した。昨夜のラヂオは中支軍も亦同様の布告を發したと傳へた。更に適切な處置であつて、徹底的な強行が望まれる。但しこゝに懸念されることは、吞舟の魚は網にかからぬといふ昔からの言葉が、至るところで現實であることである——またしても野人の無遠慮がすぎますまぬ。

私の職業に關係のないことばかりを書いて来た。それに就て私見を述べる事が、もともと目的でなかつたからである。終りにこゝでその一部に觸れて置くことにする。

醫學による文化工作は、工作の諸方面中の最大なるもの一つであることは論をまたない。醫術は上下萬民に幸福を與へ、またわが國の學術、技術の世界的優秀性を現實に見せることが出来るからである。實際問題として、わが國にとつての課題は、如何なる様式によつて、效果的にこの工作を行なひ得べきかといふことである。こゝに慎重な研究がなされねばならぬ大きい問題がある。残りの紙面を費して、施療に就て思つてゐる一端を述べることにする。

私のいはんとするところは、施療によつて民衆が感謝してゐる感じ、換言すれば、その對民衆的效果を簡單に考へてはなるまいといふことである。またしても無遠慮な言葉でいへば、實效以上にこれを自身で評價して、民衆側の受恩の感じと、當方側の施恩の感じの間に、相當の隔りに氣付かぬことに、留意せねばなるまいと思はれるのである。これは種々の項目について考へられると思ふ。

先づ民衆には、自體の異和、疾病を感知すれば、必らず醫療を受けるといふ生活をしてゐな

い者が多い。俗間療法、呪ひの類をするか、或は何もしないでゐる者が多いのである。それで醫療を施して呉れる場所があればそこに來るのであつて、醫者にかゝらねばならぬが、醫者が無い、或は醫療費をもたないで困つてゐる者が、全部或は大部分ではないのである。このことは施療所の患者に注意すればわかることである。このやうな類のものが相當數を占めてゐるといふ點を仕事の評價に考慮することがよからう。

次に、支那では救助といふことがわが國とは違つてゐるのである。天災、動亂が続いて民衆を悩まし、政治當局が不安定である爲に、社會組織に相互援助、ギルトの組織などが自ら出來てゐる。自衛救助の組織も自ら發達してゐる。戰亂の際にも、金を出して軍に移動して貰ふことの行なはれてゐるのは周知の通りである。困つた場合に救つて呉れる途が、勿論全部には行互らないしろ、或る程度に、或る範圍に於て講ぜられるものだといふのが、民衆の體驗になつてゐる。占據地でわが軍が施療をするといへば、彼等には新しいことではなくして、日本は當然この位のことをするものと思へるかも知れない。

支那で案外なことは廢疾者、孤老者等の救療所の多いことである。その數に於て到底わが國の及ぶところでない。近年は多く地方廳の經營に換へられてゐるが、その成立は概ね公の社會

政策で建設されたものではなく、私の施設から發達して來たものである。即ち有徳者といはれる者の仁惠の行爲として出來たものである。而してこれ等の慈善事業、救濟事業に就て、前にいつたスミスがその著書のうちに次のやうな説明を加へてゐる。『支那人の揚言する仁惠の行ひは凡て利己的動機に基いてゐて、善果應報を信する結果』であるといふのである。野良犬の收容所のあるのを見た時に、私はこの言葉をなるほどと思つた。臘八粥といふ貧困者に對する年末近くの施食は、豐年の年にも行なはれ、穀物の値段暴騰の年には、お粥は出せないといつて布施の公告を出さないとスミスは舉例してゐる。また同氏は、支那文字では、通例情緒に關係のある多くのものには「心」があるのに、仁といふ字にはこれが無いともいつてゐる。布施が持てる者の善果應報の爲のものである社會では、持たざる者の布施を受ける感じは、それに對應するものであつて不思議はないわけである。

なほまた支那では、歐米人が對民衆醫療に多年に互つて力を注いで來てゐる。頗る壯大なものから小さいものまで、頗る多くの施設に資金を投じてゐる。宗教と結びついて精神的にやつて來てゐる。なほまたその方法に細かい研究の結果を實現させてゐる。私は臺灣在佳中に臺南の新樓病院を訪問して、第二代院長と會談し、細かに院内を見學して、一家父子二代四人の、

構内に閉ぢこもつての滴水穿石的の仕事に感嘆したことであつた。支那本土に於ては、私はまだ一二のもの外、實際見學の機會を得てゐないが、それぞれの特色を具備した、感嘆に値する多くのものがある筈である。わが國の醫學はこれ等に優越して行かねばならぬのである。

大額の資金を投ずる大規模の施療が必らずしも効果を收めない。民衆の精神動向を巧みに把握した方法でなくてはならず、醫療によつて民衆に普く仁惠を感得せしめるには、必らずしも施療であることを要しない。

野人無遠慮の語を長々しく列らねた失禮を謝して筆を擱く。

(一五年六月)

疊・刺身・晩酌

去る二月の某日、私は北京を早朝にたつて、夕暮に張家口に着いた。そして新築の日本式の旅館に案内された。晩食のお膳には例によつて刺身がついてゐた。しかも遠く支那海を渡り、車臺不足の悩みの深い鐵道を運ばれて遙々と來た、赤い「まぐろ」だつた。萬里の長城を横ぎつて、車窓から駱駝の隊商の列を眺めて、遠くまで來た氣持になつてゐた、蒙古と門一つで境してゐるこの張家口で、新しい疊の上で「まぐろ」の刺身のついたお膳の食事を、なんだか落つかぬ氣持ちで食つた。そして張家口らしくない一夜を寝た。

翌朝、舊知の金井章次氏と會談した。蒙疆の最高顧問金井氏であることは説明するまでもなからう。元氣な金井氏の話は極めて面白かつた。そのなかで「まぐろ」の刺身の話が出たときに、同氏はいつた。「一日働いて、晩食には疊の上であぐらをかいて「まぐろ」の刺身で熱燗

を一本やるやうにしてやらねばいかん」。「刺身を食つてもチブスやコレラに罹る心配のいらぬやうには、政府がしてやるべきことだよ」と。これは勿論、支那蒙疆に進出して行つた同胞に ついてのことである。大陸進出と疊と刺身と晩酌と。これを右のやうに考へるのも筋の通つた ことである。しかしこれは簡単な問題でない。たゞに保健衛生の問題としても重要な實際問題 であるのみならず、支那進出者の態度といふ點から考へて、根本的な問題を含んでゐるものと 私は思ふ。

まづ大陸進出と保健の問題を考へてみよう。

支那に於ける衛生の問題は、事變當初からわが國の努力し來つたところのものである。治療 班、防疫班は、軍の前進に伴つて前進した。軍の占領後數日を出でざるに、看護婦も加はつて 入城してゐる例もある。多くの治療班は砲彈の洗禮を受けてゐる。その治療の數量は巨大な數 に上つてをり、防疫班の活動の功績は實に赫々たるものがある。時局の進展と共に、全般的な 支那に於ける保健衛生の援助、指導といふことが當局によつて考へられて來た。形の上からい つても、興亞院の文化部には、これを管掌する一課があり、技術部の管掌中にもこれが加はつ てゐる。昨夏は可成り大掛りな調査團三班が派遣された。支那の保健問題には大きい貴い努力

が注がれて来てをり、また進められんとしてゐるのである。

こゝで留意すべきことは、支那に於ける保健衛生の問題には、進出同胞のそれが重視されるべきことである。この點について私は危惧を懐いてゐるのである。

わが國民は支那及び支那人に對して優越感をもつてゐる。國民の上下を通じて、有識無識の全部を通じて、それぞれの形でこれがもたれてゐるといつて、過言でないやうに思はれる。この優越感は大進出の極めて良き力である。しかしこれに禍ひされてはゐないだらうか。私が懐く危惧を、私はこの點に結びつけて考へてゐるのである。

支那に於ける個人生活の上での保健、衛生に關して私がいはんとする感想を、卒直に簡單に申せば、わが國民は、この問題に關して誤まつてゐる先見を是正すること、その生活及び思考の態度に於ける缺陷を自認すべきである、といふことである。誤まつてゐるとか、缺陷とか申すのは、如何にも分に過ぎた、身のほどを知らぬ僭越であると思はれるであらう。私は敢てかくの如く先づ記して、この小文の筆を進めて行くのである。

私は昨年の夏以來、三度中北支を廻る機会を與へられて、かなり多くの大中の都會を一見することが出來た。それは都會に限られてをり、また皮相の觀察に止まるのであるが、その印

象は、私には相當によくないものであつた。

簡單にいへば、日本での生活をそのまま支那で行なつてゐる。支那、支那人とはかけ離れてゐる。碁石の一杯に列んでゐる碁盤の上の一隅一局に將棋の駒の一群が頑張つてゐるといふ形である。その一群に圖抜けて目立つてゐるのが、旅館と料理屋と、而してカフェーである。旅館、料理屋は、あらゆる點であくまで日本風なるものにしようとしてゐる。二十數萬圓を投じて改作したといふ一軒で御馳走になつたこともある。カフェーは、私の淺見では、日本人が工夫した世界に於ける最も醜惡なる造營物である、と考へるのであるが、支那の都會で能ふ限りその異態と特性を發揮せんとしてゐる。

現在の支那の都會の情景は、事變下の異常風景である。勿論至つて不自然な情景である。そしてまたこれが現状に於ては自然であるのかも知れない。然しいまや局面は一轉回した。これから情勢が如何に變り、如何に進んで行くことか、私などにはわかる次第ではないが、早晚目立つた轉變が現らはれることはいふまでもなからう。

往年シベリヤ撤兵の當時に見られたものに似通つたことが、あちこちに見られると想像される。甚だみじめな光景も見られるであらう。しかしこれによつて在支同胞の堅實性が得られる

であらう。大陸進出の本當の情景がそろそろ見られることになつて來るであらう。それが切に望まれる。

筆がいさゝか見當違ひの方向に入つたが、私は、大陸における大業の爲に、進出同胞の生活の合理化、堅實化に就ていひたいのである。

さきに申したやうに、わが國民は支那人に對して優越感をもつてゐる。吾等は、日清戰爭時代以來、子供の時代からそれを興へられてゐる。これが頭腦にこびりついてゐる。この優越感は大體進出に良き力である。しかしこの優越感について疑問がある。その吟味が不足してはゐないか。國家國力を背景としての優越と、素裸の個人としてのそれとが意識されてゐるだらうか。支那人に於ける優越點が、深く考へられてゐるだらうか。

支那人の化すべき點は化してやらねばならぬ。一方に支那人に學ぶべきところは充分に學ばねばならぬ。化してやることは相手の利であるが、學ぶことは當方の利であつて、先づ勉めるべきは學ぶことである。他人に學ぶ、他國に學ぶ、異國人に學ぶことは、自身の郷土にあつても、勉めねばならぬことである。自己満足、自惚ほど見苦しくまた退嬰的なものはない。異民族の國土に乗込んで、そこで優位に座らうといふ大仕事が、淺薄な優越感などをお守札にし

て出來るわけはなからう。こんなことは更めていふまでもないが、私はこれを個人の保健生活についていふのである。

外地進出に伴つて來る條件は、異なる環境に應ずる疾病防除と健康の維持、しかして環境順化（アックリマチゼーション）である。まづ疾病防除に就て考へてみよう。

支那は各種の疾病の甚だ多い土地とされてゐる。これがわが國民の先入知識になつてゐる。然らばそこにどれほどの精確な根據があるのか。傳染病を除いては、私はこれに疑問をもつてゐる。少なくとも現に生きてゐる支那人の體質が強健であることは確かであると思はれる。しかしこゝでは一まづ右の先入知識は正しいとして置かう。さてそこで實際問題は、先入的に右のやうに認めてゐる日本人の支那での生活が、その知識に即してゐるか、といふことである。私はこの點に於て消極的な答をせざるを得ない。

個人の保健の要件としては、衣と食と住、休息と勞働とがあげられる。これ等のうちで異國土進出の場合に特殊なものとしては、先づ第一に食、次に住をあげてよからう。疊と刺身と晩酌の問題が即ちそれである。

支那料理は世界に無比なものであるのは何人も認めてゐるところである。その品目の多種多

様なることに於て、その材料の驚くべく廣汎なることに於て、全く無比である。しかしこれは高級な料理についていはれることである。庶民乃至賤民の食餌は如何であらうか。こゝに吾々にとつて深く注目すべき問題がある。この場合には、その栄養價のみならず、調製の勞作、錢價が併せて考へられねばならぬ。私の皮相の所見では、こゝにもまた支那食の世界的優秀性を認めたいのである。

當今大中の都會を廻る旅人は、至るところで日本式の食事をすることが出来る。出来るといふよりは、それが普通であるといつてよい。私は食膳に支那らしいものを加へた例に遭遇しなかつた。このやうなことが、その旅に適はしいものであるとは私には思はれない。私は機會のある毎に街頭の小屋がけや、市場や、安料理屋で食事をしてみた。極めて美味であつて、不衛生的ではなかつた。私は、旅をするには、その土地の人民の生活に出来るだけ接觸することが一つの本義であると考へてゐる。ましてやその土地に進出して、それ等と有機的の交渉關係に立つて、自己を延ばさんとする場合、行住坐臥に相手方に就て學ぶことの第一義事であることは明らかであらう。

われ等は、支那平民食について學ぶべきである。研究さるべきであり、また現地に於て體驗さるべきである。そして彼の長を充分にとり入れて、在支同胞の合理的、即ち營養的に經濟的に合理的なる食餌が知得され、實行されねばならぬと考へる。

住居に就ても同じことがいはれる。住居は食餌以上に郷土的なものでなければならぬ。郷土本來のものが必らずしも適切なものではあり得ない。しかし文化の低い土地に於ても、經驗的に自然に合理的なものになつてゐるものがあつて、理論や何ぞで仕上げたものよりも立派なものもあり得る。こゝでも充分な現地研究と周到な體驗とを必要とする。

疊と刺身と晚酌のうちで、第三が残つてゐる。晚酌を私は問題としない。しかし酒には問題があると考へる。私は酒そのものの利益有害は別として、わが國に於ては飲酒の作法と、飲酒に伴なふ風習に大きい缺陷があることを痛感してゐる。支那でもこのことがいはれる。

疊の上であぐらをかき、「まぐろ」の刺身で熱燗をひつかけるといふことには、意氣の一面がある。この意氣そのものは貴い。日本人は意氣を尊ぶ。意氣こそは國民の寶である。意氣あつてこそ雄飛するのである。しかし力のない意氣は空なものである。また意氣ばかりで廣い世界に延び榮えて行けるものではない。

大陸進出、國家生命線の確保が、意氣と精神ばかりで成就されるものではないと思ふ。極め

て地味な、意氣地の無いやうな一面の根柢が、確かでなくてはならぬ。この平凡なことが、存外忘却されてゐるのではないか、といふ感想をも私はもつてゐる。

(十五年五月)

揚子江

南京から九江まで三日四晩の揚子江の船旅をした。夜は錨を下ろし、曉から夕暮まで時速六浬で溯航するのだから、河上河岸の風光は残すところなく賞味することが出来る都合になつてゐる。そして當り前の揚子江ではない。軍艦旗下の揚子江である。私の山水放浪の思ひ出の特殊なものの一つになるであらう。

□八月二十七日

六時までに乗船の指定になつてゐる。船は可なり上流に碇泊してゐる。下關碼頭からのランチは黄褐色の流れに逆つて上る。大きい蘆の洲の近くに、珍らしい格好をした大吉丸がぼかんとしたやうに碇泊してゐた。一、九〇〇トンだから小さくはない。その平べつたい船體から、不調和にひよる長い煙突がおつ立つてゐた。甲板の前半部の舷側には防弾の厚い鐵板が張り立

てである。舵機室は土囊で防禦してある。氣強い感がある。後半部は殆んど何物も無い廣々とした遊歩デッキになつて居り、キヤムパスが張られ、濃いコバルト色に美しく塗られてゐる。氣持のよい船だ。

暑い日が暮れて、照りつける太陽が傾く頃、お月様も同じ高さに出て來た。日が没して月は無上に明るく照らして來た。三晩目の安慶で満月だつたのだから、この晩は十三日の月だつたわけだ。月光は船體の眞横から照らして、その影を水面にくつきりと投影させ、ひよる長い煙突の影が特に面白く見えた。夕暮から蝙蝠が澤山翔び廻はつてゐる。小さいやつで、可憐な感じである。月光はそれ等の小さい影をも鮮かに水面に寫して見せた。下流南京の碼頭一帶には電燈が點々として望まれるが、多くはない。低い兩岸は殆んど無人郷の觀である。たゞ一つ右岸に五層のコンクリート造の工場の建物が立つてゐる。半完成であつたのか、或は砲火に破られたのか、外廓だけで造作はない。低い月は對側からそれを照らして、三四十個の同じ大きさの窓を明るくして、眞四角なこの建物を、低い岸の上に厚紙の切ぬきの影繪のやうに見せる。上層の一角が無残に破潰されてゐるのが特に目立つて見えて、戦禍を思はせる。日が暮れてからは一艘の船も通らない。靜かな世界だ。

甲板の下にある船室は可なり寢苦しかつた。夜半に廣いデッキを歩んだ。水面の船の投影は小さくなつて、ますます靜寂だ。

□八月二十八日

五時に錨をあげて、昨日から眺めてゐた大きい蘆の洲に沿つて溯江を始めた。

今は水量の最高に近い季節で、水面はひたひたと岸に迫つてゐる。長江を味はふには良い季節だらう。

午後一時蕪湖に近づく。先づ行手に現はれたのが蕪湖醫院だ。江岸に接した丘にあつて、裾の一帶が大きい楊樹の緑に深く包まれ、丘の上に壯大な赤煉瓦の高層建物が幾棟か立つてゐる。それに交はつてゐる大きい楊樹の緑との組合せが頗る美しい。屋上の馬鹿らしく大きい十字架が眞黒である。裏門の扉に一面に國旗を彩畫してゐるのが目立つ。對支醫療事業の複雑性を物語つてゐる。

蕪湖の街には丘が多い。その丘に洋館が散在してゐる。美しい風致ではない。町には大きいカトリック寺院が見え、頭がちよん切られて、そこに樹の茂つてゐる古塔が岸に近く立つてゐる。

本船はハルクについて、三時に出帆した。澤山のサイダが積込まれた。

五時、上流に點々と船の碇泊してゐるのを望む。荻港だ。手前には江上に小島があつて二層だけになつた塔が立つてゐる。本船もそこに着いて錨を下ろす。午後六時。流れは強く、底は不安定で常に變はり、投錨はなかなか面倒な仕事らしい。船夫は落ついて黙々として働らく。

左舷前方に軍艦〇〇がある。〇〇〇戦隊司令官坐乗の旗艦で、雨風にさらされた〇將旗が檣頭に揚つてゐる。右舷前方にも後方にも軍艦がある。何れも燈光は二三見ゆるだけ、時々短かいラッパが聞え、燈火信號が交はされてゐる。

夕方から雲があつて曇つてゐたが、やがて十四日月が静寂な武装下の江上に明るく出て照り渡る。今夜も蝙蝠が翔んでゐる。

□八月二十九日

錨を捲く音に目ざめて、身仕度をすまして甲板に上つたら、既に出帆してゐた。軍艦は三艘とももう見えない。大形の荷物船があとから追つて來てゐる。上流には更に軍艦が碇泊して居り、岸には民船が二つ三つかゝつてゐる。豆のやうな小艇が大きい軍艦旗を朝の日にはためかして、江流を斜に横ぎつてゐる。やがて流れに乗つて矢の如く走り下る。まことに壯快な光景

である。

今日から江上の風光は變つて來るのが感じられる。一言にいへば、想像してゐた揚子江とは異なつたものになる。

私は支那の河を僅かばかり経験してゐた。珠江を廣東まで溯る船に乗つたことがある。その外に塘沽から白河を下つたことがある。それだけだつた。今度の旅で、前に上海から南通に行く爲に天生港まで河口を溯つた。そして數日前に鎮江に行つて、金山寺と甘露寺から江を眺めた。前の回に、天生港に近づいて眞平らな低い岸に、突兀として圓錐形に立上つてゐる軍山、劍山、狼山、馬鞍山等の一群を眺めて、思ひがけぬ面白味を感じた。鎮江の揚子江の眺望は最も美しいものといはれてゐる。金山寺の後丘には、康熙帝の雄健な筆の江山一覽といふ碑がある。全く江と山との一覽にあの風光の特色がある。甘露寺の眺めは、梁の武帝が天下第一江山と賞稱したといふ。寺後の亭には江山第一勝と題して、康有爲の扁額があつた。この江山を併せた風光もまた私には思ひがけぬもので、まことに美しいものであつた。江水に配された美しい山がこのやうに在るといふことを、下流揚子江には想像して來なかつたのである。南京を出て翌日の風光は、簡単にいへば徒らに大きいものの感じであつた。

江中に大きい洲をなし、また岸を廣く被ふてゐる蘆が最も目をひいた。丈高く茂つて、頑丈に太つて、密生してゐる。そして馬鹿廣い廣がりを占めてゐる。「土匪を棲ませ、野獸を滑ませ、廣范何百里の蘆原」とも書かれてゐる。資源としても清朝時代に既に一百万兩と評價されたといふ。まことに揚子江らしい風物である。私等の眺めて航する蘆叢には匪賊も野獸もぬいに相違なく、所々に大きい四手網が見え、あちこちに小舟なども見える。

二日目からの江上の眺めは美しいものになつた。自然の大きさに、美しさと人間の味が深くなつて來た。私は大河の經驗に乏しい。一度北海道で釧路川をまる一日川船で下つたことがある。馬來半島でデ・ホール河を二三回上下した。ダニューヴ河をユーゴスラビアのベルグラードから下つて、有名な鐵門を過ぎてルーマニアのツルス・セヴェランまで下り、後にその黒海近い下流を下航したことがある。釧路川の兩岸の落莫たる光景には實に退屈に憊んだ。デ・ホール河の岸の熱帯のチャングルには自然の壓力を感じるやうな心地がした。鐵門の上下のダニューヴは人間臭いもので、汽車旅と遠くないやうな感が残つてゐる。その下流は兩岸が美しい楊の森だつた。このやうな頭の私に、揚子江は特殊な味のものだつた。

この邊の揚子江は下流の下半である。もはや老年に傾いた齡になつてゐる。それですべてが

和平の基調をもつてゐる。和平な兩岸には少なからず耕地が拓かれてゐる。遠目にはさつぱりとした村も時々見え、河に沿つて程近く道路もしばしば見ゆる。岸には小舟が見えたり、大きい四手網が高く引上げてゐる。但し人間は少ない。道路を人達がちらほら通つてゐる。村には人影が見ゆる。耕地に働らく農夫はまるで目に入らぬ。蘆の洲や岸の叢は今日になつて多い。江上はまことに單純である。名物の大筏を見たいと思ふが、そんなものは下りては來ない。支那船も上下してはゐない。外國船や汚ない蒸汽船の見られないのは幸としても、彩色の濃厚なロマンチックな姿をしたチャンクのない揚子江は、この點で物足りない。水面には波といふほどのものもない。渦流がさまざまに變るのが變化といへば唯一の變化だ。水面には漂つてゐるものも流れ下るものもない。單純、この一語に盡きてゐる。

今日は終日涼冷で心地よかつた。午後五時頃に、右手前方に大きい塔が見える。安慶だ。近づくとつれて、沈む日が逆光線に市街一帯を眞黒く見せる。大きい塔、丘の大きな建物の屋根など、眞黒く江上に浮ぶ光景は珍らしい。すごく印象的なものだ。それに岸の草原が夕日に照つて美しいグリーンに光つて、コントラストをなしてゐる。

街の前は流速が大きく水深が深いので、對岸に近く錨を投ずる。街が遙かに眺められて氣持

は一層よろしい。軍艦が一艘来て街の前面に投錨する。やがて昨日一所だった旗艦〇〇も来て上流に錨を下ろす。午後にあとから来て、さつさと木船を追ひぬいて行つた軍艦があつた。それは〇〇で、南京陥落の日に早くも下關に乗りつけてゐて、江上を群がり逃げる敗敵を掃射したのがこの〇〇であつたといふ。

まだ日は高いが檢疫が來ないので、下船客も上陸が出來ずに、焦慮悶々甲板で街に眼をすゑてゐる。それ等の人達から聞く戦前戦時の話、敵襲や空爆の體驗談などが、貴くまた面白い。この街はこの小江上旅行中での最も大きい重要な街である。上陸が許されぬので、甲板から眺める。海岸には外國權益の建物が見え、その奥を城壁が圍んでゐる。右手城壁外の空地には軍用倉庫が立ち並び、軍用トラックが黄塵をすこくあげて走つてゐる。その更に右手が、前記の古塔で大きい佛寺がある。歴史などには暗い私だが、五年前に南京に來た時以來興味をもち、勉強してみたいと思つてゐる長髮賊の亂の記事に、この安慶の名がしばしば出て來る。先日無錫に宿つた節、近い裸山のなだらかな尾根に、妙な恰好になつてゐる瘤のやうなものを見て質ねたら、長髮賊との戦争の時の堡寨の跡だと聞かされて、妙に興味を感じたりした。安慶の夕方に、いささか見當違ひだが、歸京したら少し本を讀んでみようなどと考へる。

今夜は満月だ。夕方から低い雲があつて地を被ふてゐたが、やがて月がその上に昇つた。空には雲がない。美事に牙え切つた月だ。街には燈火がちらほら見ゆる。城内の丘の木立の上に上樓の見ゆる樓には明るく燈がついてゐる。古塔と寺の形が大きく眞黒だ。町の外の、月光にぼんやりと輪廓の見ゆる樹木のなかには、小さい部落があつて、爆竹の音がかすかにしたり、煙火の火が時々美しく光つては消ゆる。仲秋の今夜は、平時なれば街の内でも外でも爆竹や煙火が賑かに響き光るのであるさうだが、遠慮されてゐて淋しいのだといふ。常ならば、胡弓の音などもこの船の甲板まで遠音を傳へたのかも知れぬ。

月光をあびてデッキを歩むと、少し寒さを覚える位の涼しさだ。もう秋かな、などと思ふ。江上も船上も静寂だ。軍艦ではピカリピカリと燈火信號をしてゐる。

□八月三十日

六時に起きて甲板に出る。〇〇は少し前に錨を抜いて上流に向つてゐる。八時過ぎに檢疫船が來て、一夜待ちわびた下船客は上陸。間もなく出帆。

正午近く東流の町の塔が見える。そしてこの邊から左舷の岸に山が近くなり、崖が露らはれたりして、風光は漸やく變つて、面白味が加はる。

揚子江は、洞庭湖口の岳州から武漢まで東北向に流れ、そこから東南に廻り、九江で再び東北に轉ずる。緩やかに轉向してゐるこの部分の江の兩岸には、大きい長い湖水が連らなつてゐる。それ等は江流よりも遙かに大きい。そして山脈の餘勢が江岸に近逼して來て、孤立山を造つてゐる。江水の本脈はしばしばそのコースを變じて、近逼して來てゐる丘陵山地の間を縫ひ廻り、それを洗つたのである。それ故に河筋は曲つて居り、崖がそれに望んでゐる。特に著しいところでは江岸や江上に突立してゐる島を現出させてゐる。下流揚子江の美がこゝにあるのである。それ等の岩島や、岸の景色の美しい突角や急傾斜に、或は塔が立ち或は廟が造られてゐる。廟には寺廟も道觀もあるらしい、また家廟であらうと思はれるものもある。いまは高水期なので、それ等の岩島は深くその裾を沈めてゐて、水上に廟堂だけが浮んで見ゆる奇觀もあつて、眺めあかぬ風光である。

一時過ぎ馬當を過ぎる。江と岸の接觸が最も激しく、岸角の最も秀でてゐるのがこの附近であり、古來長江風景の雄と稱せられ、河道は複雑で、江水の流れも荒らい。防備には要害の地域であつて、馬當は、江陰、鎮江、田家鎮と併せて、長江防備の四要塞といはれる。今次の戦にも敵は十數艘の汽船を一行に沈めて閉塞して防いだ。いまもそれ等の橋柱が十本ほど軽く傾

いて一列に立ち列んでゐる。

二時半。左舷の岸近い島地に太い地煙りがどつと上る。かなりの高さ一本に立つた光景は壯觀である。色は江水と同じで少しく濃い。間もなくまた岸近い水上に水煙りが上つた。地煙りよりは低いが眞白で太い。敵陣地からの砲彈である。遠い山手から打つて來るのであらう。續いてまた一彈が水煙りをあげる。デッキの椅子に坐はつてゐる自分と地煙りの點を連らねる直線の上を、正しく一彈一彈と近く射程が延ばされて着弾點は船に近づいて來る。船室にゐたM君を呼びに行つてゐる間に發砲はやんだ。

この邊が長江風景の雄といはれることは前にいつた。李白の詩に、孤帆遠影碧空盡、唯見長江天際流といふのがある由だが、何所での詠か知らず、私が見た長江はこれとは別である。九江から上流にこんな風物がありさうにも思はれない。清朝内府の珍寶とされてゐたといふ夏珪の長江萬里圖といふ畫卷がある。私はこれの複製を故宮博物館で求めて來て、自家卓上で眺める喜びを得てゐるが、九江下流の風物は畫かれてゐないので物足りない。

このあたりの景色の大きくて美しいところでは、大江といふよりは寧ろ大きな湖水、或は内海の風光である。行く手には水上の空は見えないで、右も左も前面もみな低い陸地と、その上

に頭を出し、或は江上に出て来てゐる山と丘で占められてゐる。そこを見當違ひと思はれる方向に船が進んだりするのである。馬當にかゝると前方遙かに低い陸地の上に細長く尖つた岩山が見ゆる。有名な小孤山で、廣い江水はS字に曲がり、小孤山が陸地の上に尖つて頭を見せるのである。流石は大江であり、大江は平凡な河でないと、見ぬ間の想像が夢消して、瀬戸内海の景色などが思ひ出された。李鴻章が下關の談判に来て、日本は小さい國と知つて来たが、大きい河があると、瀬戸内海を見ていつたといふ話があるが、この方が李白の詩よりは私には得心が出来る。

四時過ぎに彭澤。彭澤は三方山に囲まれ、茶碗を二つに割つたやうな地形である。その山の峰には城壁が築き廻らしてある。昔の支那の臭ひの強い、變つた風光である。陶淵明の故居として知られ、江西安徽の省界で、縣城がある。河上には前航の〇〇の外に軍用船が八艘ばかり碇泊してゐる。

彭澤の山と對峙して、江岸に接近して前記の小孤山が笏の如き姿で兀立してゐる。小姑山とも書く。頂に仙女廟があり、半腹には大きな廟がある。船の寄せ場がありさうにもなく、「浪は褌岸を噛んで水勢最も急なり」と書いたものがあるが本當らしく、廟守の生活や詣でる人達

の上下などはどうするのだらうなどと思はれる。書物には「懸崖三絶し西方の一面僅かに曲徑を登つて仙女廟に上るを得べし」とある。半腹の廟は相當に大きく、岩石の傾斜と彎曲を巧みに工作した格好が面白い。奇勝ではあるが、要塞であるといふのは受取れない。

この彭澤、馬當、小孤山を中央にしての兩都會、安慶と、それに行先の九江とは、長髮賊の亂の動亂の間に、雙方で取つたり取られたりしたやうに書物にあつたのを記憶する。當時の武器戦法では、馬當一帯は要害で動かかなかつたものであらう。小孤山に關する記事を見ると、水師を率ゐて、この亂の平定に偉功を立てた湖南の英傑青年だといふ彭玉麟といふのが、咸豐丁巳秋九月破石鐘山克湖口收彭澤取回小孤山肅清江上云々と題して、「書生笑率戰船來」云々といふ詩を廟壁に題してゐる由である。このやうなことには適はしいものに思はれる。クリスチャン將軍ゴルドンなどの出て来た亂の點景に、こんな三國志型のあるのも面白いといへば面白い。

安慶で時間をとつて、さきを急ぐ木船は湖口まで今日の航程を延ばす。九江に早く着けるのが好都合であり、夕暮の湖江も面白い。やがて日は没して、缺けそめた月光のもとに船は靜かに上る。湖口は、その名の如く、鄱陽湖の水の合するところである。この湖口から九江の地域

は武漢攻略戦、南昌攻撃戦の開幕地点、行動基地として吾人の記憶の新らたなところである。八時に投錨。街は眞暗で何も見えない。月明りに、正面に廬山の雄姿が立つてゐる。適度に尖つたその峰々などもぼんやりと見ゆる。なつかしい名の廬山だ。

面白くもあり、連日の仕事の軽い疲労を充分に醫してくれたこの船旅も、今夜一夜で、明朝は九江——昔の潯陽——子供の時から馴染みの、「潯陽江頭夜客を送る。楓葉荻花秋瑟瑟——」の潯陽だ。

□八月三十一日

いつもよりは早く五時に錨をあげる。湖口の合流点では江水の濁りが少ないと聞いてゐた。残念ながらそれを見のがした。その代りに前に江水の異常なものを見た経験をこゝに書いて置かう。

出立前に西班牙の作家イバニエツツの支那記行の獨譯本を読んだ。そのうちに揚子江の水がアブサン酒のやうだといふ句があつたので意外だつた。ところが上海に入港する前日の午後、海水が江水で濁り始めてやがてした時、そのアブサン酒色に當面して感嘆した。アブサン酒は飲んでいやな酒である。その色がまたいやらしい。アブサン酒色の海原は珍らしくもあり、面

白いものでもあつた。

荷仕度などをしてゐる間に、七時に九江に着いた。M少尉に出迎はれて旅館に入る。上海上陸以來一箇月、九江に来て始めて戦亂の面影の濃い町を見た。

旅館は大きい支那料亭であつた建物で、甘棠湖の岸にある。もとは宴席であつたらう客室の建物の下は直ちに湖水になつてゐる。甘棠湖は周圍四哩ある。階上から眺めると、正面に長堤が横はり、左手に小島があつて、風雅な建物があり、水柳が茂つてゐる。漂水亭といつて、宋の鴻儒周敦頤濂溪先生の故宅として由縁の舊いものだ。右手に寄つて廬山がその雄姿を全面的に露らはしてゐる。杭州の西湖畔などはまた別な趣のある支那らしさである。

翌日は朝から澤山の飛行機が街の上空を低く勇ましく翔び動いた。行動が始まるのだらう、などといふ私語も聞えた。その午後から廬山に登つた。歸つて街頭の電報掲示を見ると、歐洲の風雲悪化、ドイツ軍飛行機ワルシャワ攻撃等を傳へてゐた。

崇明島

今年の正月元旦の登る旭日を私は房州清澄山の旭の森で迎へた。大晦日に仕事を正午に切上げて教室を出て、夕暮に天津の港町に着いた。三時頃に旅館を出て提燈をさげて登つた。寺に着いた時はまだ暗かつた。樹木が多く、路のよい登路は氣持よく、寺の森がほの暗い空に輪廓を現はすところに来て、寺から太い太鼓の遠音が聞えて來た氣持は特によかつた。旭の森は太平洋に登る旭日に向つて日蓮上人がお題目の最初の叫びをあげたところと傳へられてゐる。水平線に一帶の白雲があつて、やゝ待ち遠しかつたが、やがて旭日は勇ましく現らはれ出た。先づ大日本帝國萬歳を祝唱し、次に「頑張れ」を三叫した。もう今年も残るところ三日。願ひて出来るだけ頑張つて來たことを自ら愉快に感ずる。

私の今年の仕事の一つは支那行だつた。七月に立つて九月に歸り、十一月に再び行つて數日

前に歸つて來た。今度の短い行程のうちに揚子江の崇明島が含まれてゐる。私はその崇明島の地圖を眺めて島の東端に朝陽鎮といふ地名を見出した。朝日頭と書いてゐる地圖もある。その地名は別に意味があるのかも知れないが、私は勝手に登る旭を迎へる土地といふことに解釋して愉快を感じた。何となれば、その位置が、江口といつてもまるで海である洋々たる濁水に、軽く南北に偏してゐるこの島の東の端にある。旭日は東支那海を正面に登るわけであり、その海は表徴的なる黄褐色である。島は水面上最高僅に八米、山どころか丘もない、こゝで眺める旭日は正に極めて東洋的なるものゝ一つである筈である。美しい清澄山の旭日を回想して、この茫漠たる崇明の旭日を眺めたいものだと思つた。新年の紙面の爲の原稿として、崇明島所見を筆にしてみようとするのは、こんな因縁によるのである。

揚子江口には數個の島がある。上海へはそれ等を船上から眺めつゝ黄浦江に入るのである。多くの人はどれが崇明島かと思ひ、近い島を簡單にそれと獨斷してしまつたりするやうであるが、はつきりと崇明島を見てゐる人は多くないかも知れぬ。こんな風に揚子江口は范洋としてゐるのである。江口一帶の底は至つて淺くて、水路が複雑してゐる。崇明島の北と南に水路があるが、船舶は専ら後者を通る。然も陸に接近して航する。崇明島の南に、それよりも遙かに

大きい銅沙坦といふバンクが突き出て横はつてゐる。揚子江デルタの南の突角たる揚子岬とこの銅沙坦との間の狭い水路だけが船舶を通るのである。海のやうな馬鹿な江口に船の通るのはたゞこの一筋、然も潮の加減でそれも通れぬ時間があつて、沖合でぶらぶらすることを餘儀なくさせられたりするのだから、まことに想像以上なものである。

上海を出帆し、黄浦江を下つて吳淞に來ると、南水道は大海のやうに見えて、その遙か正面に島が横たはつてゐる。可なり大きく見えて、崇明かと思ふが、すつと手前にある崇寶沙といふ島である。更に右手には鴨窩沙といふのがあり、反對の左手更に遙かの沖合に見ゆるのが崇明である。

島は東西に五六軒ある。上海から南京に溯江する船からは、島がよく眺められる。吳淞からしばらくの間陸地に沿つて上り、やがて針路を崇明島に向けてそれに近づき、島の西半を眺めさせながら上るからである。その船上からの眺めは珍らしいもので、水平上僅かに三米乃至四米に過ぎないこの島はフィリッピンからボルネオ附近の航海で、大きい珊瑚礁島を眺める風光によく似てゐるのが珍らしく興味がある。丘も無い低い地がそれを極めて遠いやうに感じさ

せ、對岸の陸地も低くて水平上に現はれないので、まるで洋中にある感じである。

崇明の港に入る前には可なり大きい洲が一つある。南豊沙といふ。茅藪があつて、貧しい家が散在して見え、海賊でも棲んでゐるかのやうに思はせる。馬鹿大きい四つ手網を仕掛けた漁船が數艘泊つてゐる。棲むのは漁民であらう。崇明は港といつても入江になつてゐるわけではない。直線的な岸に浮船式の碼頭が出來てゐる。

定期船は毎日一回運行されてゐるのだが、乗客は一杯で、百數十人が詰まつてゐる。こんな多數の人間が毎日行き來する用事があるのかと不思議に思ふ。上海といふ町は人間の多いところで、それ等が騒々しく動いてゐるところである。その騒々しい動きの波の續きなのであらうか。船が碼頭に着くと、船一杯の人間が何れも大小の荷物をもつて、銘々自己本位の行動を營なんで騒々しくさわめきたつ。オルダス・ハックスリーが太平洋紀行のなかで「上海の支那人町と同じ位殷賑を極め、人口稠密な町を見たことは勿論ある。だが、その殷賑と稠密とに於て、かくも壓倒的な印象を與へる町を見た事がない」と書いてゐる。本來の數字以上に、強い印象を與へるのが支那の群衆の特色で、碼頭に着いた船の光景は實際「壓倒的な印象」を與へずには置かない。岸にも百数十名が集まつてゐて騒々しい。碇泊地司令部の検査場の區劃を出

ると、小商賣屋などの民家があつて、一本道が城門に通じてゐる。群がる民衆を眺めて、先づその服装の粗末なことが目につき、容貌が下賤であるやうな感じが起る。氣のせいだけではなからしむ。

崇明は珍らしく昔ながらの形態を保つてゐる。眞四角な城壁に圍まれ、城門も舊態を存してゐる。城壁は東西に廿四町、南北に十八町といふ至つて小さいもので、面白いことには、城壁が二重になつて居り、城壁の外側を二間ほどの高さの土壁が圍んでゐる。緩い傾斜で、それに若い「そらまめ」の畝が直角の方向に作られて、横縞になつてゐる。説明されるまでもなく、洪水の防備の爲とわかる。前にいつたやうに、この島は東の方では稍高くて八米の地點もあるが、その他は三米乃至四米に過ぎない。洪水の恐るべきことはいふまでもない。記録を繰つた結果によると、六十年に一回は全島が水に浸つてゐるといふ。そして今年は六十年目に當つてゐるといふことである。城壁はやはり二間足らずの土山の上に一間あまりの高さに煉瓦で築いてある。城門も低くて小さいが奥行が深く、二重になつてゐて守り堅固になつてゐる。城内は専ら住宅で、商店街は城外西北方に發達してゐる。城内を歩いて感ずることは、家屋が軒が低くて丈夫さうに出来て居り、それ等に交つて富裕らしい構への住宅の多くあることである。も

一つ注目をひいたのは、街路が悉く剛い大きい短冊型の石で敷つてあることである。このデルタの洲に石といふものは少しでもあるわけはない。船運の便を利用して運んで來たものであるが、特にその材料の立派なのが注意を惹く。

城壁は舊態を存してゐるといつても、時代が新らしい故であらう。元來この島それ自身が新らしいものであつて、「在唐時始出海面」とある。七世紀から八世紀のことである。住民の棲込んだのは南宋の頃といふから、十三世紀の始め頃である。元の世祖の至元十四年に崇明州を置き、明の太祖の洪武三年（一三七〇）に縣を置くと記に見ゆるが、いまの崇明が最初からの縣城ではなかつたのである。沖積の所産であるこの島は、面白いことには、漸次に西から東へと江口の方面に移動してゐる。上流の西端が削られ、下流の東端が延びて行つてゐるのであつて、その變化は可なり著明で「原址在現在の地方之西很遠」と書いてある。それで設治以來縣治が遷ること五次の多きに及んでゐるといふ。いまはこの島が上海特別市崇明區といふことになつてゐる。

崇明で用事をすました私達は、保鎮からトラックに來て貰ひ、機關銃携帯の警備隊と共に島

の中央三分の一を縦走した。この車上の眺めが特自なものであつた。面積七百十方軒。佐渡より大きく、淡路より小さい、全面積が文字通りの平々坦々。そして感嘆すべきことには、殆ど寸地と雖も耕されてゐない地面はない。人口は八十萬あつて、人口密度は支那に於ける著しく高いものに屬すると書物にはあるが、現在は四十五萬程度だといふ。なにしろ農家の多いことが注目を惹く。目の及ぶ限りの耕地に到るところに散在してゐる。而も本格的な煉瓦造りのものが多くて、大きく、煉瓦壁で圍まれ、門のある、相當豊かと思はれるものが少なくない。貧農達が野棲的に近い生活をしてゐる島だらうと思つて來たのは間違ひで、人間くさ過ぎるほどの感じである。全島の収入が一千二百萬元だといふ。前記の四十五萬を人口数とすると、一年の収入額が廿七元弱となる。家族員数はわからぬが、ロッキング・バックの書物などを見ると、支那の農家を一般的にいつて四人が最も一般的で、三人乃至六人が約三分の二を占めてゐるといふことであるから、假に四人とすると、一家の年収入が百十元に近いといふ計算になる。東部中央支那ではこれが平均二百十三元餘といふ數字が出てゐるから、貧しい部落に屬する。作物は米、棉花、麥、大豆が主で、収入の少ないのは農耕法の幼稚な爲であるといふ。クリークは江岸地域と同様に盛んに通じてゐる。農民は年に一回その底の汚土を浚つて、それを

耕地に盛つて肥料にするといふ。一方にはクリークの保持加工にもなるわけである。肥料として人糞が尊重されてゐるのが注目される。江北の地方からこの島などを歩いて、便所の多いことが目立つて感じられる。この島の便所には特殊なところがあつて、書いて置きたいこともあるが、略する。

車道は廣くて可なりよく、トラックで迅走しても苦痛でない程度である。それが眞直なところは至つて短く、曲り曲つてゐる。計畫的に構築されたものでなく、里道が発達したもの、つまり造られた道路でなくて、出來たものであるからであらう。これが旅客には面白味を深くして呉れる。一望の眺めは冬景色で、成育してゐる作物はない。葦も枯れてゐる。農民達は枯葦だの豆がらだのの燃料を運んでゐる。樹木もちらほら見ゆるが森や林といふものはない。澤山に見えるのは墓である。崇明や保鎮の外廓部には特に多い。長い土饅頭で、それぞれ相當の地積を占め、一區劃をなして植樹されてゐるのも多い。この點などもあまり貧しい地方とは感じさせない。墓が多くて、それ等が耕地をふさいでゐるのは支那での一特殊風物で、旅行者には面白いが、土地利用の上で問題だといふ。或る調査では二・六パーセントを占めて居り、甚し、

い地方では七・八から九・一パーセントに達してゐるといふ。恐るべき面積である。島には鳥類が多く、雉子も多くゐるといふ。そして墓地の多いことが彼等の繁殖を保護してゐるといふ。途中で新開河鎮といふ大きい部落の裏側を走り通る。キリスト教會の高い尖つた屋根が見ゆる。この鎮の前後が匪賊の害の多いところで、鎮もしばしば襲はれて要人が殺されたさうである。

保鎮は小さい町で、城壁も無いが、茲には富安、大通の二つの紡織工場がある。錘数は併せて一萬二千位といふ。占領後直ちに軍管理のもとに鐘紡の手で操業され、廿四時間作業で能力が充分に發揮されてゐる。島内産の棉花全部を丁度消化する能力だといふ。

負傷した自衛團員が二人收容されてゐる。その日未明に匪賊が江を渡つて附近の村に襲ひ來り、機關銃をもつ六十餘名のそれ等に三十名足らずで應戦して、銃創を受けたのだといふ。島内にも匪賊、敗殘兵の輩が居り、四方あけ放しの江岸から上陸もして來るのであるから、治安防衛には骨が折れることであらう。揚子江には海賊に類するものが澤山にゐて、その實談をしれば聞かされる。江口の數多い洲にはそれ等が棲んでゐるのかも知れず、現在の住民中にもそれ等の良民化したのもあるであらうし、實際その類の行爲者も現にゐるかも知れぬ。自衛團

員の多くは島外から雇はれて來てゐる者のやうである。海賊のことで直に頭に來るのは八幡船である。八幡船と崇明島は縁の淺くないものがある。朝鮮沿海、渤海地方を侵した八幡船が、漸次揚子江地方から南支の方にその勢を向けて來るやうになつた場合、先づこの崇明島などはそれ等の目標地の一つになつたであらうことが想像出來る。

揚子江下流地方を歩いて來て、秋山謙藏氏の著書などで八幡船の論篇を讀むと、まことに興味深い。この邊で彼等の活動したのは明末嘉靖の後半頃、我國の天文永祿の頃だといふことであるが、「倭寇崇明より進んで蘇州城に薄り、大いに掠む」とか、「倭寇七十餘人、海門縣を犯し、舟を焚き岸に登る」とか、「江北の倭、通州の南門に突入し、民屋二十餘軒を焼いて去る」といふやうな引照文が、特殊な感興を私に覺えさせる。海門は島の對岸の縣城所在地、通州はその隣縣で、私の先頃來の仕事場であり、その南門もそのまゝ存してゐるのである。「浙江の倭寇、崇明縣を襲破し、知縣唐一岑之に死す」といふ記事がある由であるが、その崇明縣城が現在のものであるか否か、前述のやうに縣城は移動してゐるからわからぬ。現在の縣城の城壁はそのまゝ残つて居て、城門はいかめしく堅固に造つてあるが、城壁そのものは前記のやうな

構造のものであつて、その規矩といひ、大きさといひ、勇猛な八幡船ならずとも、一通りの流賊にも突入はさほどの苦闘に値しないであらう。

文化施設の相當に進んでゐることが私を感心させた。保鎮には紡織工場があるから、町に電燈の點くのは當然として、崇明にも電燈會社がある、實見しなかつたが無電臺がある。軍用の目的であつたであらう。崇明にも保鎮にも中學校があり、郊外にあつて何れも規模が大きく、そして立派である。保鎮のは私立民本初級中學と誌した立派な門屋に、私立保鎮初中補習班といふ新しい標札が掛けられ、身なりのさつぱりした兒童が楽しさうにしてゐた。獨り合點の氣味が多いが、島は豊かではないが、相當に富んだものが少なくなく、劣紳といふべき連中も若干居て——子弟を早稲田大學などへ留學させたものもある——このやうな私立の高等普通教育機關なども成立つてゐたのであらう、前にもいつたやうに、崇明や保鎮の街には、企業や、鹽業などで産を成したといふ者や、劣紳らしい者の居宅があちこちに目立つのである。東支那海に登る元旦の旭日を想像しつゝ筆を擱く。

(十五年一月)

塔

先頃仕事をしに中支に行き、九江まで揚子江の岸を五十日ばかり廻はつた。その間に三つのテーマが頭のなかに出て來た。塔、壁、墓である。そしてこれ等のテーマを忙がしい仕事をしながら、持ち廻つた。これはその雜記帳の數片である。

支那の塔に私は舊い思ひ出をもつてゐる。そしてそれは深いものである。二十數年前に私は最初の海外への旅をした。今度の仕事と同じくマリア病の仕事の爲だつた。季節は早春だつた。香港に碇泊してゐる間に、廣東見物に行つた。小さい河蒸汽は夜半に出帆して珠江を溯つた。上甲板のキャビンで眼をさましたらほのぼのとあけそめてゐる氣配であつた。そして甲板に出て私は始めて支那らしい景色を見たのだつた。簡単な景色である。あまり廣くない河面は褐色に濁つてゐる。岸はデルタ風の泥地で、樹木は少なく、草はまだ茂つてゐない。狐色の世

界だ。そこには低い丘がいくつか凸隆してゐて、それ等も狐色だ。人家がなく、勿論人氣ひとけはない。この簡単なそして大きい畫面に點描されて、低い丘の上に塔が建つてゐた。高くもなく大きくもないその灰色の塔が、曉の河岸に座はつてゐる風情が、私に修道僧のやうな感をもたせた。その以前に私は臺灣に旅したことがあつて、ここでは支那らしいもの、漢文や漢詩で感ずる氣持の多くのものが見られるといふ豫期で行つて、それはまるで満たされなかつた。臺灣には支那人の生活だけがあつて、支那の文化は無いのであるから、當然のことであつた。それで珠江の曉のこの塔のある風光が、私にとつて支那らしいものの最初であつたのである。

もう一つの思ひ出は、それから十年近く後のことである。眞冬の正月だつた。歐羅巴行の途中で、上海碇泊中に蘇州を見物に行つた。やはり夜半に汽車に乗つて夜明けに着いた。排日運動の盛んな市内や郊外を驢馬で歩き廻はつて、夕暮に歸りの汽車に乗つた。いまはあの鈴を鳴らして不器用に走る驢馬はゐなくなつて、當時城内を隔ててステーションと反対側の居留地にあつた旅館は、閩門外の繁華な場所へ進出してゐる。十数年前の私は、まるで野原のやうな居留地のその旅館をたち、洋車で城壁をぐるりと廻はつてステーションに出たのだつた。その途での風光が私にとつて頗る深い印銘を残してゐる。今度行つて當時に通つた道を考へてみ

たが解らない。閩門の邊を過ぎて、ステーションの方に曲る前のところである。正月三日で、冬の空は晴れてゐた。そして西の方に太陽が沈まんとして居り、東の空には低く大きく月が上つてゐた。兩方とも大きく輝いてゐた。そして眞右と眞左に大きい豪壯な塔が、その太陽と月とを背にして眞黒く立ち上つてゐた。左のは虎丘の塔、右のは北寺の塔である。何れも近くにあるものではないのだが、間近く見えて、然かもひどく大きく見えた。美しいといふよりは威壓を感じるやうな氣分だつた。私は、蕪村の句かに「菜の花や月は東に日は西に」といふのがあつたのを思つた。そして同じく日と月は西と東であつても、黒い大きい塔が菜の花に代はつて、徹底的に支那的であるこの冬の夕暮に、あゝ支那だ、といふ氣持がこみ上げて來るのだつた。

右の次第で、塔に私は特殊な印銘をもつてゐる。そして今度の旅でも、塔が至るところで私の氣持をひきつけた。先づ上海で南市の塔が、戦禍の跡が片付けられた地面に露出してゐるのを眺めた。それから江口北岸の南通に行つて、天生港に入る前に、眞平らな岸に、急に平凡を破つて五座の小山が几立して居り、その一つの狼山の頂に塔が立ち、劍山の上に氣象臺が建つてゐるのを眺めた。その翌日には狼山に登ることが出來た。續いて行つた杭州と蘇州は、塔の

名所といつてもよい程のところである。無錫では郊外の錫山に龍光塔がある。鎮江には金山寺の塔がある。南京から九江までの三日四夜の船旅は、河岸の大小澤山の塔を見せて呉れた。仕事休みのやうなこの船の上の三日は充分に風光を味はせて呉れた。九江と廬山でもいくつかの塔が眺められた。九江では甘棠湖畔の旅屋のヴェランダから、大きい湖水の向側に能仁寺の塔を眺めて数日を過ごした。その頃は月の美しい夜が続いた。

旅客としての私は塔のいろいろの眺め方をさして貰つた。汽車の客として上海から蘇州に入つた日は、夏の樹木植生の茂つた水澤地に立つてゐる遠見の山や丘の上に建つてゐる、いくつかの塔が先づ眺められた。運河の岸に聳ゆる黒い城壁の上から上部を出してゐる北寺の大塔を間近に見て驛に入つた。江上では大小さまざまの塔を迎え送つて、それぞれの味を感得した。船は夜航をしないので、江上岸邊の風物は残すところなく味はれた。安慶では、丁度仲秋満月の夜にその對岸に近く錨を下ろして泊り、迎江寺の大塔を月光のもとに眺めた。廬山からは、大江を遠景にして、その手前に展開してゐる水澤地を眺めて、その一點に聳えて見ゆる東林寺の古塔を遙かに望んだ。何れもとどりに味の深いものだつた。蘇州では北寺の塔、鎮江では金山寺の塔に登つて見た。塔上の眺めは、私にはたいしたものではなかつた。鎮江の美しい景色にしても、塔下からの眺めの方が佳いと思つた。

塔の多くは荒れてゐる。或は頂上が失せてゐたり、或は潰れたりしてゐるのが多かつた。木造部の存するのは稀で、登ることの出来るやうに修復されてゐるのは至つて少ない。元とか明とかの築構或は改修のものもあるが、それ等にも長髮賊の亂の焰禍を受けたのがある。併し何れも石造磚造であるから、その美しい様姿を保持し露現させてゐる。虎丘の塔は朽潰がひどくて、壁面の潰破は甚しいが、亂雜に崩れたその壁面に美しい彩色が淡く残つてゐるのはすばらしい感じであつた。舊い潰れかけた塔には、吾國と違つて苔が生えてゐない。湿度の關係なのであらう。そして矮木が生えてゐる。何といふ木か私は名を知らないが、何れも程よく茂つてゐる。或るものではこんもりと茂つてゐる。雜草はあまり多く見られない。表面近くにはそれ等の爲の榮養物が耗盡されてゐるのかも知れない。そこにはまた鳥どもが巢を營んで棲んでゐて、翔び廻はり、鳴き囀つてゐる。

骨董趣味、退嬰趣味と評されるでもあらうが、古塔が高く聳えて、それに矮樹が生じ、鳥が棲んでゐるのはまことによろしい心地である。靜かな空氣のなかで澤山の鳥どもが大小の窓から出入して、飛び廻はり、賑かに鳴いてゐる情景はよろしい。眞夏の眞晝の輝いた青空のもと

で、それで人氣のないところでの、このやうな古塔の情趣がこの上もなく愛された。蘇州で仕事のない一日、双塔を見に行つた。静かな區域にあつて、寺は跡もなく、塔は住宅の奥の地面にあつた。近所の寺の人が連れて行つて呉れた。形が珍らしく筆管状で、なほまた珍しいことに一對になつてゐる。この磚塔は人の丈に達しさうな夏草の茂りの裡に立つてゐた。草を席いて厭かず眺めて、勿體ないやうな氣持だつた。久しい前の或る年に遼陽で、白塔の下に住んでゐた友人方に泊つたことがあつた。夕暮に塔下を歩んで眺めると、塔を圍つて夥しい蝙蝠が翔び交つてゐて、塔と蝙蝠とが如何にも調和した氣分で愉快だつたのを思ひ出す。眞晝の古塔の小鳥は、また變つた情趣をもつてゐた。

建築のことには無知で、理解し得ないが、いろいろの型のものがある。併し今度の旅で楽しんで來たのは、すつきりと丈が高く、各階の高く造られたものであつた。どつしりとした錢塘江畔の六和塔を私は見なかつた。女性的なものと男性的なもののあるのを面白く感じた。前に書いた双塔などは、ほつそりとしてゐるに拘らず、剛直な男性的な感があつた。杭州の保俶塔は軟か味があつて女性的な美しいものといはれてゐる。これは私に深い愛着を感じさせなかつた。この塔と對照的な美をもつといはれた雷塔があつたのだが、先年崩壊してしまつた。私は

この雷塔の破片に刻された華嚴經の拓本集を持つてゐて愛賞して居り、年來なつかしみを感じてゐたものであるが、いまは見られぬのが如何にも残念である。蘇州の瑞光寺の塔を私は面白く思はなかつた。

支那の塔で感じた面白味の一つは、それが遠望で實際よりは大きく高く見ゆることである。蘇州の夕暮に虎丘の塔と北寺の塔が大きく見えたことを前に書いた。これは日と月の關係であつて、大きく見ゆるといふことが近く見せたのであらう。併し晝の陽光の下でもさうである。揚子江を溯つて江上から天生塔の五山を望み、狼山の支雲塔を見た時には、山全體と不釣合に大きく見えた。無錫の町から錫山の龍光塔を眺めると、山が小さく見えて、小塚の上に墓柱が立つてゐるやうな感じであつた。狼山の麓に行つて眺めても、塔はすべてのものを超越して大きく眺められた。併し山上に行つて見ると、小さいな、といふ氣持になる。錫山の裏の惠山に登つて龍光塔を眺めると、山とほど良い釣合になつてゐる。九江で甘棠湖の對岸を私はスケッチした。そして同じところで寫眞を撮つた。後日それ等を並べてみて、能仁古塔が大きすぎて描いてあるのを興味深く感じた。市街の中にある塔は、訪ねて行つてみると相當の遠いところから既にその所在がわからなくて、見當がつかかねるのが常であつた。見る者の心をつかむこ

と、また人の心をつかませる目的で造るものとしての塔に、この點にエフェクティブな特質があるやうに感じられる。

支那の塔の特色といふべきものは何だらうか。私は岑參の詩にある『塔勢如湧出。孤高聳天宮』といふのが、それで、如湧出、孤高、特に孤高といふことが一つの大きい特色で、造營のモチーフもこの孤高といふことにあるのではないかと思ふ。孤高といふのがモチーフであるとすれば、支那の塔ほどに成功してゐるものはないかも知れぬ。山や丘の上に建てたところは、更にこれを効果的にしてゐること勿論である。

如湧出、孤高であることを支那塔の大きい貴い持ち味とすれば、それが傾いたのは不興である。虚丘の塔は少しく傾いて危険だといはれてゐる。惜しいことである。これを西洋人等は斜塔といつて興味を持つてゐるといふ。恐らくピーザの斜塔から來てゐることであらう。下劣な悪趣味である。ピーザの斜塔は珍しいものであらうが、斜なところに美があるとは感じられない。もともと傾けて造つたのか、出來そこなつたのかわからないのだとも聞いてゐる。

支那の塔は大抵佛寺の塔である。佛教の隆盛であつた時代の造營物である。私は佛教のことにも建築のことにも無知であるが、印度の佛塔とはまるで違つてゐるやうである。北支那から

滿洲で見る佛塔とも違つてゐるやうである。その違つてゐるところに何か意味合がありさうである。

支那の塔と對角的に違つてゐるのが日本の塔である。いまは昔の話になりかけたが、淺草に陵雲閣、俗稱十二階といふものがあつた。あれがなくなつた後の日本には支那の塔に似通つたものはない、といつてよからう。支那の塔は概ね磚塔石骨であつて、日本の塔とは本質的に違つてゐる。印度の塔、支那の塔にならつて、それを木材で造り、固有の技工と固有の審美意識を表現させたものであらう。それが故にまるで別趣のものになつてゐるのであらう。日本の塔と支那の塔は周圍の自然との結びつきが違ふやうである。前者は美しい自然と調和するやうに造られてゐる。五彩の美しさが深い緑を環境としてひき立たされてゐる。之に反して支那の塔は自然を支配せんとしてゐるが如くに感じられる。山や丘に建てられてゐるのは、超越的で、自我性が強く感じられる。市街にあるものでも、それは君臨的である。江上から安慶の街を眺めて、この感じが深かつた。吾國で大和の平野を眺めて、塔が望まれる場合に、それは如何にも調和的に眺められて、君臨的ではない。この違ひは民族性によるのかも知れぬ。併しまた技工上のものかも知れない。支那の塔は、地震がないといふ條件のもとで出來てゐる。日本で磚

塔の孤高なのが造れるわけではない。日本の氣象制約のもとで、山の上に高塔が造られるわけもないのである。

伊太利を旅して、山の上に城があり、或は小市街が山の頂に營なまれて居て、城があり、それに高い塔樓があるのをしばしば見た。石灰石質の樹木の少ない山の上や、オリーブが美しく栽培された山の上などに、高い塔樓のある城を見る光景は珍しいものであつた。あの樓塔は支那の塔とはまるで別な感じである。北伊太利のポローニャといふ町には、恐らく世界中に類似の見られまいと思はれる奇観がある。それは四角柱狀の頗る高い塔が數本市中に立つてゐるのである。十三世紀頃には、城壁内に何十といふほど林立してゐたのであるといふ。當時の狀態を研究して、復舊模型を造つてゐる學者があるが、それを見ると、長話しの客の歸つたあとの煙草盆の光景であり、それ等の根元に家が小さく見えてゐる。何の目的で造り競つたものか不明だといふのも愉快である。こんな塔も、支那の塔とはまるで別趣のものである。

ゴックの大寺には塔が高く聳えてゐるのがあるが、これも別な感じである。西洋の寺でも城でも樓や塔は建物に融合してゐる。支那の塔はその屬する寺堂と融合してゐないやうに思はれる。寺は無くなつてゐるのが多いが、寺と塔が完全なものも多い。最も立派なものを鎮江の金山

寺で見た。江に望んだ丘の半面を埋めて、幾何あるか知らぬが、澤山の大小の堂閣が建て込められ、シムメトリーに配席されてゐる壯觀は美事であつて、奥手の頂に慈壽塔が建つてゐるのであるが、大きさの相關を超越して、塔だけが獨自の存在になつてゐる。日本の塔は大ききものでも融合された全體の一部になつてゐる。またそれが爲にその存在が生きて來てゐるやうに思ふ。法隆寺の五重塔はあれだけの大きさを持つてゐながら金堂や中門その他と美しい融和をなしてゐる。支那の塔は、寺は寺、俺は俺だといつてゐるやうな感じがある。

金山寺は元時代の創建だといひ、虎丘の塔は明の永樂帝の再建だといふ。近代諸朝の王者達は舊い寺塔を修復してゐるやうだが、自らのものを造營してゐないやうである。宗教の力のなくなつた爲だらうか。財力の爲だらうか。寺塔のやうなものは、王者、宗朝の力ばかりではなく、その時世の勢で造られたものでもあらうから、國の問題、國民の問題でもあらう。康熙乾隆の富と博識と趣味性を以てして、寺塔を造營したならば、すばらしいものが遺されてゐたであらうがと感ぜられる。

新らしい塔はないといつたが、實際に旅客の誰もが見てゐるものが二つある。黃浦江を上海に溯る途上に一つ立つてゐて、景色に支那らしい點景をなしてゐる。外觀は寺塔のやうに出來

てゐるが、水源地のものである。給水塔であらう。市民はウォーター・タワーと呼んでゐる。も一つは南京の忠靈塔である。紫金山の裾に明孝陵と中山陵が並んで美しい樹林になつてゐるところに、それ等と並んで梁の武帝の師友であつた寶誌公の靈谷寺がある。そこには豪壯な大寺堂がある。無梁殿といはれて無梁の石造で天井はアーチに造られてゐる。これが國民黨の忠靈廟になつてゐて、壁に陣歿戰士の名が刻まれてゐる。この堂の奥手小高いところに忠靈塔が建つてゐる。純支那風のコンクリート造で、碧瓦と五彩金飾が四邊一帯の樹林に映えて、まことに美しい。無梁殿を巧みに用ひ、それにこの高塔を配した手腕と頭を私は感心してゐる。

壁

支那をあるいて、日本で見られぬ面白味を感じるものの一つが壁だ。

支那の都市は城廓都市であつて、大小の都市が大體城壁で圍まれてゐるが、北支の平原では農村もそれぞれ相應した土石の高壁を圍らしてゐるのが多い。京漢、津浦兩線を黄土大平原を貫いて走る車窓から眺められる一つの特殊な風光が、樹木の極めて少ない、眞平らな或は起伏してゐる穩かな丘に、土壁に圍まれた村のあることである。それ等は至つて簡単な場合もあるが、堅固さうなものも少なくなく、相當な樓門の構へのあるものもある。軍隊、亂賊、匪徒、群盜等に對する防備であることはいふまでもなからうが、あんな様式のもので實際に役に立つものかと思はれるものが多い。英人スミスの『支那農村生活』に、武装の優秀でない攻撃者、侵害者等は防備の弱いところを選んで仕事をして進むから、守るといふよりは、攻められないと

いふ利得があるのだと書いてあつた。

支那では個々の住居が土壁戸塀で圍まれてゐる。そしてそれが悉く人の身長以上である。村を通つてみても、道の兩側は壁である。大小の都會で住宅地、裏通り、横町に入れば、到るところ壁の続きである。高い壁の内部はまるで見えない。お寺でも廟でも同様であつて、境内は見えない。

この種の壁塀は支那獨自なものだらう。そしてその特質はヴェリエーションの極めて少ないことだといつてよからう。必らず一定の高さをもつてゐて、歩行者の一倍半乃至二倍の高さがある。面が平面であつて屋根以外に修飾がない。屋根はあつても狭い。そして窓といふものが無い。門がまたこれに應じて特殊である。何れも小さくて。間口が二間を超ゆるものは稀である。堂々たる構へのものではなく、塀から多く上に延びてゐるものはない。その門はまた閉ぢてゐるのが多い。開いてあつても、直ちに壁に突當るやうになつてゐて、人は右か左に廻はるやうになつてゐる。壁が無ければ門内に影壁が立つてゐる。兎に角、門内は通行人には見えぬやうになつてゐる。更にも一つの特殊なことは、大體家が平家であつて、二階家は特殊なものに限られてゐる。それ故に通行人には、塀以外に何物も見られない。地内に於ける家屋の密度、

品質、その他萬事がわからない。何も彼も想像が出来ない。日本では開放的であつて、大體の想像がつく。見榮を張つて門内だの玄關前を派手に仕掛けたり、得意な地内や庭園の一斑を垣間見せるやうな具合にしたりもさせられる。庶民區になると、通行人に床の間の掛物まで見ゆるといふ次第であるのと、正に反對で面白い。プライベート・ライフといふものは、本當に支那で行なはれるやうに思はれる。

先日北京で、なるほどと思はれる話をきいた。華北交通會社で市内に家屋と空地を手に入れようとしたが、何處にどんなものがあるのか容易にわからない。飛行機から空中撮影をして見當をつけたといふ話である。

唐詩の本を読み噛つてゐたら、杜甫の夏日李公見訪といふ詩に『……傍舍頗淳朴。所須亦易求。隔屋喚西家。借問有酒不。牆頭過濁醪。……』といふ一節がある。隣り同志は心安い淳朴なつき合ひをしてゐる。酒は無いかと家から家へと呼びかけると、塀越しに濁酒を届けてよこす、といふ意味だが、その塀越しに話をしたり、濁酒が来るといふことが、現實のこととしては私に合點が行かぬ。門から門を通つて行き、濁酒も門から門を経て来るのを、詩ではかうい